

国会図書館蔵明治期都々逸本（一）

— 明治三年— 明治十四年 —

菊池 真一

国会図書館所蔵の明治期都々逸本のうち、刊行年の明らかなものを、「近代デジタルライブラリー」によりつつ、年代順に翻刻紹介する。今回は、明治三年から明治十四年まで。

国会図書館蔵書は、著作権の切れたものについては、翻刻許可を願い出なくても、自由に翻刻してよいとのことである。

「一」内は角書。振り仮名は特別なものを除いて省略した。

明治三年

一 『新令都度逸』

（国立国会図書館蔵。請求番号 YDM204523）
明治三年四月刊。竹堂梅兄著。同じものが、東京都立中央図書館特別文庫東京誌料（5644118）にもあるが、内容が若干異なる。

新令都度逸 初編（表紙）

悟一真

墨塘酒人著

新令都度逸 初編

東京 松延書堂蔵（見返し）

酌は若婦（たぼ）肴は作身（さしみ）酒は爛ちん猫老婆（ばゝあ）と詠（いひ）たりし児童（こども）の昔から酒宴の友なる松延堂は三筋の糸弾（ひけ）ども酒の跡をば引かず好こそもの浄瑠璃端唄流行節の梓元（はんもと）にていつも魁有利（かうめう）せんと自

にまたも名差の盃おさへもならず承侘（うけ）し時お掌（て）が鳴ります。用（しよう）の繁きに兄梅兄へ著作（おあい）をゆだねつ一寸お銚子と立ものは隅田（すだ）が門辺の戯者（たはけもの）なれ

菊 露香誌（一才）

（絵）
松延はん

悟一真

新令都度逸

梅兄著（一ウ）

（絵）

景年画（二オ）

馬車や蒸気じやたよりがおそい鉄炮玉ではかただより

（はやし）そのことぞんしんてりがらふくうほじやないぞへてつば

つづ（二ウ）せつせつ

便理自在の国土にや住めどまゝにやならない色のみち

（はやし）ときをまたんせきをながくきんとほどとてまよはせな

諫語千度に私しや及べども情夫（ぬし）は不門の色狂ひ

（はやし）いけんもたがひのためじやものうわきもたいてにしたが

よいさつさどふでもよい（三オ）

腕（かいな）を枕下にそと差込んで強（じつ）と見詰るぬしの顔

（はやし）ぐちはふじんのつねじやものよそのうはきはやめしやん

せ 私しや亥のとしぬしや午のとし午亥（むまい）（三ウ）中だと他

（ひと）がいふ

(はやし) 珍々甲鳥差向ひさつさどふでもい
ふつとかけたるわたしのなぞのとけてうれしいけふのしゆび
(はやし) 三春行楽在誰辺(たがへんざい) かはりやしやんすない
つまでも(四才)
計知(けち)と邪推の(しんにう) かけて野暮といやみの編かむ
り
(はやし) 字解が教句ではよるしさつさどふでもい(四ウ)
誓言不変の二人が中へ誰が水さしてか此したら
(はやし) おまへの意(こゝろ) は秋の空変りやすいは蛇の眼傘
(五才)
君が規則のとゞかぬゆへに見世や叱手(やりて)にわらはれる
(はやし) 楷婆(かいば) や若いしやどふでもい足下ひとりめざ
す敵(五ウ)
樂も浮気もしぬいたからはじめな夫婦でもかせぎ
(はやし) 家職を大事身をまもり朝寐奢酒はよしなせ(六才)
心あれども人前不言目と眼で承知の恋の智慧
(はやし) こゝがいのちのいろのみちけどられまひぞへおたがひに
までどこぬ夜になくほとゝぎす(六ウ) なみだひやつく枕がみ
(はやし) 深情紅鬨一個娘来たらぬ男子はばかなのか
君私睦情(りくせい) してまた苦を求め今じや悔悟のこのおもひ
(はやし) かたときはなれちやぬにれなひぐちもみれんも恋のじや
う(七才)
乗ればもちやげる腰をば居へるあれさいきます人力車
(はやし) 一里の価が五十疋東西南北客しだい(七ウ)
弓袋刀鞘平治の皇土何国(いづく)の隈にも鬼はなひ
(八ヤシ)とざしせぬよのたかまくらあれもういく代もおたのしみ
(八才)
気証誓紙を此手で書けと親は手ならひさせせぬ
(八ヤシ) 心とてにはのとりちがひ漢字がてん書でわからなひ
ほれられすぎたか根岸のりやうへ(八ウ) 恭順謹慎若隠居
(はやし) うきよはなれたわびずまひすてゝもわすれぬ恋のじやう
す糸の末まであんじるわしがうはきなおまへになぜほれた
(歎願千度も馬耳東風てへげにおやめよくいちらし)(九才)
万里の外でもかべ一重でも恋にへだてた所はなひ
(はやし) ろんとん糸いらんむすこひや可愛はいづこも色のみちさ
つさどふでもい(九ウ)

丸い鶏卵(たまご)も切よで四角車もいびつじや引かれな
(八ヤシ) むりもたいてにははしやんせぜゝさへしかくじやつうよ
せぬ(十才)
鶏犬鳴じて夜も深々と積るはなしの忍び声
(八ヤシ) あれねなんすかおきなんし正月ならで暮の金
疑わくするはづぬしや浮気者誓紙を(十ウ) 変約さしやんすな
(はやし) 女心はぐちなものうたがひぶかいも恋のじやう
よわいからだに勤をさせて苦勞まさすがいぢらしい
(八ヤシ) ねんのあく日はいつじややら一日千秋まちどふい(十
一才)
翠黛紅顔おめへのけて何で浮気をするものか
(八ヤシ) 気やすめいふのがぬしのくせわすれしやんすなその言葉
(十一ウ)
私しや野ずへにすむみのむしよ恋しなつかし月の顔
(はやし) 閨房(ねや)の燈下にひとりむし君(ぬし)の来ぬ夜は
身をこがす(十一才)
まつも別れもまた逢坂の恋の関所は越かねる
(はやし) 悟れば一穴迷やぐち(十二ウ) ほれてもとめた此苦勞
松柏緑頭千歳不変こゝろがわりのないやうに
(八ヤシ) まつのちとせのともしらがすへはたかさこそつてみしよ
(十三才)
とかく浮世は雪踏のうらでかねがなければなりはせぬ
(八ヤシ) ちやらじやないないかんじよづく高位も(十三ウ) 下
賤も是づくじや
ぞつと素顔の別品無類どこの手活の花じややら
(八ヤシ) おめかかてかけかけいしやじやかたぬきかきつねかごく
らくか(十四才)
はやくお店の通勤やめて昼夜はなれずぬしの傍
(八ヤシ) はだとはだとをよせなべでつツつきあふたらうれしかる
胸に十分思ふたことも逢たまぎれか(十四ウ) 口ちへ出ぬ
(はやし) 娘児(ぢよし)が言葉は有顔(かほにあり)さつしてや
らんせおほこぎを
たとへ山谷片境なりと恋夫(ぬし)と世帯がして見たい
(八ヤシ) てなべさげよがはたおるがくわちやのてつだいでてもよ
い(十五才)
わつつちが歎願浮気をやめてぬしと産業はげみたい

(はやし) 野暮な夫婦でともかせぎ小金もはめたら(十五ウ)うれしがる
 しばしのうちだよ身を大切にちよいと往て来る蒸気船
 (ハヤシ) 万里一走わけはないあめりかまでは二三日じゃ(十六才)
 情夫(ぬし)の英智にたらはぬわたし叱つて情をかけしやんせ
 (はやし) 不斗(ひよん)なことからのしまつほれざ他人でくらすだろ
 色狂遠島原程吉原而(で)女戯迷(たらし)之浮気者
 (ハヤシ) すいつけたばこがあめのやうふるももてるもれこしだい(十六ウ) さつさどふでもい
 あなたの気憶は唐糸木綿? がなくつて切れたがる
 (はやし) 正札安直おつかぶせそさまがとんまのかいかぶり(十七才)
 外面如菩薩内心如夜叉ほれて今更此苦勞
 (ハヤシ) いつてへおめへがちよいがよりちみちあげたがうらめしい(十七ウ)
 舌(ひた)の戦争勝敗いかに我子(がき)に応援親同士
 (ハヤシ) かなぼうひきずりおさきものしりもながやのあけばなし(十八才)
 心浅瀬の女子(おなご)の念の竿もとゞけばふかくなる
 (はやし) 夜更の忍来しゆびはよいあいづはたがいのむねにある
 雲霧実晴色をばすてゝつむりおるせどわすら(十八ウ) れぬ
 (はやし) 秋空男心にくらしやみれんじやなけれど顔みたや
 茶人好みと笑はゞわらへ松に来てなく鳥もある
 (はやし) 千心一知の世のならひたてくふむしもすきずきじゃ(十九才)
 ぶたや牛馬じやまた喰ひたりぬ蛇やとかげのごたごた煮
 (はやし) あかいぬべつびん上あちだてんちんこんにやア(十九ウ) ねづみなべ
 ぬしとわたしは車の両輪真棒次第で身ももてる
 (ハヤシ) あなツペへりやあさねぼううはきをやめてかせぎましょ(二十才)
 牛のおさしに赤犬味煮馬のてりやきぶたのぬた
 (はやし) ちやぶだいこつぶの大一座ケレスにあはもりぢんぢんびやらしやめんげいしやでびはぢゆんぢゆん

了古門ノ竹堂梅兄著
 同叟齋景年画(二十ウ)
 明治三千年四月
 東京 松島町 伊勢屋庄之助板(奥付)
 本書は、国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

一「美国振小倉都々逸」

(国立国会図書館蔵。請求番号158/118)
 明治三年七月序。作者不明。柱は「み国ぶり」とある。挿絵は二代歌川国輝(一曜斎国輝)のもの。同じものが関西大学図書館にもある。図書番号は(和装)011655/4/1。

「続変態百人一首ノ第八十冊」美国振小倉都々逸(題簽)
 美国振小倉都々逸 全(題簽)

今。世によこ文字の。広くおこなわれ。人々も。言の葉も。漢語となりける。さるを此文つゞりぬる大人は。いにしへのみやびをわざと好て。はやくよりいとまめやかに。つとめまなひて。其すぢのふみをも。広くよみあきらめて。哥もよくよみ。ふみもことによくかきて。(一才)かの。かいなての。世の人にはこよなく。なむ有けるを。いぬる日美国ぶり。ちやつ。いふこの文をはし書してよと。ゆるるまゝに。ひらき見しに常の言の葉にたがへて。世の人の心に思える事を種として。花に啼鶯ほふとばかり口こもり。おとめの情緒。水に住む蛙の名さへかゑると?へ。きぬきぬをかなしむ(一ウ)さまなど。のこりのふ三筋の糸のてにおはに。鬼おもひしぐおのこも。とりどり?手やう?なんか。げに。おのこ。おんなこ。の中をさへ和らぐ国の大和歌小倉百首に準しは。是なん沓もあたらしければ。冠の用をなすとかや。かぼゆるまゝに。まづ喜びがてらかくなむ
 明治三庚午七月 逸々の屋(二才)

和歌三神
 応好曜齋画
 人丸大明神

泣てあかしに夜もほのほのとあけてかなしき憂わかれ
玉津嶋大明神

かけて(二ウ) たよりをたゞきいの国はれてあふせはたまつしま
住吉大明神

更てこつそりよせ来る男浪きしの姫まつ幾夜ぬれ(三才)

百人一章道化小倉都々一
天智天皇

小田のかり穂にふくとまよりもあらいおまへの捨言葉
持統天皇

夏は来にけり皆白妙の(三ウ)
ゆかた来て出る茶屋娘

柿本人麿
足びきの山鳥の尾のながし世をどぶしてき人で寝られやう

山部赤人
田子の浦船こぎ出てみなよふじの高根の雪げしき(四才)

もみぢふみわけ啼鹿よりもあきといふ字がわしやかなし 猿丸太夫
かさゝぎの渡す橋さへ中絶果て来ぬのはあきたかじらすのか 中納言家持

ぬしのあたまをふりさけ見ればみかさの月より尚ひかる 安倍仲麿
赤い前だれ見事な茶摘よい宇治山だと人はいふ 喜撰法師(四ウ)

花のいろ香のうつるを見てもあんしらるゝよ人ごゝる 小野小町
往も帰るもさくらをかざししるもしらぬも酒きげん 蝉丸

堀を目あてに漕出しゆくと人にや告なよこの小船 参議篁
雲のかよひ路風吹とぢよ乙女のすがたがおがみたい 僧正遍昭(五才)

陽成院
みなの河ではわしやないけれど恋ぞつもりてふちとなる

河原左大臣
しのぶもちずり夫りや誰ゆゑにみだれて涼しいあらひ髪(五ウ)

光孝天皇
君がためならわしや野に出て若菜つむともいとやせぬ

中納言行平
立別れてもいなばの山のまつと聞てはまたかへる(六才)

神代も聞ないおまえのうはきわたしや小はらが龍田川 在原業平

岸によるなみ小ぶねにゆられゆめのかよひぢ三谷ぼり 藤原敏行朝臣

なにはがたみじかき芦のふしの間也とどうして逢ずに過ぎりやう
伊勢

身をつくしても逢ねばならぬ人にいわれた事もある 元良親王(六ウ)

今こんとて私しをよもやにかけてもはや有明鶏がなく 素性法師
こよひしので逢坂やまを人に知られてなるものか 三条右大臣

秋の草木のしほむを見てもなみだこぼすか泣上戸 文屋康秀
銭はなくなる女郎にやふられ我身ひとつにあきれがほ 大江千里(七才)

菅家
酒のさかなはまつとりあへずあきのもみぢのにしきうめ

貞信公
峯のもみぢにあかるい路を小倉山とはたがいふた

中納言兼輔(七ウ)
飲どもつきないこの泉川こひし鴨なべやき肴

源宗行朝臣
冬の薄衣のさむいにつけて人のくさめもみゝにつく(八才)

どれにしやうか格子のさきで霜のしらぎく目がうつる 凡河内躬恒
朝のわかれがないものならばなんのきはふ明の月 壬生忠岑

有明の月と見るまでよしのゝ里にけさはしら雪ふり積る 坂上是則
利上利上にしがらみかけてなかれもあへない質ばかり 春道列樹(八ウ)

光りのどけききんくわん天窓(あたま) 風もひかぬに鼻が出る 紀友則

うたえうたえの声たかさごに枝もさかえる松づくし 藤原興風
花の姿はふり捨てたれどどこかむかしの香がのこる 紀貫之

まだ宵と思ふ間もなくもう明の空雲のいづこに月やどる 清原深養父(九才)

文屋朝康
風に吹るゝ白露よりも人の心はちりやすい

右近
忘らるゝ身はしかたもないがそれじや誓ひの神よごし(九ウ)

参議篁
小のゝ篠原しのぶとすれどわかれを忘れちやくちばしる

平兼盛
忍ぶこひぢもつい色にでゝ物やおもふと人がいふ(十才)

人知れず思ひ染しかもう何(と)や角(かふ)とうき名がたつては
なほやめぬ 壬生忠見
末のまつ山なみこすとてもかはりやせぬぞへ我が心 清原元輔
よたか切みせむかしはものをおもわぬむくひのこのよこね 権中納
言敦忠
なまじあひ見て猶ものおもひ知らぬむかしにしてほしい 中納言朝
忠(十ウ)
いろよ酒よの身のいたづらにあはれなすがたもこゝろがら 謙徳公
かぢを絶たる私しやすて小舟ゆくへもしらずにこがれある 曾根好
忠
すけんそめきの人さえ見え秋はさみしい格子さき 惠慶法師
酔たまぎれに投(ほを)ツた茶わんくだけでいまさらものおもひ
源重之(十一オ)
大中臣能宜朝臣
衛士のたく人と私しのむねはひるはきえてもよはもゆる
藤原義孝
露のいのちをながくもがなとおもふもおまへがあればこそ(十一
ウ)
藤原実方朝臣
えやはいふきの三年もぐささしも名物よくもゆる
藤原道信朝臣
あけりや暮るとさて知りながらかねやからすがうらめしい(十二
オ)
ひとり寝る夜のそのあくる間はいかにひさしいものおもひ 右大将
道綱母
別れまひぞや行すゑまでもかたひちかひのいれぼくる 儀同三司母
夜着やどてらも久しくなればいまにながれが来るだらう 大納言公
任
とてもこのよのおもひでならばじんきよと食しやうがして見たい
和泉式部(十二ウ)
めぐりあひて見しやそれともわからぬうちに主ははづして雲隠れ
紫式部
わたしやおまへに気がありまやまいまさらいなどは言しやせぬ 大
式三位
まてど来ぬ夜はかたぶくまでの月のからすや明のかね 赤染衛門
あまのはしだていくのゝみちの遠いたびぢをふみのつて 小式部内

侍(十三オ)
伊勢大輔
ならのさくらは色香もよいが八重といふ字が気に入くはぬ
清少納言
とりのそらねははかりもせうがぬしのそら寝ははかられぬ(十三
ウ)
左京大夫道雅
たつたひとこと人伝ならでいふておきたい事有
中納言定頼
宇治の川ぎり夜はあけはなれせゞの網代が見えわたる(十四オ)
夜着やふとんもあはれとおもへわたしやひとりで床のばん 大僧正
行尊
恋にくちなん名はをしけれど今さら意地でもきれられぬ 相模
夢でなりともあはしておくれゆめじやうき名はたちはせぬ 周防内
侍
わたしやすゝきの野にすむうさぎこひしなつかし夜半の月 三条
院(十四ウ)
ついた事にも言葉をあらしかほにもみぢをちらすのか 能因法師
銭のないときやいつでもおなじわたしやまいにちあきのゆふ 良暹
法師
ぬしのこゝろと門田のいなばいつしかあき風ふいてゐる 大納言経
信
まくらひきよせかけしやそでのぬれてうれしいとこのうみ 祐子内
親王家紀伊(十五オ)
下戸のお酒と外山のかすみたゝずとやつぱりのむがよい 前中納言
匡房
源俊頼朝臣
なんのあたまとはつせのあらしはげひかれとは祈りやせぬ
藤原基俊(十五ウ)
ちきり捨ても猶あをあをと露をいのちの艸のいろ
法性寺入道前関白太政大臣
雲井はるかに帆の影見へておきつしらなみたつかもめ(十六オ)
いわにせかるゝあのたきがはのあれたもすゑにはまたひとつ 崇徳
院
いくよくよになく声きけばちとりとおもへど気がわるい 源兼昌
雲のたえ間をまれ出るつきにさえてきこゆるかみぎぬた 左京大夫

顕輔
 まくらはづしてしまだのかみをみだしたあげくは気がおもひ 待賢
 門院堀川「(十六ウ)」
 めしを帰してれんじを見れば小田のありあけなほのこる 後徳大守
 左大臣
 憂きにたえぬかこのゆきかぜにはつ花なみだてひくくるま 道因法
 師
 竹のはしらをなにいとほふぞやまのおくにもしかはすむ 皇太后宮
 太夫俊成
 つれなかりける女郎をかえばねやのし「(十七オ)」はひまなもの 俊恵法
 師「(十七オ)」
 西行法師
 かほちや顔してなみだをこぼし月やはものをよくできた
 寂蓮法師
 つゆものこさず「(十七ウ)」皆くひつくし秋のゆふめしよくすゝむ
 皇嘉門院別当
 あしのかりねの一とよなりとあふてはなしかして見たい「(十八オ)」
 式子内親王
 なんのたまの緒たへなば「(十八ウ)」たえねあはでくらうをするに
 やまし
 殷富門院大輔
 めしに見せばやぬれにぞぬれしあめのよあけのはなのいろ「(十九
 オ)」
 きりぎりすなくや霜よの淋しいどてをどふしていまごろかへさりや
 う 後京極撰政太政大臣
 沖のいしかやわたしのそではかはくひまさへなくなみだ 二条院讚
 岐
 あまの小船のろかいをおしてすまや明石のわひずまひ 鎌倉右大臣
 山のおきかぜ夜はしんしんとふけて身にしむ遠ぎぬた 参議雅経「
 (十九ウ)」
 見すてられゝばわしや墨ぞめのそでとかくこはきめて居る 前大僧
 正慈恵
 やくやもしほの身もこがれつゝぬしをまつ尾のうらざしき 入道前
 太政大臣
 うしと見し夜も今日びになつてみれば恋しいことばかり 藤原清輔
 朝臣

庭のあらしにふる雪ならでつもるわたしのものおもひ 入道前太政
 大臣「(二十オ)」
 従三位家隆
 ならの小川のゆふふくかぜに夏もすゞしくとぶほたる
 後鳥羽院
 あぢきなき世とあきらめながら「(二十ウ)」たれしもお金はほしい
 もの
 順徳院
 もゝしきやふるき布子をかさねぎしても冬の夜かぜは身にあまる「
 (二十一オ)」
 情深草もゝ夜のおもひ積り積りし雪の道
 かたいばかりが女ぢやないぞ小野の小町のすゑを見な
 曜齋老人筆「(二十一ウ)」
 本書は、作者・出版社不明であり、年代から考えても、著作権は
 消滅していると考えるのが常識的判断である。

明治四年

三『支那西洋』国字度々逸』

明治四年序。酒気亭香織序。請求番号 120 - 146。

「横文字」詩入都々逸 全「(表紙)」

「支那西洋」国字度々逸初編序

俣よ三度の旅笠も。開化して走蒸気船。日本で呑し酒の酔。まださめ
 め間に。外国へ写りかはりし流向は、寝ころびながら。横文字を。
 読や唄ふの大一座。唐詩ざかなに呑直す支那西洋の二ツもの御口に
 叶はず。二編三編直あたらしき文句を撰みて調進致たせど御耳古く
 とおしかりあらば葉唄浄瑠璃取交ておいおい出板仕る本屋主人に代
 りてスペルをのぶるはドロンケン組の次の間居る

明治四未秋 酒気亭香織「(初一オ)」

O MO O KOKORO O MEKA O DESIRASE (おもをこころをめかを
 でしらせ)

此日 遊 美女此時歌舞入娼家

I TSUKAHONDERUHANASUSUKI (いつかほこるはなすすぎ)」

(初一丁)
 A KEKAZENOMINISIMIDMITOHUKEYUKUMA・NI (あまかぜの
 みじこみじみじかけゆへきよし)
 寂寞向秋草悲風十里来
 WOMO H DASITEWANERARENA H (おもひだこつはねらななご)
 (初二丁)
 HITONOKUTIDINIWUTURIGIHAYYAKU (つゝのくちびりこころ
 ちやく)
 酌酒与君君面寡人情翻覆似波瀾
 SA H TEMAMONAKUTIRIHANADI (ちこつままなへたるはなご)
 (初二丁)
 未の MATSUYAMA 浪越しし中
 座観垂钓者徒有羨魚情
 A DASI ちほむこせ MOTANU (初三丁)
 妹背山とつTANOSI 中を
 風起春燈乱江鴨夜回懸
 TAKEWOKA H TARUBIYOONOONOORAWA (たけをかいたるび
 ちのびのひなせ)
 玉関殊未入少婦莫知嗟
 TASHIKANAKAYO H SOZOMEKATA (たじかなかちこつまめが
 だ)
 (初四丁)
 OOWAKAWAWOTOKONOTSUNETOWA H HEDO (おもはせおもじ
 るこなむせこく)
 謫居海無情 中我回過
 YOKUNIYAKATAGINISHITEHOSHI H (ちよひやかたぢこつほつ
 こ)
 (初四丁)
 FUJINO 寸地寸地地 A REDO
 誰憐不得意長劍独歸来
 いわでせけんを SI のら YAMA (初五丁)
 美濃がみの薄き TIGIRIYO 関守入じ
 忽聞歌古調帰思欲沾巾
 HEDATE ぬわたる不破の目 (初五丁)
 OOKIKUSANOYOHUNIOHMAYEMO (おもへれのちよひよきをまぐも)
 のちんちれこそせ
 此翁回頭眞可憐伊昔紅顏美少年
 WAKA H TOKIKOSONIDOWANA H (むかこちちよひよひはなご)

(初六丁)
 MATAKURUTOOHMO H NAGARAMOWAKARENOSURASA (また
 くるともまいながらまわかれのひなせ)
 去国魂已遠懐入波空垂
 MOSIMOTOOHKUYE H KIYASENUKA (まこまよをくくちせやせ
 めか) (初六丁)
 馬車 〆 MUMA 〆 ち NAKERE ぶなごせ
 駒馬籠門北風籠馬袋
 KESITE 外おもは回れやせめ (初七丁)
 TO O KUHANARETE へ TA H TOKIWA (よひへはなごつた
 いよれせ)
 回頭 四時一瞥
 SIYASI Z KIYAOMITTEKIOH HARASU (こせことませしのみこきを
 ちよち) (初七丁)
 YAMOMEGURASINOWATASINOOTIYE (やせめへふじのわたつ
 のひなく)
 双燕双飛繞書梁羅帷解被鬱金香
 SU O KUHUZUDAMENOSURANIKUYA (ちよへんひせめ のひな
 へや) (初八丁)
 MEOHTOGURASINOZUBAMEDESAYEMO (めいへふふじのひせめ
 くれくせ)
 此郷多 王慎勿厭清貧
 TABINOSUMA H DEKURO O SURU (たひのちまごりへんひなせ)
 (初八丁)
 SIASIN ちよひのひせはなごなごせ
 皇朝無艷事 血鏡 書 書 鏡
 KAKETE ちよひの TEREGARAHU (初九丁)
 KIMIOH ちよひの夜は KIMO のちんちれ
 載歌春興曲情 遠為知音
 用事たのむせ AHTOYA ちれ (初九丁)
 NE Z GATODO H TENA H DARETASUKI (なながよこつまごだ
 わちちれ)
 願作真松千歳古誰論 昔權一朝新
 MAMANINARUMINOSOMEYUKATA (ままじなるものそめめかた)
 (初十丁)
 SINOBU かわなれ SAWABENO

御届明治十一年二月二十日
編輯兼出版人 東京馬喰町三丁目十四番地
吉田小吉「(裏見返し)」

吉田小吉「(裏見返し)」

「吉田小吉編輯」(懷中)開化度々一「一」(表紙)

心がらとて他人の中ではぢをかき染土かつぎ「(一オ)

いろはせず京とむすめ今じやアイウエオのサシスセソ「(一ウ)

むかしや色恋今金次第程や気りやうはすたれもの「(二オ)

新聞を見れば世間の善悪(よしあし)ばなし是じやならぬと氣を
る「(二ウ)

互ひの心にエレキを仕掛ケ人に知らせずこつそりと「(三オ)

昼夜はたらく時計の針もねぢがゆるめば狂ひ出す「(三ウ)

極樂世界を不足のやうに闇(くら)い地獄の旅かせぎ「(四オ)

外に瓦斯燈うちにはらんぶ開化の御代にはやみはない「(四ウ)

恋しいお人に途中で出合言葉かはせぬ馬車のうへ「(五オ)

はりがねが口を聞よな世の中なれば写真にくぜつが言せたい「(五
ウ)

意気なざんぎり小いきな坊主鬻の有のは二タごゝろ「(六オ)

新聞に浮名立られ多くの人に笑はれるのも親のぼち「(六ウ)

空にや風船陸には人車川に汽船の備へある「(七オ)

死んであの世と能言ものゝ命ありやこそ末もある「(七ウ)

色の世界と言のも道理五しき色どる万国図「(八オ)

女郎の誠とたまごの四角なくとも三十日にや月が出る「(八ウ)

ぬしが道理か私が無理か是非の裁判してほしい「(九オ)

逢た初手から袖ない人とおまへの姿で見えておいた「(九ウ)

おまへの心と当時の名所替り易いが氣にかゝる「(十オ)

かみのお世話の末々までも届くゆう便早だより「(十ウ)

御届明治十一年二月二十日定価二銭
編輯兼出版人 東京馬喰町三丁目十四番地
吉田小吉「(裏見返し)」

「吉田小吉編輯」懷中開化都々一 三号「(表紙)

開化の生酔洋酒を飲んで西洋料理でへどを吐(つく)「(一オ)

姿ばかりの写真はいやよ心の底までうつしたい「(一ウ)

人情を摸(うつ)す開化の新聞咄し是も婦女子の教導師「(二オ)

眞の開化におもむきたくは義理も情を尽さんせ「(二ウ)

ぶらつく様でもアノ風だまは末にくゝりの糸がある「(三オ)

ぬしは堅氣で私や浮気性そりの合ない杉と松「(三ウ)

義理を立れば恋路が廢(すた)る心二ツに身は一ツ「(四オ)

短い様でも隅々までも届く保護の櫛の棒「(四ウ)

参らせ候と文力キクケコどうか首尾してマミムメモ「(五オ)

十五夜に兎飛出て空打眺め今宵はお月が休日(どんたく)か「(五
ウ)

光り輝やくれん隊旗は朝敵攻罰(せいばつ)するがため「(六オ)

行烈で前をはらつた大小名も開化の余沢で樂歩き「(六ウ)

山師の易者は算木と山氣当り外れも時のうん「(七オ)

鎧兜は昔の人形今はひやばに筒袖(つつつぼう)「(七ウ)

化粧(つくる)芸者は素顔になつて路次の便所が白くなる「(八オ)

問ふにおちづ問ずに落ると遂知りながらのろけ咄してさぐらるゝ「
(八ウ)

浮気止るとそりや甘口な浮気するのも家業がら「(九オ)

赤い上着は恋路の教師色の学校貸さしき「(九ウ)

力揃へば踏石さへも揚てゆるがすしもばしら「(十オ)

ひやかし雀の飛去る跡は赤いしかけを着るかゝし「(十ウ)

御届明治十一年三月廿七日
編輯兼出版人 東京府下第一大区十二小区馬喰町三丁目十四番地
吉田小吉
定価二銭五リ「(裏見返し)」

「吉田小吉編集」懷中開化都々一 四号「(表紙)

通ふ廓の貸座敷さへ写真で見立る格子前(さき)「(一オ)

西郷究て篠原行ば落る涙は桐野あめ「(一ウ)

不服(いや)ならいやだと判然(はつきり)いゝなおめへばかりが
色じやない「(二オ)

横に車を押ふと俣よ車止さへ横にかく「(二ウ)

杖よ柱とたのみし君は洋学しゆぎやうの旅の空「(三オ)

善も悪きも浮世のあらを日々にかき出す新聞社「(三ウ)

腕を磨いて細工を競ひ業を勤むる博覧会「(四オ)

道は一すじ三筋の糸で狂ふ心のしのび駒「(四ウ)

乗と曳とのたがひはあれど同じ人民車夫と客「(五オ)

教員が力尽して教育すれば勉(はげ)む生徒の区学校「(五ウ)

陰(かくし)し売女と見ちがへられてそれと知られる外妾(かくし

づま」(六オ)
 官へ勤める亭主をもちば地震地震で気がもめる」(六ウ)
 直な呉竹操の松も捨し開化の門飾り」(七オ)
 つらい苦界も自由のつとめかせぎ次第のたゞき別(わけ)」(七ウ)
 高い低を撰むはやばだ新平民でも同じこと」(八オ)
 困じゆんぐはん固と口では言へど心の開けぬ人もある」(八ウ)
 神の御国と云ふ程ありて遣ふ宝も紙幣(かみ)となる」(九オ)
 がらがらびしやりとなる雷にあせを絞りの蚊帳のうち」(九ウ)
 ほれた同志で遂寝過して九時の出仕が遅くなる」(十オ)
 意気な姿で迷わず猫は着たる羽織も銀ねずみ」(十ウ)
 御届明治十一年三月廿七日
 編輯兼出版人 東京府下第一大区十二小区馬喰町三丁目十四番地
 吉田小吉
 定価二銭五リ」(裏見返し)
 「吉田小吉録」懐中開化大津絵 五号」(表紙)
 (省略)
 「吉田小吉録」懐中開化葉うた 六号」(表紙)
 (省略)
 「吉田小吉編集」懐中開化大津ゑぶし 七号」(表紙)
 (省略)
 「吉田小吉編集」開化都々々 八号」(表紙)
 待ど来ぬ夜は写真を出して愚痴な様だが言入り言」(一オ)
 音信(たより)じやないかと戸を明て見れば新聞配りの鈴の音」(一ウ)
 新聞投書でそしられながら思ひ切られぬ恋とよく」(二オ)
 堅い漢語を遣ふも道理橋や家まで石になる」(二ウ)
 おまゑに逢ふたび我俤いふもつらひ勤のうめあわせ」(三オ)
 うかれくるのはあの里雀すくな竹にはとまりがち」(三ウ)
 支那や朝鮮はおろかなことよ世界に輝やく日のひかり」(四オ)
 二人りが浮名を大きな声で新聞売子のつらくさ」(四ウ)
 直な御代にも横文字ヨ学びや無理も徹らぬ事はない」(五オ)
 留て置たいは山々なれど無理に帰すもぬしのため」(五ウ)

文の便りを待雁よりもかへる乙鳥(つばめ)のつら憎や」(六オ)
 美しくづくならおよしなはいナこわれがちなる色硝子」(六ウ)
 遠くて近きは男女の間と知つて居ながら深くなる」(七オ)
 近江八景じや私しやなれどもぜゞのないのでことたりぬ」(七ウ)
 君を見送る岸辺をはなれ走る蒸気もなきわかれ」(八オ)
 ぶくぶくして居てもあのガマぐちちきちんとゞ(しま)りが附てある」(八ウ)
 権妻が馬車の別当に慕(ほれ)ては見たが主と家来で俣ならぬ」(九オ)
 道は一ト筋三筋の街を照らす瓦斯燈軒らんぶ」(九ウ)
 住馴し古郷を離れて波濤を越て遠い異国で供かせぎ」(十オ)
 馬車や蒸気じや便りが遅い電信線(はり)がねだより)にしておくれ」(十ウ)
 御届明治十一年十二月七日
 編輯兼出版人 東京日本橋区馬喰町三丁目十四番地
 吉田小吉
 定価二銭五厘」(裏見返し)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化庁長官裁定のもと、公開されている。
 五「開化新聞どどいつ」
 明治十一年四月二十日届。請求番号：特 43-255°
 同じ本が関西大学図書館にあるが(和装 911.655-K7-1) 十三丁までのもの。
 開化しむふん都々々 初編
 倉田太助寿梓」(見返し)
 苦勞気がねを積重ねたる末は鍊瓦の樂住居
 足を突張両手でおさへ腰をしねつて踏ミシン」(一オ)
 唐草見るよな分らぬ文は西洋学者も読かねる
 究理木瓜と言んすけれど河童野郎の尻房学者」(一ウ)
 心がらとて他人の中で恥をかき染土かつぎ
 たがひの心にエレキを仕掛ケ言はず語らず密(こつそ)りと」(二オ)
 通ふ恋路に石橋かけて瓦斯やランプで照したい

空にや風船陸には馬車よ海にや氣船の早便利(二一ウ)
 火事や雷りや予防(ふせぎ)も為(する)がなぜに地震は除(よけ)られぬ
 西よ東と隔てしなかも便り待ぞへ伝信機(でんしんき)(三才)
 有名無実の夫であると操たつるは妻の義務
 雁が来たかと連子を明て見れば大根(だいこん)を時時分(三ウ)
 船はあぶない車はこはい乗てよいのは腹のうへ
 姿ばかりの写真じやいかぬ心のそこまで写したい(四才)
 いきな髪鋏(ざんぎり)小いきな坊主鬚のあるのは二タごころ
 じんきよしたのかたんせきもちか煙草のむたびゼイが出る(四ウ)
 深の夜中に抜刀隊が切て這込騒がしさ
 しつぼりと濡はしないでアレ気まぐれな雲に乗地な水性(うはき)あめ(五才)
 いかにか若氣の伊太利やとても元は互ひに葡萄牙
 金を土耳古と上手な権(ごん)は家にや和蘭噺国(でるまるく)(五ウ)
 唐崎の雨に逢身の松ではないが一夜濡たや秋の月
 まけぬ振して石盤抱へ漢語交りの君と僕(六才)
 五音にや出さねど目顔で知らせどぞ首尾してアイウエヲ
 人目忍んで文力キケク密(そつ)とたもとの口うつし(六ウ)
 めしが船なら私しが水よのるも乗(のせ)るも潮ざかひ
 虚(うそ)か実か此姿見て写して見せたい私が胸(七才)
 不自由こらへて勉強すれば未は自由になる体
 実と誠で台場を築き恋の玉章(たまづさ)打欠る(七ウ)
 尻に敷とは仇にくらしい撫(さす)つて居るのに長羽織
 鳥渡苦舌がつい摺合てくはつと燃たつ早附木(八才)
 襟が附とはそりやなさけない懐中時計じやあるまいし
 主の心は石盤なれど今宵は日曜日(どんたく)洋算す(八ウ)
 巻て結んだ捕縛の紐が切れて割腹する財布
 枕屏風を人目の小楯ぬしの夜討を待てる(九才)
 飾る花壇の究屈よりも私しや野菊の乱ざき
 恋の淵瀬に身を投鳥田浮も沈も主次第(九ウ)
 死なば一所と覚悟はしたが今の開化にや馬鹿らしい
 マンテルツボンを召たは宜が袖ない仰がなけりやよい(十才)
 割て言ない斬しをそれと先にさゝれて柿のたね
 杖よ柱と便りし君は遠き波濤を洋行す(十ウ)

伝信機(はりがね)が便りよ為(する)よな開化の世なら写真に苦
 舌が言せたい
 色の世界と言のが無理か五しき色採る万国図(十一才)
 善も悪きも世間のあらを探して記載す新聞紙
 いろはせず京と習つた子でも今じやアイウエオのサシスセソ(十一ウ)
 おくびに出しても悪いと思や食ぬ顔して知らぬぶり
 主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむいのか(十二才)
 過ちや悪いと葡萄酒隠し汲器(こつぷ)とるのも酷(すい)た中
 十把束(から)げで転ぶといへば解て見せたい胸のうち(十二ウ)
 姿見に写す笑顔にうつかり見とれぬしの惚しも無理でない
 三味線枕にくと引寄て可愛らしいと抱小ねこ(十三才)
 上のお世話の隅々まで届く郵便早便り
 乗と曳とのちがひは有ど同じ人民車夫と客(十三ウ)
 義理といふ字に人目をはずて言たい事さへ胸のうち
 親類縁者の異見も聞ず立る意気地の末を見な(十四才)
 乗せて下して(ママ)乗せて客にせはしき陸娼妓(おかじやうき)
 神代このかた替らぬものは水の流と恋のみち(十四ウ)
 お前どれだけ私やこれ丈と思ひちがひに食ちがひ
 嬉し涙に白粉はげて素顔見らるゝ恥かしさ(十五才)
 情ごゝろの種さへ時ば何時か真事の花がさく
 知れちやならないおまはりさんに遠くおやりよ立小便(十五ウ)
 海とも山とも分らぬうちに人が指さす暗射絵図
 もう言んすな其気休めを疾に見透す硝子張(十六才)
 言に言れぬ私が心髪鉄天窓(ざんぎりあたま)じやなければども
 口先ばかりで腹へは入ぬ主の浮気は巻煙草(十六ウ)
 ほれたどうして遂寝過して九時の出仕が遅くなる
 意気な姿で迷はず猫は着たる羽織もぎん鼠(十七才)
 顔は見へてもガラスの硝子(せうじ)内証ばなしが通じない
 続く日でも困りはすれど長い雨にも亦こまる(十七ウ)
 力揃へば踏石さへも揚てゆるがす霜ばしら
 ひやうし雀の飛去る跡は赤い仕掛を着た案山子(十八才)
 遣手の眼玉を蛸と見なし涼しい世界にして見たい
 若や夫かと立聞すれば硝子障子で聞とれず(十八ウ)
 あれまア暫時と言間も待はず影さへけむりの陸蒸気
 黒暗(くらやみ)の道に迷ひし私のこゝろお前が便りと辻らんぶ

(十九才)
一寸愛相に抱たる児から思ひ出しや涙の種となる
苦い言葉の只一言で胸がすいたよビール酒(十九ウ)
御届明治十一歳四月廿日 定価五銭
編輯兼出版人 第壹大区十四小区
蛎殻町一丁目五番地
平民

倉田太助版(裏見返し)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化
庁長官裁定のもと、公開されている。

六 『開化新作度々逸』

明治十一年十月十日・明治十二年五月十三日刊行。全四冊。永島福
太郎著。請求番号：特44183。

永島福太郎著
開化新作度々逸 壹(表紙)
開化新作度々伊津
両国米沢丁加賀吉寿梓
永島福太郎編輯(見返し)
はりがねが口を聞よな開化の世なら写真に苦舌を言せたい
色はせず京とならつた子でも今ではアイウエロのサシスセソ(一
才)
文明開化で規則がかわる替らないのが恋の路
朝夕に顔は見合ど心のたけを通じかねたる硝子窓(一ウ)
おまへの心と直安の時計ぶらりぶらりとくるい出す
究理木瓜と言んすけれど河童野郎の尻房書生(二才)
まゐらせかしくと文かくよりも縫針手業を習はんせ
悪を懲して善事をすゝめ日毎発兌(うりだす)の新聞紙(二ウ)
外に瓦斯燈内にはらんぶ人の車の三筋街
しのぶ恋路に石橋かけて手に手引れて渡りたい(三才)
屏風小楯に抜刀隊が女隊へ斬込やみ仕合
つらい座しきの芸妓を廃て権妻気どりのかこゝるもの(三ウ)
心がらとて他人の中で恥をかき染つちかつぎ

若やそれかと起出て見れば新聞配りのすゞの音(四才)
雪見歸りにもやいの綱も解て嬉しき家根のうち
いつそ死んでと思ふて見たが命ありやこそ末もある(四ウ)
剃た眉毛を再び伸し二度の披露(ひろめ)もぬしのため
互ひの心に電信かけて言はず語らず人知れず(五才)
色の世界と言ふのは無理か五しき彩色(いろどる)万国図
いきな散髪(ざんぎり)小さいな坊主まげのあるのは二夕心(五
ウ)
這ば立たてば歩めとおしへた口で今さら転倒(ころべ)とは無理な
おや
其日ぐらしと寒暖計は暑さ寒さで延び縮み(六才)
あれと言ふ間も煙りと共に陰も見へなくなる蒸気
明るい結構な此世を見捨暗い地獄のあら稼ぎ(六ウ)
思ひに堪かね文かきくけこ何様(どうか)首尾してまみむめも
おまへの心をらんぶで照らし恋の夜学がして見たい(七才)
教員が力尽して教へる生徒文明進歩の区学校
引馬お駕籠の大小名も今じや手輕の華族方(七ウ)
郵便のたより嬉して手にとり見ればあれさいやだよ人ちがひ
髭のある人亭主にもてば軍や地震で気がもめる(八才)
人手省いて多くの品を造る蒸気の大器械
空にや風船陸には蒸気車(じやうき)海に氣船の早便利(八ウ)
短い様でも隅々までも届く保護(ほご)の檉の棒
苦界勤めも開化の御代で自由づとめの二つ割(九才)
巡る地球は目に見へねどもつもるよはひは目に見ゆる
勸善懲惡婦女子の教へ新作ばなしの大芝居(九ウ)
朝日にかゞやく日の丸旗は神の御国の御祭日
娼妓(ぢやうらう)の真事と玉子の四角なけれど三十日に月は出る
(十才)
十五夜に兎飛出て空打眺め月の出ぬのでまごついた
足手伸した親をば捨て恋路に迷ふ不孝者(十ウ)
明治十一年十月十日御届
定価三銭
編集人
神田須田町四番地
永島福太郎
出版人

米沢町一丁目七番地
堤吉兵衛「裏見返し」

永島福太郎著

加々吉板

開化新作度々逸 式「(表紙)

開化新作都々伊津

両国米沢丁加賀吉寿梓

永島福太郎編輯「(見返し)」

西郷きはめて篠原行ば落る涙は桐野あめ

津田繩を用ひし田畑をあれ見やしやんせ頓て実のりも倍助法「(一

才)

金の無心の女郎の文はいかな学者も頭かく

開化知らずの野蛮な奴は新聞煎じて飲せたい「(一ウ)

真の開化に赴き度ば信義と情を守らんせ

井戸の蛙は此大空を四角なものじやと議論する「(二才)

無理な様でも呑冷酒と親の異見は身にひえる

気がね苦勞も暫しの間今に逢れる時が来る「(二ウ)

車夫と客とのたがひはあれど人間社会の兄弟「(あにおと)」

死なば諸とも稼がば共にはなれまいぞへすぬた同志「(三才)

いやなら不服「(いや)」だと判然「(はつきり)」言なおめへばかりを目

酌「(めど)」にやせぬ

開化の生好「(なまいき)」洋酒を飲で西洋料理でへどをつく「(三ウ)

あふた最初「(しよて)」から袖ない人とおまへの姿で知れてゐる

雨風や雪の降夜も寒さもこらへ出ずばなるまい巡査方「(四才)

赤い仕かけでまよはず者は色の夜学の教導師

たつた一言人づてならでいつて遣りたいてりがらふ「(四ウ)

待たつらさを背中で見せてしばし我漫もほれたなか

あきたら私を殺しておくれ外に便りのないからだ「(五才)

いやなおきやくのきげんをとるもおまへと添ふのをたのしみに

二人りの間へ宜「(よ)」い子をもふけ家族二人「(にん)」と門のふだ

「(五ウ)」

君は洋行妾「(わたし)」は留守居吉人り寝る夜のもの思ひ

ぬしの心と不順な時候朝な夕なに気がかはる「(六才)

ねぢり鉢巻勇みの初出ぬしのきやりは声自慢

土地で添れにや海山越へて外「(よそ)」の国にて暮したい「(六ウ)

腕をみがいて精工「(せいく)」をこらし業を勤むる博覧會

円「(まる)」き地球に頭の円く西洋かざりにしやぼん球「(七才)

瓦斯燈で照らす文明開化の御代で迷ひがちなる恋のやみ

しあんするならよすのがましだ色は思案の外といふ「(七ウ)

ゆうびん配りとアノ金貨は足がもとでになるである

別れたおとこと写真を出してうらみつらみも目になみだ「(八才)

円いお金に四角な紙幣「(おさつ)」あれば三十日に質が出る

馬車や蒸気は便りが遅い乗つて行たや風船に「(八ウ)

ぬしが雲なら私が風よもつツもたれつともかせぎ

しんく堪へて勉強さんせ雪の中でも花がさく「(九才)

あすの花ぞとたのしむうちに仇な嵐が実をちらす

暗い此身に燈りを立て晴てはなしがして見たい「(九ウ)

転ぶ転ぶと言んすけれど是も活計「(くらし)」の片だすけ

美しくしき色香愛して手折て見れば何時か虫つく手いけ花「(十才)

私しや主もちぬしや親がより俚にならぬが世のならい

無理なことだと威張て見ても主と家来で是非がない「(十ウ)

明治十一年十月十日御届

定價三錢

編集人

神田須田町四番地

永島福太郎

出版人

米沢町一丁目七番地

堤吉兵衛「(裏見返し)」

永島福太郎著

加々吉板

開化新作どゞいつ 三号「(表紙)」

しんさく開化都々一

孟齋画

麗柳楼嘉和津作

両ごく加々吉梓「(見返し)」

二人り揃て取たる写真離れても未練で捨られぬ

私しや鎖の継ぎ目堅く主は時計の狂ひがち「(一才)

俚に成なら写真に取てぬしに見せたい胸のうち

筆の命毛振ふて書た起証卦紙は反古にやせぬ「(一ウ)

最早四時かと酒あたゝめて待間程なく靴の音
 羅生門より三十日が剛(こわ)い鬼が金札とりに来る(二才)
 智恵は附もの勉強したい鳥や毛ものが芸をする
 俣になるなら迷わぬ様に瓦斯燈引たや恋のやみ(二ウ)
 便りばかりで逢ずに居れど縁は切ない電信機
 待夜の長さを四時間詰て逢ふ夜の短かい足加(たしまい)に(三才)
 二人りの浮名を広告社へ頼み広く世間へしらせたい
 開化したとは只表向胸は開けぬ恋のぐち(三ウ)
 取た誓紙が違約となればつまり分署の御厄介
 なまじ写真は思ひの種よ越力(ゑれき)で口をば利(きか)せたい(四才)
 思ふお方が兵士にあたりわづか三年が百千年(もゝちとせ)
 出雲の国へと電信掛て妹背むすびを神だのみ(四ウ)
 新聞に浮名立られ知られるからは未は貞女と出せたい
 私しや長靴お前はとんび晴て逢れぬ身の因果(五才)
 傘になりたや蝙蝠傘にぬしにさしたりさゝせたり
 文の便りは人目があれば胸の越力(ゑれき)で通じたい(五ウ)
 私しやろうそく辛(しん)よりもめるぬしはランプでくちばかり
 他人のことさへ身につまされて新聞眺めてもの案じ(六才)
 堅い心につひ乗込んで胸は蒸気の薄けむり
 玉を釣(つる)して蠅虫よ除(よけ)て惚た同志のちはぐるひ(六ウ)
 胸の時計がしつくり合ばどんなに鳴ふと好た同士
 毛を遣たいにも散髪天窓(ざんぎりあたま)印紙貼たや口のはた(七才)
 開化為(し)ないと水さゝれても主が死ぬなら諸ともに
 憎いと思つたあの新聞も晴て二人りがきしよう文(七ウ)
 年増盛りを白歯の俣でくろうするの母親の罰(ばち)
 外を読売新聞きけば思ひがけない主の事(八才)
 胸に一物アルミの指輪誓紙替りに取かはす
 恋のふさぎは不開化めけど直す浮気の水ぐすり(八ウ)
 浮気もさんせと開けた様に言ど案じる胸のうち
 文明進歩と教員さんが生徒励ます夜学校(九才)
 大和詞も開けて今は漢語交りの君と僕
 若や主かと門行音を寝ずに算へた人力車(九ウ)

日々に道路は開けるけれどなぜか開けぬ恋のみち
 開化する程恋には便利遠けりや蒸気や電信機(てりがらふ)(十才)
 寒暖計をば心に掛けて惚れた度数を知らせたい
 時を待とは昔のことよ七里を一字に来る時節(十ウ)
 明治十二年五月十三日御届
 定価三銭
 編集人 神田須田町四番地
 永島福太郎
 出版人 米沢町一丁目七番地
 堤吉兵衛(裏見返し)
 開化新作どいつ 四号
 永島福太郎著
 加々吉板(表紙)
 新作開化度々一
 青盛堂梓
 麗柳楼作
 孟齋画
 西国 加々吉はん(見返し)
 斯(かう)も為(し)たらと議論はしても何様(どう)もならない
 この規則
 浮気でたゝいた背中へ今は着せる羽織もうしろから(一才)
 主の移香最う新聞で発(ばつ)と世間へ散るさくら
 からす打れる時計は狂ふぬしと同寝(ともね)を正午(どん)まで
 も(一ウ)
 顔を見合と言葉は掛す互ひにすれあふ陸蒸気
 花に靡くも世渡りゆへに東風(こち)は三筋の糸やなぎ(二才)
 主の心とあの風船は浮気よ含んでたか昇り
 君を松虫夜ごとにすだくなかぬ蛩は身を焦す(二ウ)
 車夫(くるまひき)の喧嘩を夜る出て見ればやみで握拳(げんこ)
 の滅多うち
 あれさお待よ硝子(がらす)で見へる只さへ人目の多い口(三才)
 ぬしの心の狂はぬ様に神に願ひを掛時計
 堅い約束石橋かけて私しが眼鏡で好た人(三ウ)
 惚た同士と寒暖計は熱くなる程のぼりつめ

水にまかせた浮くささへもすゐた所で花がさく(四才)
 あれさお待と言ふ間も早く地方(ぢかた)はなれる蒸気船
 忘れぐさとて三味せんとれば歌の文句で思ひ出す(四ウ)
 惚た病ひが日に日に重り毒と知りつゝ止られぬ
 雪よ花よと今宵の月に三ツの音(ねじめ)の奥座敷(五才)
 馬車や汽船(じやうき)は苦勞じやないがうつかり乗れない人のく
 ち
 以後の浮気は罰金と極めて是までしたのはおとり消(五ウ)
 西洋飾りで心も円く情知つたる開化人
 主が鉄なら私は磁石どうでも引合質がある(六才)
 人の出世は知れないものよ縷衣(ぼろ)も末には西洋紙
 因循過ると笑はゞわらへ私しや頑固で片思ひ(六ウ)
 邪見な親だと思つて居たが斯(かう)なりや二人りの結ぶ神
 風船にフット乗られこちや登りつめ先は浮気なそらだのみ(七才)
 主の誓ひと流行のペンキはじめ美事ではげやすい
 惚たお方は皆筒袖ですがる袂のないつらさ(七ウ)
 人力車と権妻さんは乗てそろそろねだり出す
 煙と知りつゝ吞巻煙草雲の足にもなりやせまい(八才)
 時世時世で人の気までもツドンの音聞て飯を食ふ
 神経病じやと笑はゞわらへ夢やうつゝにぬしのかほ(八ウ)
 よかれ悪かれお前とならば出て嬉しう新聞に
 主とならんだ紙取写真末の末まで消ぬやう(九才)
 秋の初風身に染々(しみじみ)と便り聞たい雁のふみ
 私しやお前の煙管と成て片時側をば離りやせぬ(九ウ)
 主を待よは千歳の思ひ逢ば間もなく明の鐘
 乳房含ませ添寝は為れど心淋しい主の留守(十才)
 人に話せば噂がこはし二人じや文珠の智恵も出ぬ
 心の操が見られるならば主に見せたい其機械(十ウ)
 明治十二年五月十三日御届
 定価三銭
 編集人 神田須田町四番地
 永島福太郎
 出版人 米沢町一丁目七番地
 堤吉兵衛(裏表紙)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化
 庁長官裁定のもと、公開されている。

七「開化珍聞都々一」

明治十一年十一月十五日出版届。請求番号：特44160。

開化珍聞都々一(見返し)
 更科や月は田毎に映りはすれどまことは空にたゞひとつ
 此木計が桜じやないト言て見返る花はない(一才)
 明の鳥はにくらしけれど聞て嬉しう暮の鐘
 開けてお前に未開(ひらけぬ)わたしすゐと不粋の鉢合せ(一ウ)
 お前に見せよと結たる髪を夜半に乱すもまたお前
 岸の柳にそよふく風になびくまねして逃てゐる(二才)
 無理な首尾して逢たも何時か恥かしいほど世帯じみ
 墨に思ひの恋ぢを籠てかほり洩さぬ状袋(二ウ)
 月が高いとゆだんがをちど夢も見ぬ間に明からす
 私しの命に印紙をはつて主へ抵当に入れてをく(三才)
 ぐちをこぼさず一杯のみ呑めばうきよは何のその
 独よくよ只ぼうぜんと何しか夜明のあの時計(三ウ)
 雨にしづかなアノ奥座敷積る口説はしめりがち
 たゞく戸細を主かと開て見れば門田で啼水鶏(くひな)(四才)
 枕相手に写真を詠め主しとそい寐をした心
 遠りよはなれて我がまゝきまゝ無理を言の惚た同士(四ウ)
 アレサおよしよそりや鑑札だ見られちや隠した年がむだ
 壁に耳あり障子に眼あり今は柱が物をいふ(五才)
 月夜烏ととめては見たがうそのつけない六ツの鐘
 主を待夜は戸たゞく風も夫と手にもつ摺附木(五ウ)
 そんな事とは夢さらく知ず跡であやまること計り
 俛に成るならブツクに成て主に抱れて歩きたい(六才)
 官に在る身となりくだものは地震する度きもめる
 宵の嵐はいつしか沈み寝て待果報かほとゞぎす(六ウ)
 白鳥(しろいからす)も出そつな物よ兎ぎや晦日に餅を搗
 色に出ぬが此方の趣向先から惚たと言せる氣(七才)
 人に何ともまた白雪のうちから綻ろぶ梅の花
 自主の権とはお前の勝手水性(うわき)を承知で添(そい)はせぬ
 (七ウ)

アレサお止と払つた手先いつか枕の下になる
 惚た同士と寒暖計は熱くなる程昇りつめ(八才)
 思ひがけなく見合す顔を烟にして行汽車の窓
 手鍋下よがお前と暮しや何の不服が有ものか(八ウ)
 笑顔で勉める二人のお客どちらへ落るか此眉毛
 胸に焚火で涙をせんじ癩に吞して居るつらさ(九才)
 猫も鯨も電信しだいいづれエレキはつり道具
 斯(かう)なりや別れがまた惜しくなるとけて嘶の雪朝(ゆきのあ
 さ)(九ウ)
 冷ちや悪いと座ぶとん出(だす)は厚い私の心意気
 主が秋風吹せる故に私しやくよくよ気ヲ紅葉(十才)
 蚊帳をはづして楊枝箱出して待たせて車に詫をいふ
 うたがふ心は少しもないが日々あわねば気にかゝる(十ウ)
 秋田からとて中々切れぬいつか女夫(めうと)に鳴子縄
 初手は蛩と焦れた私し今は苦勞でもぬけ蟬(十一才)
 うそも誠も皆打明て話しや手管とうたぐられ
 たまに逢夜はつゝ睦言に夢も結ばず明の鐘(十一ウ)
 わちきを狐といふ舌の根でぬしは狸のそらいびき
 火事と雷りやきかいで済が防く手術の無い地震(十二才)
 鼠穴よりめねこの穴がくらの為には不用心
 口も軽いがお尻もかるい夫でも娠(はらめ)ば身は重(十二ウ)
 意気な音じめのアノ涼み舟またもきこゆる鼠なき
 早く其方をワイフと極て家族四人と届たい(十三才)
 行燈の前にぼんやり只独虫主を思て身を焦す
 何を使に春秋(としつき)積で啼を仕事の籠の鳥(十三ウ)
 つらい涙も人目が有れば窓の蚊遣に紛らせる
 そば焼餅かよ二人が中へ水をさしてはこね返す(十四才)
 主に合ふのは古郷の親へ晴の錦を着た心
 吸つけ煙草の煙に成て主の服中(をなか)が見て来たい(十四ウ)
 俛に成なら罰金出さず晴て地娯苦(じごく)がして見たい
 素人苦勞人と言んすけれど雪と言字も墨で書(十五才)
 背中合せの口説が何かとけし帯まで腹合せ
 二天から割たはよいが今ちや産の段で苦勞する(十五ウ)
 君の来ぬ夜は写真を詠め思ひ切られぬ此惠顔(ゑがほ)
 彼人ひとりと定めた外は浮気やその座のくりまはし(十六才)
 郵便報知の便りはよいが逢ねば嘶せぬことがある

内証内証でついたことをいつか読売新聞紙(十六ウ)
 送籍なければありや唯の人二等親とは言りやせぬ
 穴の中まで写真に取らせ主に無疵を知らせたい(十七才)
 雁や燕の便りをまたでことばかよわす伝信線
 入れかへ曳かへ客乗せるのも浮いた渡しの舟だから(十七ウ)
 主が露なら私は萩よぬれたからには退はせぬ
 お前金性私は木性金にすゝきで惚れたのだ(十八才)
 私しや雁がね暗路を越て来るのにお前は秋のそら
 地づを開て日に幾度かぬしの帰りをたゝみざん(十八ウ)
 出来たやうだと心で察し尻へ手をやるかん徳利
 待(まつ)と言字を倒(さかさ)に読(よめ)ば妻となるので我(わ
 し)やうれし(十九才)
 猫にきつねと言うがまゝよわしがいきぢは立通す
 心尽したにしきのみはたまいて納むる菊の御代(十九ウ)
 明治十一年十一月十五日 御届 定価五銭
 編輯兼出版人
 ? 和泉町壱番地
 ? のや
 檜葉周平(裏見返し)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化
 庁長官裁定のもと、公開されている。

八「団々都々一」

明治十一年十一月二十日、明治十二年十月七日刊。請求番号：特
 4-162。

山村清助編輯
 珍笑団団都々一
 第壹号(表紙)
 まるまる都々一
 若栄堂発兌
 国とし画(見返し)
 親には反甫の孝あるくせに恋にや不実な明がらす
 帯やしごきで七巻半にまいてやりたや明の鐘(一才)

秋の天気とおまへの心変つてかはつて又かはる
 思ひがけなく見合す顔を烟にしてゆく汽車の窓「(一ウ)
 言ふは怪気と堪忍ぶくる縫ふて居るのも妻の義務
 思ふまいぞへ最う思はぬとおもへば思はず思ひ出す「(二オ)
 どふせ浮名の立うへからは封せぬ端書の文づかひ
 なんのばちかや調子がくるひ結ぶ糸さへきれたがる「(二ウ)
 口も軽いがおしりも軽い夫でも娠めば身はおもい
 娼妓(わちき)をきつねといふ舌の根で主はためきのそら軒き「(三オ)
 冷ちやわるいと座蒲団出すはあついわたしのこゝろいき
 松といふ字は好るゝ管よ君と木(ぼく)とのさしむかひ「(三ウ)
 ねこちやねこちやと被仰(おしやま)すけれど首尾能きや高位の二
 等親
 送籍なければありや唯の人二等親とは言はりやせぬ「(四オ)
 内証内証でつひした事をいつか読売新聞紙
 アレサおよしと払つた手さきいつか枕の下になる「(四ウ)
 主に貰ふたかたみの写真寝る間も放してよいものか
 ぬしは秋風私しや気を紅葉色にもえ立むねのうち「(五オ)
 ねずみ穴より女猫の穴が蔵のためには不用じん
 苦いおまへと顔しかめてもどうもよせないビール酒「(五ウ)
 舟とさほとを持たないならばういたせかいはわたれまい
 堅いやうでも時節が来れば落て本意ない鹿の角「(六オ)
 互ひに人目は忍んで見たが他の耳には戸がたゝぬ
 丸く渉るは私しがうまみ抜めないぞへ新銅貨「(六ウ)
 倒れかゝつた親父の家(うち)をむすめころんで引おこす
 ぬしのごゝろと夏売る氷解るととけぬで苦労する「(七オ)
 ゆめもみじかい夏の夜明て未練のこすは蚤のあと
 鮎やどげうぢや私(わ)し(ママ)なけれどもぬしのためには泥に
 すむ「(七ウ)
 泣てお客に貰らつた金は嘘のなみだのこぼれ福
 届いた端書に名はないけれど気がねして出る家(うち)の首尾「(八オ)
 見そめた計りで逢ないうちに浮名よみつり新聞紙
 うたがふ心は少しもないが日々あはねば気にかゝる「(八ウ)
 ぬしは原告私しは被告まはす屏風が判事やく
 義理といふ字は恋路の妨害(じやま)と無理をいふのもおまへゆゑ

(九オ)
 吸付たばこにつひ騙されて己が世帯を煙にする
 主の火性でわたしも火性あつくなるのも無理ぢやない「(九ウ)
 主の心に伝信機かけて浮気の異見がして見たい
 今の此身を写真にとらせぬしに見せたいやつれがほ「(十オ)
 天晴立派な鯨をおさへでかした猫だと言れたい
 アレサおよしよそりや鑑札だ見られちや隠した年がむだ「(十ウ)
 好た同士でしみじみぬれて猶もうれしいはなの雨
 金の時計が目当ぢやものを襟につくのは知れた事「(十一オ)
 印紙貼たるわたしの身体二重抵当にやなりはせぬ
 雪はこんこんけさふる狐白く化たる顔の皺「(十一ウ)
 はらも立まいたゝせもせまい四海兄弟自由の権
 主とわたしのその引力は月と地球もおよぶまい「(十二オ)
 恋の議院を出雲へたてゝ色の会議がしてほしい
 堅い約束してあるからは朝令暮改といはしやせぬ「(十二ウ)
 ふたり並らんでうつつした写真切れても未練ですてられぬ
 ぬしは金性わたしは木性木金くらうは身のかくご「(十三オ)
 若や夫かと門の戸明て見れば逃出す探訪者
 変りやせぬかとかうのさきへ投込むレトルでほつと息「(十三ウ)
 猫や狐がうき世になけりやこんにや苦労をするものか
 手鍋さげよがおまへとくらしや何の不服があるものか「(十四オ)
 胸で焚火で涙を煎じ癪に吞して居るつらさ
 ぬしと添ふ身と育てゝくれた親なら孝行もせにやならぬ「(十四ウ)
 ならば検査のお医者に見せて胸の中まで知らせたい
 お鬚はらつて楽するよりも女工となつても主の側「(十五オ)
 世帯かためてヤレうれしやと思やおまへのまた浮気
 君の安否は片仮名便り百里とゞくも一時間「(十五ウ)
 御届明治十一年十一月二十日
 地本錦絵問屋
 画工編輯兼
 神田区小川町三十一番地
 山村清助
 出版人
 日本橋区新乗物町十九番地
 多賀甚五郎「(裏見返し)

珍笑団団都々一

貳号

山村清助編「(表紙)

珍笑団々都々一

貳号「(見返し)

鰻の性かへぬらくらおまへ私しや焼々身をこがす

雨が取もつ相合傘よ柄漏の雫でぬるゝ恋「(一才)

筆ぢや笑はせ文句ぢやころしほんに佞弁(べんぢやら)は罪つくり

三味線の撥を小楯に欠伸を隠し強(むり)にこぼしたそら涙「(一才)

嘘も誠も仕方知れる隠すおまへの気が知れぬ

惚た同士と寒暖計は熱くなる程昇りつめ「(二才)

ぬしの下歯はわたしと極めてやめておくれよ食ちらし

鳥渡口舌で背中とせな探る互ひの腹とはら「(二才)

ひるは夫の車を曳て夜るはおさせる照手姫

規則で啼のかアノ明がらすたまにや日曜(どんたく)するがよい「(三才)

土手の柳につひまねかれて「(清元北洲)かすみのころも衣紋坂え

もんつくろふ初買に袂ゆたかに大門の花の江戸町京まちや背中あは

せの松かざり松のくらゐを見かへりのやなぎさくらの仲の町「恵方

参りの道迷ひ「(三才)

上等なお前に下等なわたし「(清元とばゑ)どうぞだかれてねずみ

とはおよばぬこひの身のねがひ「中等に隔があるはいな「(四才)

主の誓ひ流行(はやり)のペンキはじめ美事ではげやすい

赤い衣裳(しかけ)に迷ふたゆゑにあかい衣類(へど)着る佞じま「(四才)

写真になるならこゝろの内を主に見せたいこの苦勞

一すぢ縄ではいかなぬ奴が三筋の糸にはしめられる「(五才)

松といふ字は開化の文字よ君にわかれりや木(ぼく)ばかり

電信で便りにする様(よ)な開化の時節写真に口舌がいはせたい「(五才)

束縛されよと斯ふなりや佞よどうせ人目の関やぶり

ふつと目覚し小声でおこし風邪を引なよ最(もつ)かへる「(六才)

あれさお待よ硝子で透(みへ)る只さへ人目の多い口

主とつながる鎖があれば赤い着ものもいとやせぬ「(六才)

廓(さと)の塗家(ぬりや)はツイはげやすい嘘でかためた煉瓦石

心とこゝろがあひさへすれば性があはうが合まいが「(七才)

ぬしの心がくるはぬやうに神に願ひをかけ時計

浮気心は少しもないが恋しいお方があるばかり「(七才)

神経病ぢやと笑はゞわらへ夢やうつゝに主のかほ

胸の蒸気をつひ燃すぎても航海する苦勞「(八才)

起証誓紙へ印紙を貼て末に問違や訴訟する

筆の命毛ふるうて書た起証誓紙は反古にやせぬ「(八才)

おまへがさうしたごま菓子いへば私しやお臍で茶をわかす

海山越えても便りが出来る切れちやいやだと伝信機「(九才)

風船にフツト乗られこちや登りつめ先は浮気な空だのみ

恋の闇路に迷ふた中を早く月夜でくらしたい「(九才)

はなして居たいはやまやまなれど又も蒸気の笛が鳴

最早四時かと酒あたゝめて待間程なく靴の音「(十才)

明の鐘の音きゝたくないがゴンとなるとはたのもしい

うそも誠も皆うちあけて話しや手管とうたぐられ「(十才)

かたく育てた箱入ものを誰に解れる夏氷

憎いからすは開化で廃し残る恨みは明の鐘「(十一才)

腹を立てて泣けたうへで重い瞼をわらはせる

悪く言りよがおまへとならば出て嬉しい新聞紙「(十一才)

煙(けむ)と知りつゝこゝろの浅間口の端に乗る巻煙草

惚たお方は皆筒袖ですがる袂のないつらさ「(十二才)

烏(から)サつたれる時計は狂ふ主と同寝(ともね)を正午(どん)

までも

背中合せの口舌がいつか解し帯まで腹あはせ「(十二才)

わたしも食るよ其腹なべを死んでもおまへと離りやせぬ

羅生門より晦日がこわい鬼が金札とりに来る「(十三才)

主が来たかと窓の戸明りや憎やからすの阿房なき

庭の鈴むし鳴やむたびにそれと手に持摺附木「(十三才)

浮気で叩いた背中へ今は着せる羽織もうしろから

私しや鎖の継目がたく主は時計のくるひがち「(十四才)

文明開化の西洋でさへも色で分たる国の絵図

はれて女夫(めをと)となる其うちむねは互ひに曇りがち「(十

四才)

末に車を曳つと佞よ引にひかれぬ恋の意地

斯もしたらと議論をしてもどふもならない此規則「(十五才)

たがひに寄添ひ心のたけを咄して嬉しい演舌所

ほととため息つくづく詠め「(常は津若川)江戸なが崎くにぐにへ
ゆかしやんした其跡は」残る写真が癪のたね「(三ウ)

(広告)

御届明治十一年十一月二十六日

「地本錦絵」問屋

神田区小川町三十一番地

画工編纂兼 山村清助

日本橋区新乗物町十九番地

出版人 多賀甚五郎「(裏見返し)」

团团都々一

三号「(表紙)」

まるまる都々一

三号

若林堂?「(見返し)」

胸に手をあて考がへ見ればどうして此様に惚たのか

錐でもむよな真身な異見こたへましたよ胸に針「(一オ)

どうせ新聞(ニウス)に書れたからは末に貞女と出るまで

私しや長靴おまへはとんび晴てあはれぬ身のいんぐわ「(一ウ)

悪性男を出雲へ訴訟産神たのんで代書人

文や言伝そりや未だ初心むねの越力で感じあふ「(二オ)

塵積で山となるほど借金しても三味の調子にのせたばち

ぢつと手にとりおま系の写真あふたはじめをおもひだす「(二ウ)

開化したとは唯おもて向胸はひらけぬ恋のぐち

ぬしとつながる鎖があらば赤い着物をきるとも「(三オ)

斯も仕たらと諫めて見ても用ひられぬは浅いゆへ

ふいとあまへと我俵気まゝ夫でも治まる好た同士「(三ウ)

文も至急に名も書留は解(ほつ)れぬ縁しのむすび糸

一羽でつれないアノ雁金は文の便りを仕てくれぬ「(四オ)

口で計りぢや誠が知れぬならば心を写真鏡

つもる口舌でつひ夜をあかしのこりは附録にしてあげる「(四ウ)

廻しのあるときや兎角に主はかへると車夫の真似

目覚し時計を十分すゝめ野暮を追出す鐘の声「(五オ)

口の車へ野暮をば乗てそして三筋の糸でひく

待夜の長さを四時間つめてあふ夜の短かいたしまへに「(五ウ)

しのび逢夜は私しや思ひ鳥鳴子の音にさへむなさわぎ

きれてくやしい思ひも急に先へとゞかぬ電信機「(六オ)

何と書りよが新聞(ユウス)は新聞わたしや私してほれた人

以後の浮気は罰金と極てこれまでしたのは御取消「(六ウ)

蚊帳の籠城枕の皆君の進撃まつてある

雪よ花よと今宵の月に三ツの根じめの奥座敷「(七オ)

主の心のくさらぬ先に漬ておきたやアルコール

出雲の国へと電信かけて妹背むすびの神だのみ「(七ウ)

かはす誓詞も活字で摺たことまで世間へ新聞紙

主の郵便見てさへうれしあふては嬉しきくちへ出ぬ「(八オ)

主の開化は程よいけれどすがる袂に袖がない

月とスツポンおよばぬ事と覚悟しながら恋のよく「(八ウ)

三合の小糠洗場(ゆや)にてつかつてしまひ明日は婿いりするつも

火がないといふて持出す西洋附木一ぶく吸なと摺つけぎ「(九オ)

離れ座敷で結びし赤縄今じや放れぬ中座しき

今のいまゝで大事にされて用がなくなりや落し水「(九ウ)

早く三筋の束縛といて思ふおまへと一すぢに

思ふお方を兵士にあたり僅か三年が百千年「(十オ)

迷ふ鳥羽玉恋路の闇を照らすランプはなぜ出来ぬ

主は猶さら姑(しうと)は大事惚たおまへを産んだ人「(十ウ)

ふツと目覚し手を打眺め思ひ出さるゝ爪のあと

身分ちがへど惚まいものかすしやのお里は二イまくら「(十一オ)

染た此齒が証券印紙浮気で反古にはさせはせぬ

余り絶かね一ト筆そめ井内のやうすを菊の花「(十一ウ)

主を待身はこうもり傘よ雨にふるにも天気にも

ぬしを待夜は千歳の思ひあへば間もなく明のかね「(十二オ)

来そうな物だとれんじを明て見ればかすかに夜たかそば

鼻は獅子でも角兵衛の子でも越後自まんの雪のはだ「(十二ウ)

どうか始めの浅瀬へもどりおまへの浮あしさぐりた

親父のランプは開化にくらし欲に手をやく米会社「(十三オ)

叩く戸口を主かと明りや端がき投こむ配達者

月に備へたアノ花すゝき風のふくたび小手まねき「(十三ウ)

痛を介抱(いたは)る手先に触る乳にこゝろも身も砕く

あふといふ夜に妨(さは)りが有て月に村雲恨めしや「(十四オ)

心経病じやと笑はゝわらへ雖死(しんでも)思ひのとゞくだけ

便り計りで互ひに居れど縁はきれない電信機「(十四ウ)

(広告)
御届明治十一年十一月二十六日
価五銭

「地本錦絵」問屋

神田区小川町三十一番地

画工編輯兼 山村清助

日本橋区新乗物町十九番地

出版人 多賀甚五郎(裏見返し)

珍笑都々一団団

四号(表紙)

珍笑団全都々一

四号(見返し)

ゆびの先にて開ておいて入れてなりだすゴムの靴

紙幣(かみ)が結んだ二人りが中は破れやすいが知れた事(一オ)

親のゆるさぬ不義いたづらで叩き出された木魚講

広い世界を断然すて、学業社会に転籍(てんきよ)す(ママ)(一ウ)

転ぶも否だよ妾(わたし)が自由圧制口説はよしにしな

母のまへでは洋語をつかひ忍ぶやくそくする書生(二オ)

てうしてうしにあの 坊は苦い顔してあやされる

恥かしさこわさ二ツを一ツの夜着へ袖をひよくの新まくら(二ウ)

ねがひ叶ふてアレ嬉しやと思ふ間もなく御免職

行燈かきたて寝顔を見ればほんに鼻毛の伸た客(三オ)

文の返事に印紙を張て原告する時証にする

圧制束縛愛相が尽た浮気するの自主自由(三ウ)

思ひおもふてとゞいた思ひ猫もおもひをます思ひ

人の出世は知れない物よ褸衣(ぼろ)も末には西洋紙(四オ)

安房昔しと安芸らめる駿河それぢや苦勞飛驒甲斐がない

貴殿此後為浮気則拙者為訴訟出雲

(きてんこの、ちづはきをするとせつしやいづもへそしやうする)(四ウ)

なれぬ世帯に互ひにやつれ今は辛苦の実くらべ

春過て夏の浴衣のアノ白妙にそめて色濃ひよく紋(五オ)

千早振神が出雲で結んだ縁の夫さへ浮名が立田川

是やこの行も帰るも別れてのちは兎に角氣に成靴の音(五ウ)

海老は古風だアノ輪かぎりの罫に七五三(しめ)たい髻鯨
鍋になりたや四銭のなべに主が牛肉(うし)ならわたしや葱(六オ)

兎角うき世は苦がたのしみと思ひ直してまた惚る

恍惚(おぼ)子な私しを古たぬきとは余所の九尾がいはすのか(六ウ)

なまじ半分ひらけたよりはかはを冠ツた畑の芋

誓紙とり出し口説て見ても空をながめて知らぬ顔(七オ)

深いころの底しらすして浅く眺望(ながめ)る井の水

来たかとお出見りやオヤ馬鹿らしい主はいつもの本やさん(七ウ)

首をひねつて逆に見れば爰に居るよとわらひがほ

別れがつらひと小聲でいへば締る博多の帯が鳴る(八オ)

ほんにおまへは自惚つよひなんでお髭にほれませう

ほんにお前は弾力性よ人の誠をはねかへす(八ウ)

あげたりさげた思はせぶりなほんにおまへはじれつたい

ほんにお前はお前といつて「人目なければいだき付」日ごろの口説

の店おろし(九オ)

聞た異見も尻からぬけて屁とも思はぬほれた同士

アレサお待よ往(ゆか)れちや困る留て置たや雲の足(九ウ)

とほきからず夢さまされて起りや上野の二時の鐘

どぶ首尾して人めを忍び一寸なりともアイウエオ(十オ)

おまへにもらつたこの簪はあらひ嶋田へサシスセソ

逢ふちやいはれぬわたしが胸を文でありたけ力キケケコ(十ウ)

懇々説諭を承知はしたが用ひられぬは恋の間

のぼる便りの電信はしらす憎や地震がゆり倒す(十一オ)

義理もなさけも甘いも酔イも知つて浮気は廓の僻

酔た男の羽織をかりて代理つとめる猪口捌き(十一ウ)

鼠押へる権理は置て鯨とるのが猫の義務

君が不服で添ねば僕は願ひ出てもそふ所存(十二オ)

恋の上下に等級分て赤繩(しるし)に検査してほしい

憎い記者だがあの新聞は二人りが為には縁の神(十二ウ)

私しとおまゑは硯と墨よすれば濃字が染(しみ)て来る

如何(どう)でもなさいと出す三味線を枕に結んだ縁の糸(十三オ)

狡猾すぎるといはれた私も実にお前ぢや馬鹿になる

日増に道路はひらけるけれどなぜかひらけぬ恋の道(十三ウ)

遠い国さへ和親を結ぶまして互ひに日本(やまと)同士
開化する程恋には便利遠けりや蒸気や電信機(十四才)

人に話せば噂が怖し二人ぢや文殊の知恵も出ぬ
芸者鑑札返上とげてお側で衣裁(たちぬひ)して見たい(十四才)
添ふにや添はれず逃るにや巡査死ぬも白痴(たはけ)と察(し)る
つらさ

開化しないとゆびさゝれても主が死ぬならもろとも(十五才)
時節待とは昔の事よ七里を一時に来るせかい
毛をやりたいにもザンギリ天窓印紙張たや口の端(十五才)

出版御届明治十二年三月廿五日
定価五銭

編輯人 小川町三十五番地 山村清助
出版人 浅草瓦町十二番地 綱島亀吉(裏見返し)

珍笑団々都々一

第五号

山村清助編輯(表紙)

珍笑まるまるどくいつ

第五号

国利画

寫鮮堂(見返し)

親にやうらまれ他人にやいはれ(常盤津?)わが身に思はぬ恋
人をおもひおもひていたづらな色の取持やよしにしな
親の裁判不服をいはずして立たいぬしに情(一才)

何といつても年若山は紀伊た風だと人がいふ
今朝は居つゞけ恨みはせぬぞ啼け啼けはつ鶏はつがらす(一才)

写真詠めてほろりとなみだ(いつかはめぐりあふさかのせきぢをあ
とにあふみぢやみのをはりさへさだめなき)主は航海なみのうへ
恋は思あんの外とはいへどしあんつくしたけふの首尾(二才)

ぬしの産(うまれ)は広島県よ安芸の国では気にかゝる
主へ歳質の文書初に返事の来るのを松かざり(二才)

鯨々といはんすけれどひげはあつても鱗(こけ)はない
西も東も頑固な鬼ははらひ尽して明る年(三才)

時間が過たときやう(ママ)すへて居つゞけするにも程がある
離別されても送籍なけりやわたしやどうでも主の妻(三才)

梅にや笑われ鶯(とり)には啼かれ春もつきうきできはせぬ

叶はぬ願ひと案断(あきらめ)居れど寝ても寝つけぬ身のつらさ
(四才)

早く籍をば送籍なしておまへの家族といはれたい
向ふ鏡に取る紅筆で酔(すい)な名宛(あてな)をかきそめる(四
才)

最はや時間とこゝろで泣てわらつて帰すもぬしのため
好たおまへの我俥気随させて納まる睦まじさ(五才)

十方(とはう)に暮たる私しだけれど主にあふのを力ら草
番ひはなれぬ鏡でさへも入道したので唯独り(五才)

親の説諭を聞ぬじやないが夫じや私しの身がたゝぬ
高砂やこの浦船とまでいはれた私し夫にお前の猫ぐるひ(六才)

三三九度はそつちへ除(のけ)て一寸見そめた片鏡み
馬鞍(まくら)投(ほう)り出せ蒲団もいらぬトーに鏡は全裸(ま
つばだか)(六才)

いつか鏡と苦勞の妾(せふ)を側でごまかす九僧(くそ)坊主
飛ツ跳ツの一座の中で主にあふみの此苦勞(七才)

主ゆゑ苦勞もやせるを人に知らせまいとて鬢化粧
アレサお待と紙とり出しもんでよくふく灸の膿(七才)

いたいたいといふ小娘の指に唾つけ抜くゆび輪
何がだうでも滑稽画(ぼんち)の元祖(まるまる)以来の酔(す
ぬ)たかた(八才)

ぬらくらする筈鯨だものを組板に乗なきや直りやせぬ
抱しめて余念ないのになれにくらしいとんだ時分に名ざし客(八
才)

名残りをしいと泣々下へうつ向機(はづみ)に舌を出し
きざな素ぶりも気がある故と思やまんざら憎ふない(九才)

牛の角文字憎くはないが癩にさはるは家(うち)の角
二人が姓名(なまへ)を区役所へあげてはれて夫婦といはれたい
(九才)

ランプの異見を取消した故恋の暗路(やみぢ)に私や迷ふ
縮緬の主の襟まき?しにもらひ時を松葉の色(そめ)(十才)

僕へ恋慕の婦人があらば二ヶ月以内に申し出る
上(かみ)の御説諭かふむるとも仕懸た恋路は止められぬ(十
才)

今日翌日とゆび折かぞへ(都でお別れ申してより父様や母様の思ふ
案じもどこへやら貴君の事が苦になつてほんに寝た間も忘れかね逢

たい見たいと明くれにこがれしたふてゐるものをきこへませぬと娘
氣に」円珍眺めてわらひ顔」(十一才)
私とおまへは染たる紅よ色を抜ても黄が退(のか)ん
貴社に愚拙(おろか)な文かきよせて載た次号の顔見たい」(十一
才)

泥水あがりぢや世帯はもてぬ朝寝坊浮氣に茶碗酒
花嫁の自由妨ぐ筆筒の(くわん)は音を聞たりきかせたり」(十
二才)

起請誓紙はそりや旧弊よ今では確乎の約定証
雲にうち乗る仙術よりもペラが飛せる人力車」(十二才)

理学化学は学んだけれど恋の究めはつきかねる
大きな鯨に根びきをされて松は千年の色を増」(十三才)

半年夜中の極地へ行って二人しつぽり寝て見たい
私しや時計でお前は鍵よ日毎あはねばうごきやせぬ」(十三才)

持かけられては乗られぬ物は人の女房と口車
若や夫かと門の戸あけりや棒をかゝえて立てゐる」(十四才)

門に立たる女松に男まつむすぶ赤繩(えにし)の注連かざり
壁に耳より未だ恐ろしい寝ものがたりに新聞紙」(十四才)

広い世界をこの春雨に狭くして行く模合傘
癩癩おこして畳を叩き埃りたゝせてくしやみする」(十五才)

わしは水素でたゞ昇りつめぬしは風船うはのそら
柳ばしから小船はむかし今は車で一ト走り」(十五才)

(広告)
御届 明治十二年十月七日

地本錦絵問屋
神田区小川町卅一番地

編輯人 山村清助
浅草区瓦町十二番地

出版人 綱島龜吉
定価五銭」(裏見返し)
編集の山村清助は一八九九年に没している。

九 『開化新撰はうた上るり入ど』

明治十一年十一月二十八日御届。請求番号：特4-201。

開化新撰はうた上るり入ど」

神田武井版
編輯兼出版人

神田鍛冶町十九番地
武井佐吉」(表紙)

新撰葉うた都々逸集本
太田やはん」(見返し)

金とき替うた
金禄が金禄が洋犬をふまへてまた借のつていらぬ普請に金つくし由

なき散ざいまだ止めぬか空の金箱穴をあけ人民こんくのやけちんの
そんいくさ人たちよしなかなあばれしやうないぞやなまづたち」(一
才)

香水しやぼんのいる香にまよひ」(うた沢はうた) やうす売のがお
まへの家業」のつたわたしは開化ぶり」(一才)

土手の柳についまねかれて「霞の衣もえもん坂象もんつくろふ初買
に花の江戸町京町や背中合の松ヶ枝に松の太夫の見返りは柳桜の仲
の町」恵方参りの道まよひ」(二才)

もやひつなぎし橋間の小舟」(常はづまさかど) 恋はくせ者世の人
の迷ひのふちせきのどくな山よりおちる流れの身うきねの琴のそれ
ならで」ういたはうたの水調子」(二才)

日増に究理は開けるけれど」(義太夫廿四孝) 回向しよとてお姿を
写しとらせはせぬものをだましてござる官員さん名家の血筋あるな
らばかへるとたつた一言の」ものいふ写真がなせ出来ぬ」(三才)

女の生徒がうわきななりで」(ときわづ朝がほ) こがれ初たるかの
人とかたらふ間さへ夏の夜の短いちぎりの本意ない別れ所尋るたよ
りさへ思ふにまかせぬ国の迎ひ」そつげふせぬ間に返県(きけん)
する」(三才)

今日は土曜日とこで待て」(はうた) 君来ずは寐やへはいらず柴
之戸へ出てはかへりかへりては」ひとりくよくよかやの中」(四
才)

目さきに紅葉のあいきやうみせて」(忠臣蔵二段目ときはづ) 小浪
ははつと手をつかへじつと見かわす顔とかほ互にむねに恋人と物も
言れぬ赤面は梅と桜の花角力」しつと返事が出来兼る」(四才)

上等なおまへに下等のわたし」(清元とば系) どうぞだかれて鼠と
はかわらふ恋の身のねがひ」中等にへだてがあるわいな」(五才)

はかま附てもほころびやすい「(おはん清元)また三味線の手ほどきもおまへにならひ夫からがお師匠さんへ幾田流」をんな生徒のあだごゝろ」(五ウ)
親ばかちやんりん
高いお山とそりやうそ団平矢張おかほのあほむきだんべい親ばかちやんりん
親ばかちやんりん
ひげに権妻電信に鯨猫にかなよみ付物だんべい」(六オ)
雪は巴の替歌
顔をしきりと打ながめ身にしむ夜半のさむ風にお風めすなと声ひそめよべどおこせど答なくアレたぬき寝入じやないかいな」(六ウ)
夕ぐれかへうた
きぬぎぬに寝まきのまゝのしどけなく送るろうかの短よもまたのあふせの辻占かアレ待なましまちなんせ羽をり直してあげんしよう」(七オ)
忍ぶ恋路替うた
地獄する身はさてあぶなさよ一寸と寝るのも命がけしげしげ巡(まわ)るおまわりの其日をぬすむ無理なこと」(七ウ)
海あんじ替うた
アレ見やしやんせアノ案子笠やみの着てしよんぼりと秋を祈の田の守り
うきな恋路の替うた
よひにちらりと店先で顔で知してやく束をむねでこたへてしらぬ顔
思ひあふさへ俣ならぬ実にくき名はこふかいな」(八オ)
恋のやみ路に寒もわすれ」(詩人のわがもの)我物と思へばかるし
傘の雪 北風吹雁雪紛々 恋の重荷をかたに掛けいもがり行ば冬の夜も 五心重畳凍相違」しのぶたよりの雪明り」(八ウ)
橋間すれ合小舟と小ぶね「吹よ川風上れよすだれ」ぬしの恋よとむなさわぎ
うば玉かへうた
玉だれの内やゆかしき涼舟いきな音メの爪びきも人目をかねし忍び
駒楽しい中じやないかいな」(九オ)
五音都々いつ
たとへ此身はもくづとなるも蓮の台なでアイウエオ
小くし取あげ気をとりになをしまみだながらにカキクケコ
いかに若気のいたりぢやとても子迄にかんなんサセスセソ」(九ウ)

前おなじく
水をさしあふ二人の中で恋のいきじをハヒフヘホ
人のこゝろもアノ白糸にむねのほむらがヤユエヨ」(十オ)
吸付烟草につみだまされて己が世帯をけむにする
金の時計が見当じやものを襟に附のはしれた事」(十ウ)
花になびくも世渡り故に東風(こち)は三筋の糸やなぎ
松と言字は好るゝはづよ公(きみ)と木(ぼく)とはさしむかひ」(十一オ)
わろく言りよとおまへとならば出ても嬉しい新聞に
私やくさりのつなぎめ堅く主は時計のくるひがち」(十一ウ)
親が不服で添せぬならば原告式人で出訴する
車夫のけんくわをはたから見れば「めつた」(金巻朱)やたらにふる「げんこ」(五銭)」(十一オ)
どふせ切らるゝかくごでしたと惜まず附出すしまだわけ
はなして居たいは山々なれどまたも蒸気の笛がなる」(十二ウ)
思ひがけなく見合す顔をけむにして行く汽車のまど
更にせんぎの次第もあれば極たせいしはおとりけし」(十三オ)
火事と雷りやきかいで済が防ぐ手立のない地震
おひげ払てらくするよりも女工となつてぬしのそば」(十三ウ)
最早四時かと酒暖めて待間ほどなくくつのおと
ひげを延して女猫をじやらしやれりやはなげが又のびる」(十四オ)
二人並んで写した写真切てもみれんで捨られぬ
主に貰ふた片身の写真寝間も放してなるものか」(十四ウ)
猫じや猫じやとおしやますけれど首尾能いけば二等しん
お金有やこそいやでもなびくくめん出来たらまたおいで」(十五オ)
海山越ても便りは出来る切れちやいやだとでんしんき
人目つゝんで見るちわぶみはねやの小まどの月あかり
明治十一年十一月廿八日御届
編輯兼出版人 神田鍛冶町十九番地
武井佐吉
価五銭五厘」(十五ウ)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

十『開化どぶ』 巻号・二一』

明治十二年三月十一日御届。請求番号：特43.254。

開化どぶ一 巻号

永島辰五郎録(表紙)

開化どぶ一 巻号

画工 孟齋作

木宗板(見返し)

円き地球に頭もまるく西洋かざりにしやぼん玉

しんぼうさんセヨ雨だれさへも石を突ぬくちからあり(一オ)

文明開化で規則が替るかはらないのは恋のみち

おまへと私しが二人りの胸へ掛けて置たや天利加羅夫(一ウ)

井戸の蛙はこの大空を四角なものじやと議論する

雪見がへりにもやひをつけてとけてうれしき舟のうち(二オ)

朝夕に顔は見合ど心のたけを通じ兼たるがらすまど

二人りの間へよい子をもうけ家族二人と門の札(二ウ)

ぬしはかうもり私しやステツキよ互ひにさしたりさゝせたり

つらい座しきやしにくな客の機嫌とるのも親のため(三オ)

通ふ恋路に石橋かけて手に手ひかれて渡りたい

真直に往(ゆか)にやならない車でさへも横にそれるはかぢしい

(三ウ)

いろはせず京のきむすめさへも今じやアイウエオでサシスセソ

いきでかうとて極(ごく)人がらで夫で金もち女房もち(四オ)

ぬしの来ぬ夜は写真を出して愚痴の様だが懐(だひ)て寝る

いやならいやだと判然(はつきり)いひなおもへ計りが色じやない

(四ウ)

おまへばかりがばかりじやないよほかにばかりがあるばかり

鬘をはらつて散髪あたま開化すがたの程のよさ(五オ)

浮気商売さらりと廢て権妻き取りでぬしのそば

風船に二人り乗組地球をはなれ晴てはなしがして見たい(五ウ)

軒にひらめく日の丸旗に霞たなびくてりがらふ

学校へ雪の降日も露いとわずに通ふ生徒の末を見よ(六オ)

ぬしが道理が私しが無理か是非の裁判してほしい

逢た初手から袖ない人と知りツ、ほれたが馬鹿らしい(六ウ)

夏もつめたい氷といへど胸のほむらは消はせぬ

ほれた同志でつひうかうかと九時の出仕が遅くなる(七オ)

美しくづくならよしてもおくれ五色がらすは破やすい

娘大事と人にも見せぬうちに色づく室のうめ(七ウ)

屏風小楯に枕の土俵床へ切込む抜刀隊

恋の夜学に勉強つみて色の手くだの大教師(八オ)

私しや旧弊ぬしや開化人そりのあわぬは知れて居る

先は多情であらふとまよわたりしや実意をどこまでも(八ウ)

日本国中でそれはれぬならば知らぬ異国でそひとげる

楽を振すておまへと添てくらうするのもしぢと情(九オ)

朝顔の花のやうなるおまへの氣まへ日ごと日ごとに気がかわる

足を突張り両手でおさへこしをしねつてふむミシン(九ウ)

おまへが時計で私しがねぢよすこしのゆだんでくるひだす

そはれにや死ぬとは昔のことよ命ありやこそあへもする(十オ)

姿ばかりの写真じやいけぬ心の底までうつしたい

鎧兜をさらりとすてゝ洋服でたちのいくさ人

木宗版(十ウ)

明治十二年三月十一日御届

定価三銭

画工兼編輯 須田丁四番地

東京書肆 永島辰五郎

出版人 馬喰町三丁目十番地

小森宗次郎(裏見返し)

開化どぶ一 二号

永島辰五郎録(表紙)

開化都々一

第貳号

永島孟齋画

木宗版(見返し)

意気な芸者素顔になつたらきたない便所が白くなる

馬車にされるも京ばしかぎり煉瓦あくればぬしのそば(一オ)

やすい時計と道楽息子くるに度毎損がゆく

散髪(ざんぎり)あたまをたゝいて見れば文明開化の音がする(一ウ)

高い諸式に下つたものは当時女の鬘ばかり

車夫の喧嘩を夜る出て見ればやみでげんこのめつた打(二オ)

王政御一新で十二月に春が来て月の三十日にや蒲鉾なりの月が出る

人力車曳と権妻さんは乗(のせ)るとそろそろねたり出す(二ウ)
 程や美顔(きりやう)にや私しはほれぬ実と情と心意氣
 恋の夜学につゐ実が入つて明のからすに夢さます(三才)
 究理究理となまもの知りな河童野郎の尻尾学者
 開化しらすの野ばんな奴にや新聞煎じてのませたい(三ウ)
 見かけが悪いとてみさげぬものよ見にくい唐茄子アあぢがよい
 互ひの心に電信かけて人目しのばす咄しがしてみたい(四才)
 外にや瓦斯燈内にはランプ開化の御代には闇がない
 姿ばかりの写真じやいかぬ心の底まで写したい(四ウ)
 つらい勤の辛防するもぬしと添ふのを樂しみに
 きれたお方の写真をみてはふさぐ心にためなみだ(五才)
 人はみめよりたゞ心氣よとげあるばらにも花がさく
 写真にうつせぬ心のまこととゞく時節を待つらさ(五ウ)
 倒れかゝつた親父(おやぢの)しんしよ娘がころんでまたおこす
 西洋すがたにづぼんとはまり袖ないおまへでくらうする(六才)
 雪は深々夜は更わたりおとこなみだに貰ひぢ
 筋違と石橋いわんすな私しが先へわたり染たる目がねばし(六ウ)
 野菊手折て手挿(ていけ)にすればいつか浮氣の虫がつく
 郵便だまりじやまだしも遅ひはりがね便りぞ知らせたい(七才)
 男女同権女房じやとても自俣にたゞいぢやすまぬぞへ
 蒸氣発車を見送りながら無事を祈るも惚たなか(七ウ)
 高砂や四海浪路とうたはぬうち私しがものとはならぬぞへ
 漢語つかつてごつごつしてはもどこ可愛氣のあるお人(八才)
 今は待身を笑わゞわらへすへは高砂そふてみしよ
 恋のやみ路に瓦斯燈照らし晴て逢引して見たい(八ウ)
 二時が三時と指をりかぞへ待に甲斐なき明のかね
 せじでまるめる浮氣の身でも義理と情にやほだされる(九才)
 縁を離れて飛ぶ風船は何処へ便るか氣がもめる
 恋の初わけもしらはの娘思ひあり氣な手まり唄(九ウ)
 まいらせ候と文かきくけこどつか首尾してまみむめも
 雨も一降初雷りが縁を結ぶの蚊帳の内(十才)
 辛防しなんせ雪問の若菜頓て嫁菜のはなが咲
 十五夜にうさぎが飛出て空天(そら)打ながめ月の出ぬのでまこつ
 いた(十ウ)
 明治十二年三月十一日御届
 定価三銭

画工兼編輯 須田丁四番地
 永島辰五郎
 東京書肆 出版人 馬喰町三丁目十番地
 小森宗次郎(裏見返し)
 永島辰五郎 永島孟齋 歌川芳虎 ウィキペディアには「没年
 は不明であるが明治二年(一八八〇年)頃、死去したと考えられる」
 とある。

十一 『東の花開化都々逸 雪・月』

明治十二年五月十七日御届。請求番号：特4-176。

東の花開化都々逸
 雪
 永島辰五郎著(表紙)
 東之花開化都々逸
 雪
 木宗版
 虎峯画(見返し)
 逢ば笑はせ別れて泣かすにくいぬしさんの裏表
 辛抱さんせよ時さへ来れば雪の中でも花がさく(一才)
 恋の訴訟に代言たてゝ粹な裁判してほしい
 月も隈なく伏屋を照す恋は闇路のみそかごと(一ウ)
 帰るあとから案じる寒さ今晩(けさ)は声ある煙出し
 雪見歸りに嬉の森よニツ双(なら)びし枕橋(二才)
 逢ふは邂逅(たまさか)通ふは夜ごと逢はず歸るは幾回(いくたび)
 か
 貴身と約束定るからは浮氣させぬは妻(わし)が義務(二ウ)
 すゝり泣して膝すりよせてぬしへ約束御わすれか
 宅(うち)へ歸れば親仁が叱る窓に頼杖日を送る(三才)
 恍惚(ほれた)こゝろの弱みを隠し依頼(たのみ)せぬみにするた
 のみ
 男嫌ひの披条(ひきふだ)するも小蠅(うるさい)新聞を妨ぐため
 (三ウ)
 一年三百六十五日逢ふ日殖(ふや)した新曆(にいじよみ)

好に添せる律例（おきて）があらば無理な協議（そつだん）も起るまい」（四才）
 袂ひかへてたゞ潜然（さめざめ）とどふでも今曙（けさ）は帰るきか
 文明開化で自由になつてわしの利害はぬしまかせ」（四才）
 擲（うち）など蹴るなと随意（いゝよ）にさんせ苦楽まかせた此からだ
 先のこゝろを分析（ぶわけ）をすれば虚（うそ）と実との四分六分」（五才）
 情知らずのあの車夫（くるまひき）願（ふりかへ）る間も泣く別れぬしの浮気も傍（はた）から報（つげ）る部屋は恋路の新聞屋」（五才）
 宵の口舌で起た葛藤（もつれ）誰が裁断するものか
 来ると約束さだめた宵はいとゞ清浄（きれい）な身だしなみ」（六才）
 ずんと居（すわつ）て履歴をならべても客氣（うわき）をまだおし
 問ぬ先から其自解（いひわけ）は隠蔽（かくす）事情（こと）がらある証拠」（六才）
 花の開くる時節がきてもないておられぬ籠の鳥
 欲徳づくなら何あの人に？初（はつ）から投票（いれふだ）するものか」（七才）
 しかとからんでをく襟巻も忍び解ける浮気もの
 今は浮名も意地にて通し氣促暮しの新世帯（あらげたい）」（七才）
 屏風から内ヤわたしの所轄（しはい）袒褻（たんせき）裸体（らてい）も自由の権
 窓をあければそら飛鳥の翼恨しまゝならぬ」（八才）
 ぬしのこゝろは儷廉（ねやす）の時辰儀（とけい）直（じき）にそろそろくるい出す
 貴身を見ぬ夜は写真をながめ愚痴なよふだがうさはらし」（八才）
 後から羽織をきせる煙草入忘れさんすな宵の言の葉
 はれて添れぬ身の束縛もとけし笑顔に青眉毛」（九才）
 今更よせとはそりやどぶよくな分迷怪花（ぶんめいくわいくわ）にや誰がした
 胸に約束漏しちやならぬ護謄（ごむ）で消されぬ蔭の口」（九才）
 おめへばかりを目的（めあて）にすればれこがまゝなる口がひる

酔て倒れてつい寝すごして月の夜にして夕桜」（十才）
 初会（はつかい）の時から袖無（そでなし）いと見る度毎に袖無し
 遅い帰りをそれとは言ずともす早附木（まつち）で当（あ）こすり
 明治十二年五月十七日御届
 編輯人 須田町四番地 永嶋辰五郎
 出版人 馬喰町三丁目十番地 小森宗次郎
 定価三錢」（十才）
 （広告）
 「地本錦絵」問屋 馬喰町三丁目十番地 出版人 木屋 小森宗次郎」（裏見返し）
 東之花開化都々逸 月」（表紙）
 東の花開化都々逸
 月
 木宗版
 虎峯画（見返し）
 辛苦つくして文ヤイユエヨ色よき返事をマミムメモ
 楽は苦の種苦は楽のたねアレサ吾氣（しはんぼつ）が柿のたね」（一才）
 腹立際（まぎれ）に飲む冷酒も後には積（しやく）の種となる
 宵は嬉しく思ふてゐてもにくや夜明の鐘がなる」（一才）
 屋根のはがれを卸して急ぐいきなつめひき水調子
 黒い羽織にこむぐつきめて役所がよひもいきなもの」（二才）
 月はさへれどこゝろはくもる妾（わし）がこひぢもしんのやみ
 嫉妬（りんき）らしいが能（よ）くきかしゃんせ愚痴になるのもぬしゆへに」（二才）
 ぬしが来たかと障子を明けりヤ月が笑ふか揺（ゆれ）るみづ
 親のゆづりの五本のゆびを四本半には誰がした」（三才）
 何がふそくで床ばんさせるわしはよけれど子にすまぬ
 恍（ほ）れた様子（ぶり）すりやばかめが通ふはやく赤い衣（べ）を着せて見たい」（三才）
 手くだ娼妓（じよろう）は人力車ひき乗てそろそろ頼（ねだ）り出す
 愚痴や未練（みれん）についほだされてやばと知りつゝ神いじり」（四才）

出稼(つとめ)すれどもかねにはほれぬ義理といふ字にわしやほれ

新聞くらしいをなにはゞからふ色は思案の外といふ(四ウ)

みたか蕎麦屋をあそんでやると狸とむじなが客になる

向ふ鏡に面もないか二度のつとめの引まゆげ(五オ)

声妃(げいしや)声妃と名ばかり芸者三味線きらいで枕すき

秋の草場に鳴くむしよりもなかなかぬ螢が身を焦す(五ウ)

車じや寒かる着てゆかしやんせ妾(わたし)のきがへの此小袖

されば浮世を能くくわんずれどかくむちやくちや色と酒(六オ)

雨の降る夜も風吹く夜半も国の為めなりや厭やせむ

三味線のこまの近所で成長(そだつ)たわたし撥でもあけらにやき

れはせん(六ウ)

ぬしの立腹(はらだち)わたしのこゝろ水に浮草根はもたぬ

臯月さみだれよもぎに菖蒲わたしやおまへのぼり竿(七オ)

鷺を鴉と見たのは無理か雪といふ字も墨で書く

なまくら鋼(はがね)のわしや三ツ目鉋きをもむばかりじやないか

いな(七ウ)

芸者商売さらりとやめてはやくまるわけ主のそば

走る蒸気は目に見ゆれども月日のたつのは目に見へぬ(八オ)

時世時節とあきらめさんせ士衆(さむらひしゆう)さへ車ひく

定價三銭(十ウ)

(広告)

「地本錦絵」問屋 馬喰町三丁目十番地 出版人 木屋 小森宗次

郎(裏見返し) 永島辰五郎 永島孟斎 歌川芳虎 ウィキペディアには「没年

は不明であるが明治二年(一八八〇年)頃、死去したと考えられる」とある。

十二 『開化芸妓端唄浄るり入都々逸 第三号』

明治十二年五月十九日御届。請求番号：特4200。

開化芸妓端唄浄るり入都々逸 第三号(表紙)

口章(序文也。省略)

木楽斎謹席(見返し)

大津糸替つた 鍛冶太左述る

旅の衣はず掛の露けき袖やしほらん安宅の新関に戸櫂の左衛門

うけたまわつてきつと番藤するこへ山伏姿の五六人宅僧止れてよ

び留られて弁慶左そくの勧進帳

こわいる団十郎

夫ヲレつらつらおもん見れば大をん径しゆのうた秋の月長寿長夜の

永きよにところかすべき人もなきなぞいつわり通り行(一オ)

おいた手紙を開いて見れば(常わづ朝がほ宿や)いつかわ廻り逢

坂の関路を跡に近江じや美濃尾張さへ定めなき)ぬしは航海なみの

深いぞみはわしやないけれど（義太夫大功記十段目）こんな殿御をしながら是が別れの盃とかなしさかくすわらひが随分や手柄高名して「一日夫婦と言いたい（柳橋こん）」（三ウ）
またも今宵はまちほけやくか（たなのたるま替うた）あまりしん気くさゝに棚の小猫さんをチヨイトおろし辻占したりチヨイト拜んでも見たり」どふぞ来るよにしてほしい」（四オ）
酒をちからにつけまわしても（義太夫こし越状五年）軍師も今はちりほこり篝の先に「升樽くゞりつけアイヤイ目貫師ナ何でもせい」今さらどふしてやめられうか」（四ウ）
はうた羽織かくしてかへうた
帽子かくして剣引留てどうでも五時迄居さんせといゝつゝ立て部やの口障子ぴつしやり引きしめてコレ見やしんせ此時計（大坂二記美也）」（五オ）
はうたむつとして替うた
つんとしてはいるも野僕な青書生困りし胸を悪洒落に借て行く勤め代ならば奢りにしてほしや」（五ウ）
朝のわかれに引く袂さへかわる浮世の西洋服
耳と尻尾を為替にしたらこんな税金出かせまい」（六オ）
世かい一般直針金で便り聞たり聞せたり
主も徳利とかん替（がへ）さんせ猪口（ちよこ）と出来たる中じやない」（六ウ）
恋の闇路に瓦斯燈あらば（俊寛嶋物語）女のきつすい天下ー其心を見るからは物がたらんと引たくり鏡にうつる我顔をためつすがめつ打詠」ほんにくもりがないわいな」（七オ）
鼻をかむなど言ではないが（本調子はうた歌沢ぶし）つれないと思ふ程猶身にしみじみと寝ぬ目に書たはなしぶみ」たまには出さぬと化て出る」（七ウ）
たのみずくないうき世のならい（義太夫一の谷組うち）弥陀の利剣に唱名ふり上はあげながら玉のやうなる御粧ひなさけなやむざんやと胸にはりさく気をくれに太刀ふり上し手もよわり（あつ盛）熊谷早く首を討れよ」とにかくみれんがさきにたつ」（八オ）
くろくするうち夫卜の病氣（義太夫阿わのなると）女夫の誠を天道も憐有て国次の刀のせんぎ済迄は夫卜の命たすけてたべと」ねがふは警視の御役にん」（八ウ）
お顔見たさに日に幾度も行つ戻りつ花に蝶
臭気止さへある今の世になぜに出来ないうわきどめ」（九オ）

ふたり心におろした錠を（義太夫いざり滝の段）引立られてゆく思ひ見送る思ひもおしどりの胸の剣刃のみ込滝ぐちが」あけて言れぬむねのうち」（九ウ）
洋服見たよなおまへの心いつも袖ない事ばかり（近江屋柳枝）
お待なんしと袖から時計一時早いと引留る（ネツ八幡楼愛の助）」（十オ）
胸に有つたけ言たい事もせまい端書に書のかす
主の手管にツボンとはまり人にや靴々笑われる」（十ウ）
ぬしは苦のたねくはぬしゆへに（義太夫鬼一の三の切）文によふ返事仕やらぬの但しは女に惚らるゝが嫌ひなら此様にどこもか惚られる様に可愛らしう生りやつた」外に持気はないわいな」（十一オ）
ほれた男に誠をあかし（常わづおみわ御殿ば）泪にしほるふり袖にむちよ手綱と立上り竹に雀はナア品よくとまるナとめてサとまらぬナ色の道」ゑゝもふしんきな事ばかり（油町三笑）」（十一ウ）
親にやうらまれ他人にやいわれ（常わづうとぶ）我身に思わぬ恋人を思ひ思ひでいたづらな」色の取もちやよしなんせ」（十二オ）
差配人頼んでわたしの籍を（清元さんば）ゑんを定だんの日を撰み」早く編せきせにやならぬ」（十二ウ）
いかに士族がつよいと云て（長うたくわんじん帳）ついに泣ぬ弁慶も一期の泪ぞしゆせうなる判官御手を取たもぶ（団十郎こわいるにて）これを思へばものゝ心の」義理と戦そうにや恐れます」（十三オ）
後の苦勞の種まき紙に思ひまゐらせそろかしく
渋いやつだとされた柿も世話の仕様で味が出る」（十三ウ）
赤い心をたゞ一筋に明けて嬉しき日曜日
丸い中には何苦もなく首尾も宵見の月曜日」（十四オ）
開化新文句満里うた
一ツトや光り輝く日の丸の日の国旗も豊に軒の先き
二ツトや二人り並んで写真真取写真真日々に開ける新聞誌新聞誌
三ツトや道の高（たかひく）平けて平けて橋は追々鉄になる」（十四ウ）
四ツトや四方の国迄轟し轟し教育進歩の大手柄大手柄
五ツトやいか程開ぬ片意地も片意地も演舌会では解ます解ます
六ツトや昔の音色を今の世に今の世に合て調べる雅楽局（うたのきよく）

七ツトや何の品出も並置並置便利に買せる勸工場勸工場(十五才)
八ツとや家毎毎に美をさくし売買盛んと勉きよする勉きよする
九ツとやこまかな貯金も馱ていに馱ていに預る都合のありがたさあ
りがたさ

十才とや東洋一の文明と文明と言れる基の府けん会府けん会

御届 明治十二年五月十九日

東京神田区鍛冶町十九番地

編輯出板兼 武井佐吉

第四号引つゞき出板いたし申候(十五ウ)

(広告)

地本錦絵問屋 太田屋

御届 明治十二年五月 日

定価五銭

東京神田区鍛冶町十九番地

編輯出板元 武井佐吉(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化
庁長官裁定のもと、公開されている。

十二 『新選さはり都々一 第壹号・第三号』

明治十二年十一月六日・明治十四年六月廿四日御届。請求番号：特
44-174。

新選さはり都々一
第壹号

古慶坊三笑稿

東海堂歌重函

東京松林堂梓(表紙)

目録

朝顔日記宿屋

「おしゆん伝兵衛」

大功記十段目

兜軍記あこや

廿四孝狐火

三勝酒屋

足達原三ノ切

「梅川忠兵衛」 新口村

菅原寺子屋

先代萩六ツ目

千本桜すしや

三代記八ツ目

日吉丸三の切

忠臣蔵七段目

伊賀越沼津 千両幟

「お染久松」質店 一之谷三段目

以上(見返し)

朝顔日記宿屋

あいたいばかりにこはさもわすれ(朝がほ)又も都を迷ひ出いつ

かは。廻りあふさかの。閑路を跡に。近江路や美濃尾張さへ定めな

く。恋し恋しに目をなきつぶし。物のあいろも水鳥の。くがにさま

よふかなしさは「くらき夜道もたゞ一人り(一才)

堀川

おまへを人りに苦勞はさせぬ(そりや聞へませぬ伝兵へさま。お詞

無理とは思わねどそも逢かゝるははじめより。末の未迄いひかはし。

たがいに胸を。あかし合。何の遠慮も内証の。せはしられても恩に

きぬ。ほんの女夫と思ふ物。大事大事の夫の難義。足ぬわたしもと

もどもに(一ウ)

大功記十

ぬしの不実は元より承知(コレ見たまへ光秀どの軍のかどでにくれ

ぐれもおいさめ申した其時に。思ひ留つて給へば斯した歎きは有ま

いに。知ぬ事とは云ながら。現在母御を手にかけて。ころすといふ

は何事ぞ)かいごするのをまつばかり(一才)

阿古屋

雪のあしたにすい付たばこ(サア景清が行衛はと問れし時の其くる

しき。水せめ火責はこたゑふが。情と義理とにひしがれては。此ほ

ねぼねくたくる思ひ。それ程せつない事ながら。しらぬ事とはせし

もなし此上のお情には。いつそころして下さんせ)なげだすきせる

にとがはない(二ウ)

廿四孝狐火

づつと手にとりおまへの写しん(ゑはうせふ迎お姿を画にはかゝし

はせぬ物をたましいかへすはんごん香。名画の力も有ならば。かは

いとたつた一トことのお。おこゑが聞たい聞たいとゑざうのそばに身

を打ふし)あふたはじめを思ひ出す(三才)

三勝酒屋

逢ぬむかしに成事ならば(今比は半七様ど)にどふして(つやうらぶぞ。

今さら返らぬ事ながら。わしといふ者ないならば半兵へ様もお通に

めんじ。子迄なしたる三勝どの。とくにも呼入さしやんしたら。半

七様の身持直り御勘当も(三ウ)有まいに。思へば思へば。此そ

のが。去年の秋の煩ひにいつそ死で仕まふたら。斯した難義は出来

まいもの。お気に入りとしりながら。未練なわたしがりんねゆへ。添臥はかなはず共。おそばに居たいとしんぼうして。是迄いたのが。お身の仇今の思ひにくらぶれば。一年前に此そのが。死る心が付なんだ」思ひ切たやぬしの事」(四才)

安達原三

のきのかやりの烟にむせて「見れど盲のかきのぞき。早暮過る風につれ。折々からしきりに。ふる雪に身はぬれ鷺のあしがきや。中をへだつる白妙も天道様のお憎しみ。受し此身はいとはねど」泣ぬなみだに目をはらし」(四ウ)

沼津

花はちるとも匂ひはのこせ「先程のお咄しには。金銀づくではないとのうはさ燈火の消しより。アノ妙薬をどうばなと思ひ付しが身の因果。どぶぞお慈悲に是申今宵の事は此ばざり」たとへこの末どふなると」(五才)

お染質店

ちいさい時から学校がよひ「ソリヤ曲がない胸欲な。高いも低いも姫ごぜの。肌ふれるのは只一ト入り親兄弟もふり捨て殿御に付が世の教へ。それにまだまだ悲しきは。夕部の風呂のあがりばで。此腹帯をかゝさんが見付さんして。」恋のいろはの習字本」(五ウ)

梅川

ぬしのこゝろはふる雪よ「大坂を立退ても。私が姿が目立ば。借かごに日を送り。ならのはたこや三輪の茶や。五日三日夜を明し。廿日余りに四十両遣はたして。二歩残る」積るよふでも解やすい」(六才)

寺児屋

ぬしの口舌とあの上るりは「御台若君もるともにしやくりあげたる御泪。めいどの旅へ寺入の師匠はみだぶつしや無二仏六道能化の弟子になり。さいの河原ですな手本。」(六ウ)いろは書きを。あへなくもちりぬる命せしもなや。あすの夜たれか添乳せんらむうめ見る親心剣と死出のやまけこへ。あさきゆめみし心地して。跡は門火に炙ひもせず」ほんになくやら笑ふやら」(七才)

先代萩六

なれぬ世帯にたがひにやつれ「思ひ廻せば此程から。諷ふた唄に千松が。七ツ八ツから金山へ。一年待共まだ見へぬ。二年待どもまだみへぬと。哥の中なる千松は。待かい有て父母に。顔をば見せる事もある」今はしんくの美くらべ」(七ウ)

千本桜三

心とこゝろが合さへすれば「父も聞へず母様も。夢にもしらして下さつたら。たとへこがれて死すれば逆。雲井かにちかき御方へ。すしやの娘がほれられうか」性があふうが合まひが」(八才)

三代記

浮気なこゝろは少しもないが「是程迄につきしたふわたしは心思ひやつてくれもせで心つよやと緋緘に。うらむらさきの色ふかき」恋しい御かたが有ばかり」(八ウ)

日吉丸三

因循すぎると笑はばわらへ「過しあふ夜のむつ言を身にしみじみと片時も思ひわするゝひまもなふ。年月へだつ其内に。うつり安いくきはとのごの心。もしや見捨はなされぬかと。ほんにあらゆる神さんや仏様迄むりいふて」私しや頑固でかた思ひ」(九才)

忠臣蔵七

くるしい異見の葉がどくと「おかるは始終せき上せき上。便のないは身の代を。役に立てのたび立か。いとま乞にも見へそな物と。うらんで計りおりました。勿体ないがとゝ様へ非業の死でも御年の上。勘平殿は三十になるやならずにしぬるとは」なつて日に日につもる積」(九ウ)

千両幟

便り計りでたがひにいれど「江戸長崎国々へ。行しやんすりや其跡の留主は猶さら女氣のひとりよくよ物案じ。夫にけがのない様にと祈る神様仏様。妙見さまへ精進も。戻らしやんして顔見る迄」縁は切れない電信機」(十才)

一の谷陣屋

人の諫めもきこへぬ善よ「あいとばかり女房へ。あへなき首を手に取り上げ。見るもなみだにふさがりて。かはる我子の死顔にむねはせきあげ身も。ふるわれもつたる首のゆるぐのをうなづくよふに思はれて「耳に残りし君がこへ」(十ウ)

出版御届明治十二年十一月六日

編輯兼出版

東京府平民

水野慶次郎

日本橋区通油町十四番地」(裏見返し)

新選さはり都々々

第三号

古慶坊三笑稿
東海道歌重圖
東京松林堂梓(表紙)

上るり目録附

橋弁慶

二十四孝

夕ぎり

彦山毛谷村

八百屋半兵衛

いもせ山御殿

おまめ八郎兵衛

御所桜

梅の由兵衛

二度目清公

梓元

忍ぶ合図にあんどう

右に立左りへ行ば

上ればス八曲者よ

若君は薄衣取退打

略(方角違へてぶつ

色は思案の外だとい

迄も逢たふ思た?荷

けさもたすきとか

しめりもへかぬる

する(一ウ)

姿はみせねどやさ

の習ひと云ながら

そしりも世の義理

善悪も嬉しいに

(下略)人をまよは

雨の降夜もいと

たいたとへ此世は

巻の此主様には

さでそのま九か

腰に提灯天窓に

ランプ(わしが心

のたけのこをさ

桜丸腹切

五右衛門釜入

いざり?別

蝶花形

花上野

道春館

姫小松

杉酒屋

さくら宗吾

「おはん長兵衛」

桂川

松林堂(見返し)

「若君彼をなぶつ

「いさまになぎな

たの物をはつし

て跳

べ切てかゝれば

追取のべ切てか

柄長く追取のべ

切てかゝれば

なぎな柄長く

追取のべ切て

かゝれば

なぎな柄長く

追取のべ切て

かゝれば

なぎな柄長く

追取のべ切て

かゝれば

なぎな柄長く

追取のべ切て

かゝれば

なぎな柄長く

追取のべ切て

てけふ岩たけかあすいわ付よめなにくむもたれ故ぞみんなそなたに
ほふれんそ人のわらびもコンナコンナドツコイシヨいとやせぬ(下
略)隠居は夜這のしたくする(三才)

あつ意見が身に染込で「雪やころゝんあられやころゝんこはそも
何たるみんぐはそやこの小にいくいじやなけれ共我子にちゝが呑した
いコレちとの間ちとの間寝入てたもいのと心もそらはかきくらし
たふりしきる白雪に外になくこへ八けんじごく剣を呑より身にこた
へ思はずしらすまるびをりくだけよ」思はず冷たいあせをかく(三
ウ)

仏こゝろ親たちをだまし「年比日ごる信心する天神様の御利生にも
叶はぬ事か情なやゆるして下され八郎兵衛どの堪忍してくれ我子や
と抱しめ抱しめ背なでさすり親と子が涙のかぎり泣尽す心の内こそ
いぢらしい(下略)神をいのるもぬしのため(四才)

晴る時節がモヲ有そうな「国を国を出て十七年水子をかゝへ様々と
さまよい廻りしうきかんなん今にたづね逢ね共女のねん力これこそ
は娘よ父よと名乗合するそれ迄は」ものと指折る入梅のおく(四
ウ)

ひよんなはめからついうかうかと「夫レから直に此梅は嶋の内の木
わたやへ公界三年うき勤めうきは重而浮世ぞと又も思ひに胸ふさが
る押入明て取出すけつこはつこの下かたびら此子にきしよ逆買置た
が経帷子に成たかと(下略)首もまはらぬこの始末(五才)

杉田浮名とあきらめながら「二度花の色香もなく野辺のかげろふ春
の雪けふやあすやと消る日も如月四日の暁天にヤミ何と評定が極り
しかシテシテお身の落着は(下略)袖に梅見の香がのこる(五
ウ)

こんこん説諭を通知はしたが「兄弟が名にかたどり松王梅王桜
丸?りや冥加なおおほし子になし下され御恩は上なきついで勤
三人の其中に桜丸が身の幸人間の種ならぬ竹の園の御所奉公(下
略)恋に上下のへだてない(六才)

ぬしのうそをば手帳にとめて「性根みだるゝ五右衛門が子を思ふ氣
のやるてなく片手につかんで五郎市を目よりも高くさし上しばしな
り共苦しみませせじとこそは身をもがく油は次第ににへ上り五体も
あからむかしやくの責(下略)死とえんまに訴へる(六ウ)

?苦勞もわしやいとやせぬ「付添に私は女の身力に思ふ主しの身
は腰ひざ抜て?ないと成やつれたる夫婦が流浪たくわへに迄つき果
て捨り定め旅の?はて白川の陸奥にさまよふ一人が身に余る(下

略) そはれる見?の付うへは(七オ)

どうで男よ浮気をせうと(聞ていそいそ姉?米お馬の先の高名にもまさつた手からとほめそやす余所のよろこび子心に聞も無ねんさ松太郎(下略) あきらめつければ果がない(七ウ)

みかけばかりじゃこころがしれぬ(たとへつゞれはまとふても心を錦になぜ持て爺様のかたき討負せ名を上ふとは思はずかと息もたへだへだんじきに心ぐるしき其風情目も当られずいぢらし(下略) 苦勞するならもるともに(八オ)

心とこころ合さへすれば(たとへいづれのたね成共わらはが為には大事の姉様おまへは殺さぬ自をイヤのふそもじはながらへていや自をイヤわらはと死をあらそいし姉妹の心根不便と母親はいづれをそれとわけ兼る胸は涙の三つ瀬川身も浮計り歎しが(下略) 性が合ふが合まひが(八ウ)

君は洋行数へりや三年(このごろ?三人一所に?つるに何連一人此嶋にあるべき身とは思はねど遠が命の悲しさにともづなに取付すがりせめて向ふの嶋まで載せてたべと引とゞむれどやせからだ船に引れて磯ばたを(下略) ながめつくした此写しん(九オ)

笑て苦しい寸尺とりて(是迄おまへとわたしが中逢事さへもたままたまに千年も万年もかはらぬちぎりとおつしやつた其約束はいつわりか浮世の訳もわきまへぬ在所そだちのわたしでもいひかはした事忘れはせぬ余りむごひと取付て涙先立恨云(下略) 泣て嬉しい間に合す(九ウ)

苦界はなれて夫婦になつて(いかにお国の為じやとて我身を?て殿様へ恐しい直訴訟名主と云るゝ身の因果思へば思へば我々は宿世いか成たねをまき夫婦親子と生れ来てかゝるうき目を見る事やと狂気のごとく取付けば子供も共にすがり付一度にわつと声立て(下略) うれしい間もなくまた浮気(十オ)

としが違うと笑はゞわらへ(ちいさい時からお前をまわし祇園集りや北の山物見けんぶつ跡おふて手を引かれたりおわれたりはだか人形むり云ふて買ふてもろふたかんざしのすかしたらしてあまやかしかはいがられた親たちより(下略) わたしにや大事な内の人(十ウ)

出版御届明治十四年六月廿四日
定価三銭
編輯兼出版人 東京府平民
水野慶次郎

日本橋区通油町十四番地(裏見返し)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

十四 『開化大つゑかつぱれぶし葉唄都々一吹分』 初編・二編

明治十三年二月十八日御届。請求番号：特A-157。

開化大つゑかつぱれぶし葉唄都々一吹分 初(表紙)
はうたどゞいつかつぱれぶし 初編(見返し)
なかぬひしやくは一日もないと人目かこひて袖しぼる(一オ)
みゝのふたおきあけてはいへぬ外に水さしつみなこと
茶しやくにさわらばかんにんさんせたくむふくさのおりめにも(一ウ)

かいあん寺かへうた
あれみやしやんせ角田川マ、ヨつくばの雪でさへおよびないぞへ花のかほ(二オ)
カツボレ(省略)(二ウ)
カツボレ(省略)(三オ)
カツボレ(省略)(三ウ)
カツボレ(省略)(四オ)
ぬしによふ似たあの姿絵も(ぎ太夫) ゑかふしやうとておすがたを糸にはかゝせはせぬものをたましいかへすはんごんこふめいぐわのちからもあるならば(あわぬその夜はまくらかけ(四ウ))
せけんはる身は何かにつけて(ぎ太夫) 角力取を男にもちや江戸長崎や国々へ行しやんした其跡のるすはなをさら女気のひとりくよくよ物あんじ(トしほきがねがあるわいな(五オ))
秋風にみだれごゝるもいまさらぐちよ(ぎ太夫朝がほ) やつれはてたる身をかこちなみだにくもるつましらべ露のひぬ間のあさがほをてらす日かげの(どぶぞおもひをはらしたい(五ウ))
はないけの水にだまされ今さらくやし(常津おふさ徳兵へ) そふとはしらすのろいひかはしたをまにうけてちゑあさがほのおくれざきはない身にも(ねのないわたしにくるふさせ(六オ))
あふときはおもひかつかつよしたるとすれど(常津大江山) そ

りや何いわんすよそ様にまたるゝ人があるふとはコレどの顔でにく
て口あいたいといふしん実を」わかれりやはなしもまた残る」(六
ウ)
 そんなうわきなおまへのたねにどふしてやさしいこの子ども
 女房たゝいて手がらにさんせほかに手がらないおまえ」(七オ)
 恋はくせものしのぶとすれどふも思ひがますわいな
 あふてもあふても逢たらぬそはぎやまひはなをりやせぬ」(七ウ)
 あへばことすむ手紙じやならぬあはぬひとよはめもあわぬ
 はくじよなおまへにかふまでほれてすへはどふなることかいな」(八
 オ)
 おもかげぐらいじやこゝろがすまぬそふて心をはらしたい
 とりかげにねづみなきして又もおもひぬしじやうきめを見るはい
 な」(八ウ)
 とめてあんじる御内のしゆびを又もあんじるあすのこと
 なんの今さらこふかいらしくあわぎくろふもせまいもの」(九オ)
 君をおもへば三度のまゝものどにとふらぬうきおもひ
 袖になみだをつゝむとすれどいつもかはらずほにいでる」(九ウ)
 露の小草にこゝへのむしもいつかすを出てあらざたい
 月にすがたのうつるを見てもしやぬしかとねづみなき」(十オ)
 らんぶのあかりで夜顔(ねがほ)をみればなを思ひがますわひな
 かどの戸がとんといふてもふとめをさましもしや主かとむなさわぎ
 明治十三年二月十八日
 御届 編輯兼出版人 神田力子丁六番地 長谷川忠兵衛
 価三銭」(十ウ)
 開化大つゑかつぼれぶし葉唄都々一吹分 一」(表紙)
 はうたどゝいつかつぼれぶし 二偏」(見返し)
 菜のはなのさいてうれしい胡蝶の夢をむすぶゑにしのはつ御見」一
 オ)
 カツボレ」(省略)」(一ウ)
 カツボレ」(省略)」(二オ)
 カツボレ」(省略)」(二ウ)
 カツボレ」(省略)」(三オ)
 カツボレ」(省略)」(三ウ)
 カツボレ」(省略)」(四オ)
 カツボレ」(省略)」(四ウ)

(省略)」(五オ)
 大つゑぶし」(省略)」(五ウ)
 (省略)」(六オ)
 大津絵ぶし」(省略)」(六ウ)
 (省略)」(七オ)
 大津ゑぶし」(省略)」(七ウ)
 (省略)」(八オ)
 トツチリトン」(省略)」(八ウ)
 (省略)」(九オ)
 トツチリトン」(省略)」(九ウ)
 (省略)」(十オ)
 まつにかゝりしあの白雪もとけてうれしい今朝の春
 御届明治十三年二月十八日
 編輯兼出版人 神田力子丁六番地 長谷川忠兵衛
 価三銭」(十ウ)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」において、文化
 庁長官裁定のもと、公開されている。
 十五 『開化新文句吉原都々一 初遍・二遍
 ・三偏・四偏』
 明治十三年二月十八日御届。請求番号：特4-164。
 開化新文句吉原都々一 初遍」(表紙)
 開化新文句よし原都々逸」(見返し)
 あれがいやさについ引留て時間おくれを案じられ
 わたしや泥水費方は鯨中のよいのは無理はない」(一オ)
 金はわざもの心の実は売買禁じて金ばかり
 海老で鯛つりやむかしのことよ今じや蛭子で猫をつる」(一ウ)
 猫と鯨の結ぶのかみは明治通用の恵比寿さま
 顔は見ゆれど互のむねを明ていはれぬガラス窓」(二オ)
 遠い国さへ和親を結ぶましてたがい日本同士
 すいたどふしのちわ狂ひなんのいら猿新聞屋」(二ウ)
 御上の御説諭蒙るとてもしかけた恋路は止られぬ
 馬車や気船は苦勞じやないがうつかり乗られぬ人の口」(三オ)

主とわたしは斯云中となんのいらざる新聞や
 アレサ続てきがいきますよ木場へのり込長筏」(三ウ)
 二葉や みね
 おつこちましたよ恋ぢのやみに
 とほしておくれよ小挑灯
 かぎや ぶん
 君にわかれてなにしたのしみにくらす此身をさつさんせ」(四オ)
 みこや 小もと
 今宵来るかと寝耳をすましきけば水鶏が又た々く
 玉千代 あい
 用があるとて呼せておいてとりの鳴までちわ咄し」(四ウ)
 近江や 小みな
 おまへから傘わしや降る雨よ晴ていわれぬ身のつらさ
 吉村 菊二
 さや々にしきにくるまるとてもいやな枕はかはしやせぬ」(五オ)
 丸岡 小たか
 どうで甘茶とあきらめながら迷ふころの花見堂
 ひしや そめ
 いろにならふとおもはぬ人もせけばつらあていろになる」(五ウ)
 かるや 小万
 おもひ初しもあによつもみぢいきなおすがたわしやうれし
 松かん べん
 くろう苦げんのつとめの身でもぬしをおもへばいとやすい」(六オ)
 甲?? かる
 夏は団扇かわしや浦山ししばしはなれぬ主の側
 和泉や かぢ
 わしとおまへは竹やら木やら人はなるやらいひたがる」(六ウ)
 信濃屋 てう
 すいたおかたにろうかで逢てごみもはいらぬめをこする
 みな佐 はな
 しんの咄しはうみ山あれどめんとむかへばぐちになる」(七オ)
 中近江 こん
 お顔みたになぜ声ばかり雲間がくれのほと々ぎす
 よし本 ます
 せめて返事をわすれて見たいおもひ出すよな事ばかり」(七ウ)
 桜や こま

夢で戸を明うつで入れてかへすまもなくあけがらす
 さぬきや なべ
 さみの糸さへみすぢにわかるなぜに分らぬわしがむね」(八オ)
 大忠 はん
 ぬしが水ならわしや浮草よ主にまかせた流れの身
 大嶋や しめ
 おもひ思ふてたまたまあへば無理な口舌でなきあかす」(八ウ)
 大黒や てい
 枕ひきよせ目にもつなみだこれにやだんだんわけがある
 錦屋 たま
 すなによやおとさだめて置て今のうき世はさげばかり」(九オ)
 しん尾張 ぬい
 噂きく夜はへだつるこひにむねの蚊やりも燃あがる
 松よし ふき
 すへて此頃いはんす事か?は氣ばかりの切れ?いふ」(九ウ)
 大の屋 いわ
 見ればなつかし逢ねば恋しこれがうき世になけりやよい
 東屋 ふさ
 やるせないとて短氣はそんき蒔かぬとこへもひよく松」(十オ)
 竹治 ふみ
 あやまりましたよ其訳きいてわたしたもうたがひ晴します
 つる彦 とら
 いけんされても只うつ向て聞て嬉しい主の事」(十ウ)
 開化新文句よし原都々一 二遍」(表紙)
 開化新文句よしはら都々逸」(見返し)
 はなしやせんぞへかへしはしない主にお金のあるうちは
 地しん雷こわくはないが夕べの一言氣にかゝる」(一オ)
 僕は好んで浮氣はせぬが世けん婦人が捨おかむ
 ぬしを一人りと定めちや置ど印紙はつたら貸もする」(一ウ)
 私や小買のたばこと成て主に帯をばとかせたい
 洋服見たよなおまへの心いつも袖ない事ばかり」(二オ)
 主の浮氣はしつては居れどほれたわたしの身の因果
 文にかゝれぬ苦勞の胸をどふぞ写真で送りたい」(二ウ)
 アレマアまたんせ今一ト言といへど烟に陸蒸氣(おかしよつき)
 二世も三世も添ふとは言ぬ私や此よで添へばよい」(三オ)

神は出雲の御留守としれど逢たい一つに無利願ひ
 ぬしも徳利かんがへさんせ猪口と出来たる中じやない(三ウ)
 神奈川あふみ 小ふん
 鏡台引よせ髪かき撫ておもひ直して薄化粧
 大黒や たつ
 先のこゝろの曇りもとけて晴りや涼しき夏の月(四オ)
 はりまや
 明暮こがれて身は空蟬となれとそふきはなりやせぬ
 むさしや とみ
 人がよしあしいはふとまゝよやねで降る雪やむねでとく(四ウ)
 大吉 かん
 ぬしとわたしを他人のやうにへだてさんすかさまづけに
 あい升 のり
 いけんいはれてたゞうつむいておもひ切られぬ主のこと(五オ)
 桐佐 まつ
 来るか来るかとわしや松の内ぬしがきたかはしめかざり
 しな栄 さと
 人に気がねもおまへのことゝ思もやさほどに苦にやならぬ(五ウ)
 おわか らく
 雨の降るほど夜はしんしんとひざにもたれて忍び声
 みな清 みさ
 わしとお前はつゞみのしらべしめつゆるめつ音をならす(六オ)
 永楽屋 ゆき
 床の紅梅あれ見やさんせきみにおもひの香をおくる
 中尾屋 そで
 泣て別れてうつゝで逢ふてほんに夢かとまたわらひ(六ウ)
 たわら屋 すゞ
 主のこゝろとあのわたし舟けふはむかふの岸につく
 いね屋 やな
 切れたからとて何こはからういやでできたじや有まいし(七オ)
 若水 せん
 よりをもどして柳のいとに結ぶえにしの春の風
 桐半 さめ
 まつがつらいかまたるゝ此身内の首尾して出るつらさ(七ウ)
 玉や こい
 酒のさかなに三升をはさみみす逢ますこがれます

梅むら
 羽子をつくつく案じてみれば風にそれたまきにかゝる(八オ)
 新大口 どん
 まつに来たかとあの郭公出て見りやさやかな月計
 小竹 とき
 人めしのでかくたまづさのとふとまゐらせらるゝ様(八ウ)
 ますみや あさ
 鬢のほつれは枕のとがよくなりなき身を疑はれ
 大栄 かつ
 いさむ中にもふさいであれど人に悟られにがわらひ(九オ)
 武さしや みよ
 首尾をまつちと誓を立て縁をつなぎし涼み舟
 青柳 小せ喜
 つらい中にもおかほとみれば？すら？いもめがさめる(九ウ)
 大平 あい吉
 耳に手を当てまた袖をあてきかせともない明のかね
 梅川 菊助
 いろのいの字のいとしい中もりんきする時つのも出る(十オ)
 金子 るい
 是も辻占あぶちの蔭にもしや来るかと雨やどり
 あわ万字 つな
 根じめ直せばおもはせぶりなたつた一声ほとゝぎす
 御届明治十三年二月六日神田力子丁六番地
 編輯兼出版人 長谷川忠兵衛(十ウ)
 開化新文句吉原都々一 三扁(表紙)
 開化新文句よし原都々逸(見返し)
 印紙はつたる私がからだ二重抵当になりはせぬ
 銅線(はりがね)便の発明さんす主こそ世界の縁結び(一オ)
 どふせあわぬとおもふた主に不意に來られて胸さわぎ
 ならば出雲へ電信かけていよいよ主かと尋ねたい(一ウ)
 芸者渡世と人力車夫は乗てひくので紙幣(かね)になる
 主の来る日を待辻占にホウホケ今日と鳥がなく(二オ)
 ぬしの浮気に蒸気はすれどけぶりもかほへは見せはせぬ
 ひさしく呑んだる鯨のあぶら猫は肥満(ふとり)がはらに見へ(二一)

(ウ)
 一日どころか只半時もあわねばならない此時計
 おちかい内にとかへしはしたか何か気になる店の首尾「(三才)
 つらひ苦界に沈むといへど主のためなら何のその
 神も力も借ねばならぬ引手あまたのおまへゆへ「(三ウ)
 大和 きみ
 あゆは瀬につく鳥や木にのぼる人はなさけのしたにすむ
 桐太 ろく
 聞けばきくほど根も葉もないがきかぬ先きからはらが立「(四才)
 松いせや こう
 姿ばかりは残して行つておもはせぶりなあの蝉の
 大黒屋 やま
 みぶり声色する人さんはどこかこゝろがたの美しい「(四ウ)
 山口巴 すわ
 内の首尾さへよし原なればぬしの来るめを松井町
 かめ屋 きぬ
 物もいふまいもうふさぐまい思ひ出すまいふさぐまい「(五才)
 長崎屋 みき
 猫も恋ちはさてむくらしやわがせしたふておぼる夜に
 林屋 りゑ
 恋のちわぶみ鼠にひかれわしがこゝろは柵にある「(五ウ)
 家形屋 ぢう
 花も持たねで来る夜とおもやあめやあらしのないやうに
 岩井 りか
 しやくつたやつらの顔見かへしにお前の意気地を立なんせ「(六才)
 丸いせや いま吉
 すいたおかたも人めがあれば背中あはせに涼み台
 伊勢久 きち
 ほれたからとて口には出さずむねにこがれて神だのみ「(六ウ)
 つた吉 この
 垣ね越しにもあのひとねをほれりや手??に折もする
 越前や なを
 たつみ風ほこり立ほど思ふてゐれどとはで水打人がある「(七才)
 吉村万字 はた
 あらい風をも柳につけて仇なぬしめのすゞみぶね
 藤大和 小藤

わたしやひとへに思ふてゐれど主は八重菊しらぬかほ「(七ウ)
 京大和 りん
 夢に見るのは愚かなことよむねに?ねば眠られぬ
 川長 ちゑ
 愚痴もいふまいうらみもせまいさきはひとりの身ではなし「(八才)
 かみや とな
 ひたとよりそひ暑さもわすれはなれともなき竹ばしら
 木むらや さく
 わたしやおまへの下着の小そでつま?やあれ?かくし妻「(八ウ)
 美よしや 小せん
 をれる柳を折らすにおいて届かぬ桜に身をやつす
 つた屋 ?は
 年はゆかねどはかくながらうは気な手くだにやのりはせぬ「(九才)
 つる賀や たい
 夜はの咄しの残りし月に告るほめまも耳ざはり
 三木やかれや ちやら
 晴れて逢はれぬ身を恨まいしのびあふのを恋といふ「(九ウ)
 伊勢や やき
 詫て折らるゝ花ならほんに七重のひざをも八重にをる
 まつの家 まる
 まくら紙とて茶にするものか枕するたびおもひ出す「(十才)
 深川や
 祇園会のみこし計が祭りやないよぬしと二人のかけまつり
 海老長 小りう
 思案のほどはそりやうそのかは初手から覚悟で惚た人
 御届明治十三年二月十八日神田力子丁六番地
 編輯兼出版人 長谷川忠兵衛「(十ウ)
 開化新文句吉原都々一 四扁「(表紙)
 開化新文句よし原都々逸「(見返し)
 晩はきつと約束したがぬしの目つきがうそらしい
 物見遊山に望みはないが毎日お顔が見て居たい「(二才)
 義理もせけんも人目も欲もすて逢たいことばかり
 しあん半途(なかば)に思案が替りまたもしあんて夜をあかす「(二
 ウ)

わたしのやきもちお前に喰せ癩の根切がして見たい
 どふもいゝこと体がとけるぬくなお待よ仕舞気風呂「(一オ)
 かくしをふせた二人が中を何処で知つたか新聞屋
 小野の小町と当時の銅貨(ぜに)は穴があつたら猶よかる「(一ウ)
 むさしや つや
 しだれ桜?手はとゞけ共ぬふしは花からは非がない
 意気なおまへに至らぬわたし文かく筆さへ跡や先
 いく夜こがれてまつ?さへも心せかるゝみなみかぜ「(三オ)
 岩井 小とめ
 いろのゆかりにつひ惚込てちぎりましたよ初茄子
 恋のくぜつは氷室の氷むねをひやりとして?る
 小萩
 早くやめたやかへすも呼ぶもまつも別れもないやうに「(三ウ)
 松屋 小いと
 ぴんとこゝろに錠まいおろしあいかぎや互ひの胸にある
 小菊
 人はどのよにいはいふとまゝよきれてくれるな鳶い中
 かめ
 遠ざかるのもたよりをせぬもすこし思案のあるやうは「(四オ)
 三沢大和 小しげ
 口でくさしてこゝろでほめてむね?おかんであるわいな
 とり
 たとへしうとがやかましかるとぬしを育た親じやもの
 小ゆき
 ほれちや居れども言出しにくいどうぞ先からいへばよい「(四ウ)
 三田万宇 いと
 色の世界にいるなきものはいしの地蔵さんとわし計り
 ふた
 かあいをとこと?吹く風は明て入れたや のうち
 小ろく
 こぼれ松葉はあやかりものよ枯て落ても夫婦づれ「(五オ)
 万屋 まめ
 蛭?ではわしやなけれ共まつにつられて身をこがす
 小さん
 涼かぜに通ひつめたる深草団扇へりに色よき小町紅

小てう
 羽織かくしてまた呼かへしのろけた顔する嬉しさよ「(五ウ)
 細見つた屋 すま
 朝顔につるべ取られてつひもらひ水汲でおくれよわしがむね
 誰も知るまいわたしのこゝろすゞりかけこの草ばかり
 まん
 かさねたを笑はしやんすな筑摩の祭池のはちすもこ?にさく「(六
 才)
 平松 ふとみ
 さぐる手先も袖から細くいつか直りし汗襦ばん
 小ちよ
 きのみきた風けふ南かぜあすはうき名の巽かぜ
 小はる
 胸にありたけかしくと留めてまたも未練で返???「(六ウ)
 大和や 小ゆか
 主をおもへば用なき人にあつさ寒さの世にもいふ
 小みな
 梅とさくらを両手に持てばどれが梅やら桜やら
 ひやく
 いやなおかたの信切よりもすいたおかたの無理がよい「(七オ)
 升屋 かよ
 甘い口にはつひのせられてぬしの冷かす道明寺
 小まめ
 ぬしをかへした其跡みればどちらむいても夜着の袖
 小わか
 草にとかれて鳴く虫よりもぬしにこがるゝわしのむね「(七ウ)
 鈴柏や とく
 愚痴をかかんがへ月日をかぞへまゝになるのはいつのこと
 桔梗や はま
 なにをいふにもとしわかなれば咄すはなしもあとやさき「(八オ)
 山本 彘つ
 余り若いとて冷酒のめばむねの焚火で爛が出来
 桜の木 りう
 紺のまへだれ松葉をちらしまつ葉あれども木はちらぬ「(八ウ)
 茗荷屋 染吉

落葉かくのもふたりがたのみわたしやかけひの水つかひ

山崎屋 ちせ

とてもかくてもまはらぬ筆よどふぞはんじて下さんせ(九才)

寫屋 きさ

しんの夜中にふとめをさまし肌へ手をやる蚤の跡

伊勢佐 きた

わさびおろしと恋ちのいけん聞けばきく程身にしみる

御届明治十三年二月十八日神田力子丁六番地

編輯兼出版人 長谷川忠兵衛

価三銭(十ウ)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

十六『葉柳どいつ』

明治十三年四月廿三日御届。請求番号：特4173。

本書は、万延元年刊『端唄の交張 初編』(十柳子作・一光斎芳盛

画。東北大学図書館狩野文庫蔵)の改題後刷本である。

葉柳どいつ(表紙)

<一才欠>

種彦の草庵に門人十柳子集会の図

柳亭 種春 呂洲 真似彦 露照 露香(一ウ)

仙魚 安彦 春彦 升彦 竹彦

植こみのやなぎ光るや朝の雨 仮名垣魯文(二一才)

もしもきたかとあんどうけして「女」はるさんかへ 男「なんかま

つくだぜ 女「しれたことさおまへがくるからあかりをけしたは

ね 男「そりやアまたどういふわけだ」ぬしのおかげじやくらうす

る(二ウ)

ここでそへずはかしこへのいて(清元おかる)やほないなかのく

らしにははたもおりそろちんしごとくちのさきなるうそばかり(

三才)

けうはおだやかいざまゐらんと(大尽舞二上り)しかいなみもお

だやかにおさまるみよこそめでたけれサアほゞだいじんまひをみさ

いなそのつぎのだいじんは(三三ウ)そもそもくるのははじまりて

ゆげのだうぎやうちよくをうけ「うかれくるわとなづけたり

だいじんごかしにおだてゝやればだんなきどりで手めへづけ(四

才)

なにかささやぎやくそくかたく(清元安ひで)おきよどころのく

らまぎればんにやいのとみゝにくちむべやまかせはいやじやぞへ(

四ウ)

さてはたよりとてがみをひらき「なんだふみにはかはつたこともな

いがなかにまつばがはいつてゐるははてなはんじものかたよりをま

つとかきみをまつとかくるをまつといふことか」まつはうひものつ

らひもの(五ウ)

あたりみまはしそばへとよつて「これさおまつさんこんなわたし

がいのにそんなにかんがへてゐることはねへはサことしはふじへ

もつれていきやすあれさだまつてゐてはわからねへよ」とけぬおも

ひはみねのゆき(五ウ)

いしやのなかだちこんれいすんで「モシあなたあのなかうどをよび

におやんなさるからにはなにかわたくしにおあきなさつたのであり

ませう 男「なにさうではないが」せきがでるゆへきにかかる(六

才)

きせうかけとてむひつにむかひ(青柳すずり)これでこれどとな

げつくるうばがことばにげにそれよかみまつ(六ウ)くろにかき

よごし」ほかにこゝろのないせうこ(七才)

こひのみちではちからでゆかぬ(こはいる伴左衛門)そこをすな

ほにとうさぬがしらつかぐみのだてしゆのいちづく」そのいなづま

じやこげはせぬ(七ウ)

つもりつもればはなしもつきて「なぜおめへはたなのだるまばか

りみてゐるのだ 「わたしはうらやましい 「なぜ 「おまへとふ

たりでうちをもつてね 「それから」ねたりおきたりしてゐたい」

(八才)

ながいつきひをまめにてくらし「このけつかうなまちまちをこんな

しやうばいをしてあるくゆゑさだめしばかなやつだと思ふだらうが

そのかはりきらくなものよ」うまいよのなかいっぱいに(八ウ)

ひよんなことからふと座をたてば(先代はぎ)あとみまはしてま

さをかゝまसानきことのきにかゝり」なみだぐむのもこひのよく(

九才)

ほそだにがはこのみはほたる(こはいるごん八)みはこがせど

もこゝろにまかせずそりやこれぎりにはならぬとか」よしあしのは

のくされゑん(九ウ)

どうかくふうとさうだんすれば「こはいろふか七」そのわけかたらんよつきけ」つれてにげるがはやがてん」(十オ)
えびす三郎つりをばたれて「たいをつらんと思ひしにふぐがかつたこれはどうじゃ」みづがにごつてゐたせい
浄書作丸
岳亭春信校合
種彦門人十柳子作
一光斎芳盛画」(十ウ)
(広告)

明治十三年四月廿三日御届 価三銭
編輯兼出版人 本所区緑町四丁目五十一番地
荒川吉五郎版」(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

十七『まぜばりど』

明治十三年四月廿三日御届。請求番号：特ニ一七。

本書は、万延元年序『端唄よせ屏風のませ張』(蘭亭露遊作・一光斎芳盛画。大阪府立中之島図書館蔵)の改題後刷本である。原書の見返しと序文前半を欠く。今、原書によつて序文前半を補う。

まぜばりど」(表紙)

春雨つゞく夕暮に。机を友と小窓に向ひ。つれづれをなぐさめ居し。折からに。耳にひゞく一声は。あだな浮世の流行うた。てもおもし。ろの一節と。夫より氣の付屏風のませ張。なれど元より無才の僕。見ても聞ても」(一オ)

夕月にふた筋三すじ柳かな 一座閑人
おやこのほんはみんなはうたのなかへ上るりがくさりはいつてい
るようまくできてはいるねへ一つあはしてみませうネへなんだとへタ
ぐれのなかへうめのはるがはいつていますよ」(一ウ)
このど」のほんははるのぶといふひとがさくだとさ一つひいてご
らんなさいましなきなもんくがありませよ

井の元に萩とはぎとを?させて紫うばふ曙の空」(二オ)
和歌の浦。長き夜ならぬ短夜に。ひじを枕と寝ながらも。おもし
さふな事もなく。けふよふよふと二世川。わしが思ひはあだ桜。い

つしかまはる廻る日に。氣を楓葉の秋口に。是ではならぬとこゝろ
をばげまし。硯引寄水さらしてする隅田川書神かけて。撰んで恥を
拙若と。承知で出せし一小冊。我も顔のおさきまつくら。ヨツト
違ふた月夜鳥の。かわふかわふと御子様方の御好を。またるゝ身よ
り待身こそ。昨日にまさる京の人
万延といふ初の上秋 蘭亭露遊誌」(二ウ)
ひぢをまくらにてもおゝあくびハックシヨヲ」(清元とば系)とこ
まんざいみやれおかげでかせひいた」かせのせいではないかいな」
(三オ)

(本てうし)かはたけにうきなをながすとりさへもつがひはなれぬ
おしどりもなかにたつゝきすごすこと」(常わづタギリ)ふゆあみ
がさのあかばりでかみこのひうちひざ?らかさふきしのぐしのび
ぐさしのぶとすれど」(三ウ)いにしへのはなはあらしのおとがひ
にけふのさむさをくひしぼる」わかれのつらさにそでしぼるほんに
しんきにことじやヌ」(四オ)

わがものとおもへばかるきかさのゆきこひのおもにをかたにかけ
(清元なつとぶうり)よすぎみすぎをあわせてみればなつおき
してナトなつと」(四ウ)たゝきなつととよそはまだゆめのう
ちからうりばさきコリヤモシとんだおはやひねさてはどぞへお
わせに」いもがりゆけばふゆのよのかはかせさむくちどりなくまつ
みにつらきおきごたつじつにしんきじやなかいかな」(五オ)

(本てうし)きんときがきんときがくまをふまへとたまさかりをも
つてふじやすそのゝまつばやしよしつねべんけいとわたなべのつな
(常はつたのぶ)へいけのかたにもなだかきつよゆみのとのか
みのりつねとなのりもあへず」(五ウ)よつびきひやうとはなつや
さきにあやまたず」からのたいしやうあやまちせじんぐんうくわ
ぐうたけうちのしんいくさにんぎやうよしあしちまきしようぶがた
なやあやめぐさ」(六オ)

めぐるひのはるにちかいとおひきのうめのわかやぎてそるしおら
しやしおらしや」(長つたとつじばい)としごとにかはらぬいまよ
りのきにわらひしうめが糸のないてうれしきうぐひすのわかばに
うつるこてふまでさゝなきかけけるうぐひすのきてはあさねをおこし
けるさりとほきみじかないまおびしめてゆくわいなほふけけうと
ひひとさんじや」かほりゆかしとまちかねて」(七オ)

はぎきゝやうなかにたまづさしのばせてつきものずへのくさのつゆ
きみをまつむし」(富本虫つり)くつわむしうまおひむしのやるせ

なやわれはおよばぬみのむしなれどちよとなかで(七ウ)こひに
みをやつしはてたるきりぎりすよごとすだくふけゆくかぜにか
りのこへこひはかふしたものかいな(八オ)

ゆうぐれにながめみわたすみだがはつきにふぜいをまつちやまほ
あげたふねがみゆるぞへ(清元梅の)はるげしきういてかまわの
ひいふうみいよういつかあづ(八ウ)まへつくばねのかのもこの
もをみやこどりアレとりがなくとりのなもみやこにめいしよがあ
るわいなア(九オ)

うばたまのやみとおまへのぼりつめ二かいせかれてしのびあふ
(清元あけがらす)とけぬおもひをうらざとがどうしたえんをか
のひとにあふ(九ウ)たしよてからかはいさがみにしみじみとほ
れぬいてよるはむねさへくるぬりのまくらことばじやないかいな
(十オ)

蘭亭露遊作

一光斎芳盛画(十ウ)

(広告)

明治十三年四月廿三日御届 価三銭

編集兼出版人 本所区緑町四丁目五十一番地

荒川吉五郎版(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

十八『粹の友』

明治十三年五月七日御届。 保田信親編。 活版印刷。 請求番号：特
66-596。

粹の友

保田信親編輯

美よしや発兌

たつの夏(表紙)

唱歌はよく心の鬱気を散じて養生の基となるものなれば唄ふてたの
しむべく且徳あるものなりまして心いきを通じ男女の思ひを和らぐ
は此ものにしくはなし予此ごろ筆のいとまに思ひ出して古き端歌

を(一)手本となし又都々一は新古を組ませて一小冊とすれど元
より粹とか意気とかは蚤の金玉ほども知らず依て風の痒いところへ
手の届かぬは当然なるべし去れど夫は大通人のあつて宜しくお直し
をねがふになん 編者述(二)

しう身とやらの学問は小妾の如き不肖ものは及ばぬことと諦め只手
短の都々一などにて事を済ませ譬へば夫に貞節は「きぬた打つとも
わたしがかせぎ人にやうたせぬ」の点」と守れば大きに徳のもと
保田の君の此草紙も見やうによりては一ト学問とおこがましくも斯
なん申す 織田ふく女史(三)

月の出しをに棹さすふねはういたはなしを乗せてゆく
これがわかればか蒸気のはなは今朝の鶏よりうらめしい(四)
あきが来たかと気をもみぢぶなこけに小はらがたつたやま
缶づめの鮭ジャなけれど私がこひはあけて言はねば気もぬける
(五)

ぬしがふねなら漕ぐ臈がわたし

中のよいか好いたのか

沖のはるかに浪の荒れ

心ないぞへ此あらし(六)

梅がぬしならやなぎがわたし

なかのよいかすねるのか

ある夜ひそかに山の月

こゝろないぞへ小夜あらし(七)

わさびおろしの眼にもつなみだからい憂きめもぬしのため

牛なべのうすいお前の心がしれてもをもを深くははまりやせぬ
(八)

雑ジャなけれど函入りむすめしやうの悪さにむしがつく

割ツちやならないむすめのすがたかわいゝ写真のがらすどり(九)

じよるのまことは

帆立貝てまどれぬきで

手間どれて酒はみとなり

楽しまれわしがおもひは

君ゆゑならば身ひとつなるも

今のうちそこのことをおん察し(十)

うそとまことの二夕瀬川

だまされぬ気でだまされて

末は野となれ山となれ

わしがおもひはきみゆゑならば
三ツまた川のふねのうち
心のうちをおんさつし(十一)
いまの苦勞がそふての後のねものがたりとなればよい
寝ものがたりのうれしいゆめがさめて苦勞のたねとなる(十二)
人にはなせば噂がこわしふたりジヤ文珠の智恵もでぬ
不義理する身は五百の羅かんなんにつけても我がそんじや(十三)
夕ぎりに其身ほださる
伊左衛門つもるくぜつは
真事中華ぶれた文が
みゆるぞへアレ足に
蹴るあふぎ屋の二階に
貞女があるワイナ(十四)
ゆふぐれにながめ
見あかぬすみだ川つきに
ふぜいはまつち山
帆かけたふねがみゆるぞへ
アレ鳥がなくとりの名も
みやこに名所があるワイナ(十五)
火のしかた手にはおりの皺へ(よるの梅みてもどりしと女房へ(十六)
いひわけくらき袖のうつりが(それといはずにあてこすり(十七)
七)
お(さい)お(さい)よろこびありや(一寸三番叟のひとくちばなしを
申ませう此せつは日本のしなじなを外国へつみ出すことを心がけて
国の金銀は成るたけ出してやらない工夫が肝腎だと承まはりまし
た(十八)左様左様それが第一でござりませうお祭でさへ花車の
相談はまとまりませぬ(外へはやらじといたきしめ(十九)
としもゆかいでおひづるかけて(「じゆんれいに御ほうしや(ても
かわゆらしい娘の巡礼くにはいづこで(ハイ)くには山椒(シテと
さんの名は(二十)辛四郎と申します(シテか(さんの名は(わ
さびと申します(きけば聞くほどめになみだ(廿一)
のろいといふなら言はておきな(おらが女房をほめるジヤないがま
もたいたり水しごと(廿二)朝よるたびのたのしみは(じつは
私にやすぎたもの(廿三)
品々のたかねに薪や
米さとう塩とあぶらと

はかりにかけて買つて
負るか値極つて取るかア、
乞食おもへば出ずいらす(廿四)
きぬぎぬの別れに
そらも雨さそふ
蝉とほたると
はかりにかけて泣て別りよか
こがれて除きよかア、むかし
おもへば見ずしらす(廿五)
あらたまの春と
おもへばお重づめ
見世へかざりし伊勢の海老
よるは奥さへうたがるた
散らし取るうじや
ないかいな(廿六)
ぬば玉のやみと
おまへのぼりつめ
二階せかれてしのびあふ
夜るはゆめさへ
黒ぬりの
まくらことばじやないかいな(廿七)
たまさかふさぐはお金のせいじつはおまへの事じやない
おもひだすよじや実意がうすいじつにほれ(ば)ふさぎづめ(廿八)
ふられる覚悟であがつたばんは細帯(しごき)をおみやにして帰る
トサ柿色ぎものに遠くはない
ふられながらもまだ己ぼれてたまにやひとり寝るもい(ト)ササ
あきれがおれいでこんなない(廿九)
女郎のまことも開化の御代にありやこそ卅日に月がでる
銅のまるさに小札のしかくあればみそかに質がでる(三十)
けんくわ仕かけもこひぢのかたきいふならいはずと置がよい
いふて喧嘩のたねまくよりいはずとそま(お)くがよい(卅一)
香水のかをりならねど二人のからだはやくも世間へ匂ふな
あずびがへりの其うつり香を胸にた(んだ)此こそで(卅二)
ぬしに笑顔がみせたいばかりしやくを忘れたこの一座
えがほつくりて一座へ世事もはやく(き)たい主のこゑ(卅三)
こひ路のやみなら新聞(二ウス)で照らす瓦斯にあかるき今のみよ

あるくみちさへ蒲ほこなりに甘い味あるまつりごと」(卅四)
 つみとらみ無いわけならばこひぢと夢路とおなじもの
 こんなうれしいことばがなぜにつみや恨みになるじややら」(卅五)
 たすきがけして櫛ひきよせてどうでも今日はいかんすかといひつゝ
 立つて飯じたくどうせ鉄めに言わけをそろ見るやいといはせたい
 「イヨ一トふし千両のぼります」(三六)
 はおりかくしてそで引とめてどうでも今日はゆかんすかといひつゝ
 たつてれんじまど障子ほそめにひきあけてそれ見やしやんせ此雪に
 「などと隣のちくしやうめ」(三七)
 綱は上意
 「妻は上品こうかいで気帳面にぞ見えにける折しも飴菓子売りある
 下賤よりかむろの仕立にチヨイとみせ住こみせんともろ手をつく顔
 もきれいな艶ものにて彼のくせものが其おてかけ」(さんさがり)
 よしやれはなし」(卅八) やれ小指にされるしれるぐらゐは厭ひは
 せぬがタツタ今とつた給の直が減じるは減じるは八時すぎにはいか
 ねばならぬそこで置かんかと此方気にかゝる誰じや誰じや妻じやな
 いもの権じやもの 御免も辞職もなつちも入らねえサツサねていけ
 だいとけ」(卅九)
 かみは島田がいきといふ
 おばこは艶がでるといふ
 丸鬘といふ水で結ぶ
 玉子がつぶれて洗らはれた」(四十)
 つゆは尾ばなとねたといふ
 をばなはつゆとねぬといふ
 アレ寝たといふねぬといふ
 をばながほにでゝあらはれた」(四一)
 都々一さかなづくし
 はねつけられてもわたしは鯉はのぼりつめずにや居られない」(四二)
 二)
 細いこゝろの思ひはさよりいつはむすばることぢややら
 いわしにた鍋のそこまでおもひをかけていろに油がのつてくる」(四三)
 三)
 ながれわたりのうなぎでさへも人にけどらる穴がある
 はらの底まで見せてもなぜかからくされたる鮭の塩」(四四)
 つみに鳴戸のあのさくら鯛顔さへろくろく三つ道具
 三十六までやもめのわたしこひのこけぢやと人がいふ」(四五)

勝手道具づくし
 わたしがこひ路はかまどの銅壺水をさゝれて苦勞する」(四六)
 二人こうしてゐる菜ばしは糸でつながらえんがあり
 ほう丁のさびた住居もわしやいとねど切れるときくたびきにかゝ
 る」(四七)
 おまへのこゝろはあの金じやくしひとにしやくわれあつくなる
 ふかい心をくんでもくれぬわたしや荷なひのかたおもひ」(四八)
 煮てかたまつたもおもふもむかし今じやふたりが小なべだて
 水がめのふかい中でもつひしたことでわれるくぜつのだねとなる」
 (四九)
 青もの果物づくし
 青梅のすいたどうしの嬉しいばんは実になるはなしで夜があける
 さつま問屋に身うけをされておいもとしんじゆがしてみたい」(五
 十)
 味をしめじの此はつものにつゆのなさけがわすられぬ
 はこいりとみせておいても紀のくに蜜柑とつからおしりのくされ
 縁」(五一)
 練馬だいことわるくはいへどすてる気もないゆきのはだ
 かひわりがすむと色けも一ト入まして紫蘇のめだしもつまとなる」
 (五二)
 ほそいすがたをぬかにて磨きあぢな気になるあらひがみ
 胡瓜きられたわたしでさへもおまへにとりつく蔓がある」(五三)
 着ものづくし
 はなしの言葉につづつま合せまた着ておくれとこひごころも」(五四)
 ぬしのためならつゞれをきてもいとかなさけは切やせぬ
 たもとゆたかに春ふくかぜはそでのうらわをかすませる」(五五)
 馬のりにして見りや何だか物めづらしく茶うの裏地のしたてばえ
 をんなやもめの花いろぎぬはあらひかへしも色にでる」(五六)
 いやとかぶりを振そでむすめむかしかたぎの黄はぢじやう
 はりほどのことをトヤ「ヤうき名をたてるぬつてやりたい人のく
 ち」(五七)
 しるびがへしのサテあぶなさよ
 今夜あふのがいのちがけ
 庭になげきのうらみの
 其ゆめさます明けがらす」(五八)
 しのぶこひ路のさてはかなさよ

今度あふのがいのちがけ
 涙によごす
 おしろいのそのかほ
 かくすむりなさけ(五九)
 あさぢふの小野のしのはらしのふ
 身はほんに逢ふやらあはぬやら
 あまりてなどかこひしさに
 なんとこのみはしようぞいな(六十)
 あさがほのつゆのいのちのはかなさはほんに居るやら
 居らぬやら一ト目
 みるにも眼はみえず
 なんと此身はしようぞいの(六一)
 ゆきはともえにふりしきる豆腐を
 酒のさかなにて猪口と
 ちろりのおきごたつおみきは
 替へておごるぞへまだ
 口よごしじやないかいな(六二)
 ゆきはともえにふりしきる
 屏風をこひのなかだちで
 蝶とちどりの
 みつぶとん元木へかへる
 ねぐらどりまだ
 口あをいじやないかいな(六三)
 したい山なら金ばこならべ売り家かりても身をかざる「けんのおんじ
 や金策じや」(六四)
 高いやまからたにそこみればうりやなすびのはなぎかり「豊年じや
 万作ぢや」(六五)
 ぬしの有るみにおもひをかけて「顔色如桃李相逢十四年」(六六)
 君莫王上点我作出頭天「迷ふころの其つらさ」(六七)
 風がたゞきやそれかとあけて「九州第一梅今宵為君開」(六八) 欲
 知花真味三更踏月来「月にはづかし我すがた」(六九)
 ありあけのつきの頃までまつかひありて「月落鴉啼霜滿天江風漁家
 対秋眠」(七十) 古蘇城外寒山寺夜半鐘声到客船「霜に二の字の下
 駄のあと」(七一)
 (中略)
 夫婦和合

あはせものとはなれぬやうにするがたがいのころいき(九六)
 孝子
 ひとすじにふやせたいとてかぞへるゆびはおやのねがほのしわのか
 ず(九七)
 忠臣
 みづくかばねもいとほわたしうくもしづむもきみしだい(九八)
 なつのだい
 あついなさけにつひほだされてとけるきになるさとうみづ(九九)
 明治十三年五月七日 御届 定価八銭
 編輯人 内幸町二丁目二番地
 東京府土族 保田信親
 出版人 日本橋区新よし町十二番地
 佐々木林兵衛
 大取次 横浜太田町二丁目
 いせや梅蔵
 売捌 各絵双紙屋(奥付)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
 裁定のもと、公開されている。

十九 『新作別品都々一 巻・二・三』
 明治十三年五月十二日御届。高橋亀吉編。請求番号：特4-161。
 新作別品都々一 巻(表紙)
 のんぢやわるいととめたる口で一ツつげとはよくいふた
 こはひものだよおぼておきな地しんかけとりかゝおやぢ(一オ)
 去た女房が行燈のはりに穴のこひしい一人りもの
 猫にやきははれきつねにやふられこれからそろる円い鬼(一ウ)
 ぬしの心を分せきすれば浮気七分によく三分
 背中合て寝る夜は何かはらのあわなないことがある(二オ)
 コレヲ病より烈しいぬしの浮気予防がしてほしい
 あいたい見たいは私きのくせさぬしのかほより札のかほ(二ウ)
 大きな声だねしづかにおしなぬしにや知れぬか靴の音
 東はしらめど女郎はこないそでアホヲとなくからす(三オ)
 うぬぼれかゞみで顔みる度にほれぬ女の気しれぬ

鯨だましてごん妻になれどまたも地しんで元の猫「(三ウ)
 長いおひげにみじかいお知恵高い帽子にひくい鼻
 猫や狐がうきよになけりやこんやくらうをするものか「(四オ)
 尻の早いあゝしたものが末は烟りの蒸気船
 火事と雷りや器械ですむが防く手術のない地しん「(四ウ)
 仰せは一つ尤もなれどむしが不服でほれられぬ
 思あんなかばにふと出たお屁さきに実のないしるしたる「(五オ)
 歩と飛車縁から角なれ染てきのふ香車にますくろふ
 まるいおかねと四角な札があれば三十一日にしちが出る「(五ウ)
 猫にやだまされ狐にやふられかこち顔なる馬鹿なつ
 月夜からすともいふ花はそらなきよるのでまよわせる「(六オ)
 因循すぎると笑はばわらへわたりや頑固でかた思ひ
 うは気なこゝろはすこしもないが恋しいおかたがあるばかり「(六ウ)
 あつぱれりつばな鯨をおさへでかした猫だといわれたい
 なびくやうでも根強い枝にすこし張もつ猫やなぎ「(七オ)
 くだき上手につひ落されてうかうかかし込しちの種
 きつとざいますだましちやいやだなぞとだましてかげで舌「(七ウ)
 明治十三年五月十二日御届
 価三錢五厘
 東京日本橋区本材木町一丁目九番地
 編輯兼出版人 高橋亀吉「(裏見返し)」

こいし男に郵便だして二錢の約束(ちぎり)をするつもり「(十一ウ)
 乙鳥が来る時たよりをするとかかへる雁がねすてこと葉
 かほ見たばかりではなしはできず世間の人目ががらす窓「(十二オ)
 御前のお側は行義ですませかけや気まゝの茶わんざけ
 あすは地しんでめんの字くふとさけばおそろし雉子こえ「(十二ウ)
 見捨しやんすなゆく末までもなど写しんへひとり言
 西洋作はおや馬鹿らしいかぞへる天井の板がない「(十三オ)
 ゆびを切ふとした剃刀でけふは嬉しうそるまゆ毛
 いやな鯨に苦らうをするはゑびすの笑顔にほれた故「(十三ウ)
 ちいさい時から学校がよひ恋のいるはの習字本
 めしとふたりで勉強すれば恋の試験に甲の賞「(十四オ)
 おもふやうにはそれはれぬ二人り死んでも未来が気にかゝる
 開化しないと指さゝれても主が死ぬならもろとも「(十四ウ)
 小鍋だてにてのんだる酒がすえるおぜんの箸わたし
 につこり笑つてさしたる猪口をすましてよこすは水くさい「(十五オ)
 めしの口舌とあの上るりはほんになくやら笑ふやら
 心とこゝろがあいさへすれば性があふうがあふまいが「(十五ウ)
 ほんやりしていりや小馬鹿にされる力みやつぱり銭がいる
 そふての苦勞はかくごだけれどそはぬ先からこのくらう「(十六オ)
 ゑびすがほしさにころりを病ば腹が布袋になりました
 ざしき相場をくるはず猫は一寸二をあげ三を下げ「(十六ウ)
 明治十三年五月十二日御届
 価三錢五厘
 東京日本橋区本材木町一丁目九番地
 編輯兼出版人 高橋亀吉「(裏見返し)」

新作別品都々一 三「(表紙)」
 ねんが届いていけたる花は水でもひとにはさゝしやせぬ
 かべにみゝよりまだおそろしい寝ものがたりを新ぶんし「(十七オ)
 めしのかほ見りやおさまるしやくよほんにむしまでほれたのか
 私しや水素でたゞ昇りつめぬしは風せん上のそら「(十七ウ)
 めしこのころははるふる雪よつもるよふでもとけやすい
 花はちるとも匂はのこせたとへこのすへどふなると「(十八オ)

なれぬ世帯にたがひにやつれ今はしんくの突くらべ
水ももらさぬ二人りが中は人にしられてたつうき名(十八ウ)

たよりばかりでたがひにいれど縁はきれないでんしん械
つめる手先をしつかとにぎり忘れちやいやだと目にいわせ(十九
オ)

外にできたかもちあきたのかつねにかわつたむね時計
とめておきたしとめたらぬしのためにわるかるこの時計(十九ウ)

祈請書(かく)なら印紙をはりな間ちがや原告するばかり
君が不ふくでそはねば僕はねがひいでゝもそふ所存(二十オ)

口といふやつア調法なものようそもまことゝおもはせる
ぬし(ママ)ためとてかんなん苦勞とげて女房といわれない(二
十ウ)

持りやさんざいふられりややけよどうせこうなりやからさい布
雨のふる夜も通ひはずれどたゞの一度もぬれはせぬ(二十一オ)

実意のあるのがかへつてくろう人にもそんなどであるうかと
わしがりんきはうけうりなれどぬしのうきはおろしうり(二十
一ウ)

おやの裁判不服をいはずしてたてたいぬしに情
ほれた同士とくだん計はあつくなる程のぼりつめ(二十二オ)

夢が自由に見らるゝならば独り寝る夜も苦ではない
泥水あがりぢや世帯は持てぬ朝寝に浮気に茶わん酒(二十二ウ)

蚊帳の籠城まくらの取手君のしんげきよまつている
あんどつかき立寝顔を見ればほんに鼻毛の長い人(二十三オ)

きざな人だよねむつたふりはたばこのすいがらけむがたつ
きざでならないうぬぼれやらう十銭だしたりしまつたり(二十三
ウ)

もちかけられてものられるものは人の女房に口ぐるま
ぬしのかへりのおそさにわたしやかんにんぶくろのつぎ仕(二
十四オ)

のこる口舌は山ほどあるにのつと日の出るあけの鐘
扇子(あぶぎ)でまねくはそりや日のいりよわたしや日の出をとど
めたい(二十四ウ)

明治十三年五月十二日御届
価三錢五厘

東京日本橋区本材木町一丁目九番地
編輯兼出版人 高橋亀吉(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

二十 『開化さわりど』 上・下

明治十三年五月二十八日御届。小森宗次郎編。請求番号：特ナ17。

小森宗次郎編
開化さわりど 上(表紙)

梅にや驚わたしにやぬしよ(常盤津子だから)さほ姫の霞のどか
に明そめてけさしるしる富士の顔うつるかゞみの影そへて松と竹
との二柱にぎはふ春のおさな(こと)いつもはなれぬ中じやいな(一
オ)

君の愛顧に鑑札おさめ(常盤津ひるな遊び)みさほにたてるひな
棚のみづし黒棚貝合せこゝろのたけを文車につみおくるのも恋のよ
く(はれて嬉しい二等親)(一ウ)

柳ばしから小舟はむかし(常盤津小いな)日にまし深くなるたけ
は御内儀さんの心根もさぞと思へどやくそくの日にちもまたでむか
ひぶね(いまは馬車にて一トはしり)(二オ)

此土地ばかりに日はてりやせまい(常盤津日高川)浦吹帰す夜嵐
も身にしむ野への露ふかき草ふみわけてたゞ一人か呼どさけべど其
人の影もかたちもなく虫の(ひと)のうわさもきのふけふ(二ウ)

風船のよふなおもへにツイ乗せられて(常盤津忠臣ぐら八段め)
しやんと手拍子うつの山鳥の細道いもせ道びやうぶのうちのさゝめ
ごと男松のはたに藤枝のしめからみたるに枕夫婦(めうと)の中
の若みどり(今は浮気のそらだのみ)(三オ)

公と木とははなれぬ中よ(常盤津高砂)などおもかげのかはらめ
や高砂住の江二木の松の夫婦とげんじむつまじき神と君とのみちす
ぐに(いつも替らぬ夫婦まつ)(三ウ)

主が花ならわたしは蝶よ(常盤津将門)嵯峨やおむろの花ざかり
浮気な蝶もいろかせぐるはの者につれられて外めづらしき嵐山ソ
レ覚へてか君さまの(どぶぞ首尾よくとまりたい)(四オ)

恋といふ字の書取しても(常盤津新おはん)おはんはなみだのつ
ゆちりほどもおまへのむりぢやあるまいけれどわたしやいなそ
んなそのよなどふよくな年もいかいではづかしい(色の試験はまだ

うけぬ(四ウ)
おぼる月夜のメの花(常わづ文角力)ヲ、しん気梅と桜はど
ちらがいと花の一重は実とも見ぬ八重に咲気がなま中あれば)た
れに香りのとめるやら(五オ)
やみの夜にさへ香をりはおなじ(常わづいなか娘)娘ざかりのや
さ姿いと盛のよいとのぶりと見初てそめて下夕もえも)いつか鶯
来てとまる(五ウ)
替る規則を見習ふからは(常わづ白藤げん太)親のかたみの田畑
やしき皆ほふらつにさんしたもいとしと思ふころから三とせ此か
た)異見あつせいきはせぬ(六オ)
今更新聞こわがるよふな(常わづ桜川)落人のためかや今は冬枯
てすき尾花はなけれども世を忍ぶ身は跡やさき)あさいわたしじ
やないわいな(六ウ)
ひと夜あはねばまた気にかゝる(常わづ角兵へ)ほんにそふなら
山のおく千尋の海のはなれ嶋二人くらさば都もおなじ嬉しい世帯で
あるぞいな)みづ性ごころの主じゃもの(七オ)
更てまでも便りのないは(常盤津つし系)人の心もくみてし
る浅草川のはやきに舟はうわきの波に打よする首尾といふ字のうつ
ゝなき)馬車が出ないか車止(七ウ)
ならぬ恋とて今さらくやし(常盤津たきもふで)ねびくわん音を
出しにして夜毎日ごとのかち詣で雨にも雪のぬれごとはちつと先
祖へ申訳)たつた浮名はきへやせぬ(八オ)
すいなおかたと初会に見そめ(ときわづおかめ与兵へ)娘心の
すじに男ゆへなら曲りかど人に大河橋こさぬ仇なちぎりの花川戸流
て末のわるいのは女水性男水すへのもつれはともかくも)すへのも
つれはともかくも(八ウ)
かわゆらしさよ千種の花も(常わづ景きよ)古郷を出しにまさる
涙かな夢にわかる)枕とは実定家が詠歌(よみうた)も身に呉竹
の伏見なる知るべの方をたづねんと)千々に思ひのねに残る(九
オ)
すまぬころの中にもほんに(常わづしよ願)初の座敷の煙草盆
ひくより先へ気がせかれたしか覚への時さんとあはぬうちから名を
しつて)しばしあふみの水かみ(九ウ)
姿やさしきあの女郎花(常わづ大和文章)夏と秋とてへだてかな
さに今も螢のこがれてひと里ならぬ思ひの身をこがすこりや気ちが
ひじやないかいなされど此身も君ゆへほんに)つゆにもころのみ

だれ咲(十オ)
草の葉ずへのわしや露の身よ(常わづ小いな)庭の虫の音聞にさ
へいとゞ妻子のみのむしを)いまは野沢の流の身
御届明治十三年五月二十八日馬喰町三丁目十番地
編輯兼出版人 小森宗次郎(十ウ)
(広告)
「地本錦絵」問屋
馬喰町三丁目十番地
出版人 木屋 小森宗次郎(裏見返し)

小森宗次郎編
開化さわりどゝ一 下(表紙)
浅ふて深きは恋路のならい(ひるな遊び)ころづくしのかづか
づをかいておくりし玉章のとゞゐていつかあふさよの関をゆるせし
初枕)結ぶ糸にしの深み草(一オ)
にくい記者だがあの新聞は(常わづ?)色ある露のみなれ棹さす
手も遠き唐土の五湖のけしきはいさ知らず知るべを松の名にめで
ゝ)ほれた二人が起請文(一ウ)
犬のなくのでフト目をさまし(常わづお花半七)花も咲すな春の
雨又ちらすもはるの雨空晴やらぬ胸の戸を)あけりやお前の靴の音
(二オ)
恋のやみぢにしあんのむねも(常わづおふさ徳兵衛)うき事のか
づかさなりて山ぶきの長きつゝみをみじか夜やおはつがともすらう
そくの)それがあらぬかほしあかり(二ウ)
すゝき尾花じやわしやなけれども(常わづ大江山上)何をがなも
てなしぶりの煙草盆心は深き埋火の木の葉につゝむ真実はおくそこ
もなき賤が家に)恋に忍ぶの冬ごもり(三オ)
恋の上下に等級わけて(関の戸)其水茎に様々といつわりならぬ
真実を聞嬉しさもおしつゝみ恋こがれても)しににににに検査がしてほ
しい(三ウ)
みちのくの恋のかけはしおたへやせぬが(常盤津紅葉がり)けふ
のほそ布とりどりになれも習はぬ糸車いたはしや尾上のまへ恋と情
を)トすじに)ふみ見たうへの)ト思案(四オ)
夢に見てさへ其日はふさぐ(常わづ大江山下)二世を三世と乱合
其夜はわかれて矢文に日ぶみ又の御見に夜戦せんと障子屏風をこた
てにかまへ)まして顔見りや猶ふさぐ(四ウ)

ぬしへ尽した真情とゞき（義太夫おこま才三）きこへませぬとゞ様母様わしが心にどのやうにといだんかふもあることか事を好しなされかた（ほめて出される新聞紙）（五才）

もしほ草深いこゝろをこまごま書て「恨られたりかこつのも色の習と言ながら夫は浮気の水浅黄あひ初た其日よりこんなゑにしが唐にもあるか」やるも恋じのうさはらし（五才）

恋もしづみてにこりしうき世（常わつおその六三）今更いふも愚痴ながら誓はほんに三世相あけてかぞへて相生に金と水とは上もなきよい子もふけていつ迄も「そふて見帰す人の顔」（六才）

松のここの葉ゆふ日の影も（常わつ？）つま呼かはず雁がねの其玉章かくはかりいろに手だれのけつせいもこがるゝ人に逢見ての「こゝろはづかし初おもひ」（六才）

今じやつとめも自由の権理（常わつ忠のぶ）昔をいまになすよしもがな谷の鶯初音のつゞみしらべあやなす音につれておくればせなる忠信が「うそや？くだじや渡られぬ」（七才）

雪も霞のあのおぼる月（義太夫朝顔）此目はいか成あくごうぞや夫人くの跡を恋したひ石になつたる松浦がたひれふる山のかなしさも身にくらべては数ならぬ「せめて影なと拝みたい」（七才）

こゝろ尽して遣る玉章を（常わつこてふの夢）曳手になびくうつり気はましてはかなき二世の縁結びはせいでもふよくな猶水さして外こゝろさしもつれなき御方と「ぬしは浮気でまくら紙」（八才）

ぬしは驚わしや梅きどり（長唄七くさ）はるは梢もいちやうに梅が花さくとのつくりめざすかたきは「枝にひと夜をぬくめ鳥」（八才）

峯の梢のあの白妙も（常わつ忠臣ぐら七段目）折に二階へ勸平の妻のおかるは酔覚し早さとなれて吹風にうさはらししている所へ「いつか朝日にとけるゆき」（九才）

記者にたのんで二人が中を（長唄紅葉ば）うみぞつらいぞつとめのならひ煙草のんでもきせるよりのどがとふらぬ薄けぶり」広告させたい七日間」（九才）

浦のとま家の軒もる月も（常わつ奉納鯛）よしあし貝も忘れ貝振袖貝の一トすじにたとへ深山のわびす貝賤が手業のきぬた貝」流石すみよき閨のうち」（十才）

松木は公への操をたてゝ（常わつ八犬でん）さらぬだに秋は淋しき物なるに人跡たえし富山のおくふもとも埋む落ばには「つきぬゑにし」の末をまつ

御届明治十三年五月廿八日馬喰町三丁目十番地
編輯兼出版人 小森宗次郎（十才）
（広告）
「地本錦絵」問屋
馬喰町三丁目十番地
出版人 木屋小森宗次郎（裏見返し）
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

二十一 『開化都々いつ』 一・二

明治十三年六月二十六日御届。大倉孫兵衛編。請求番号：特416。

高い米を自分の銭を出して喰ひ一本四？の真書に墨紙含ませ貴重な光陰を費し然して新聞雑誌に投じ記者の目がねで時玉記載に成しを呑湖のしやあで盗み我面白の人迷わせその先生の名前も記せず今般新規にえらみし杯と己が勝手の寝言を並べ枕替りに記す賤生が綴りし小冊と事かわり是は一種無類の趣向作者の御名もありと真正直に新文句サアサア看客おためしに一冊買て五評ばんを只ひたすらに願ふものは

親釜散人戲筆（見返し）
恋の闇路へ迷わぬやうに瓦斯燈でらしてもらひたい？柳枝の介
きりぎりす干草はなれてわしや籠の鳥露をひたふてないてゐる
よし原てう」（一才）
わしが心はアノ風船よ恋の雲間へ昇りつめ 麗々坊錦朝
私キヤ水性流れのつとめ主は木性でうわきもの 下谷小せん」（一才）

赤いしかけで迷わす女郎は色の夜学の大教師 よし原すみ
嬉しい中にもこわいが三分おもひかなふて新まくら ふじ松錦之介」（二才）
はりがね便りじやまだ待どうしのつて行たや陸蒸気
義理と世間と人目がなくばそうしちやおかぬぞ君様を 鶴賀斎」（二才）
意気な芸者をさらりとやめて権妻姿も商買づく 妻八
今朝の夢見に喜びがらす心つれしきことばかり しんばしはま

次「(三才)
昔しや色恋浮気が基よ今は欲徳金次第 芳丁しん
私しやおまへの煙管と成て口を吸れてくらしたい 芳丁やつこ」
(三才)
心一ト筋三すじの糸に意気地達ぬききほいはだ すきや丁小今
文や言伝便りがおそひ早く聞たいてりがらふ 岸沢仲太夫「(四
才)
文明開化で規則が替るかはらないのが恋の道 橋屋橋の介
野菊たをつて手いけにすれば直に虫づく浮気ばな しんばし金太
郎「(四ウ)
起請誓紙に印紙を貼て約束ちがはゞ訴訟する 金亭不龍?
つらい座しきやひにくの客をきげんとるのも主のため 神田や
ま「(五才)
俣に成なら写真にとつて主に見せたい胸のうち 朝寐坊小夢
人の噂も七十五日このとちばかりは日は照らぬ 神田みね「(五
ウ)
なまじ写真が思ひの種よ見まひと思へどわすられず しんばし権
八
義理がなければ捨ては置ぬいやおふ言せずこちの人 都川福の
介「(六才)
私しや長靴主やステツキよ晴て逢れる身ではない 都ばしひさ
おまへ一人りに苦勞はさせぬたらはぬながらもとにもに ?家
柳女「(六ウ)
美麗尽せし博覧会の品は精工作うでくらべ 柳屋メ吉
きりでもむやうな真実「(しんみ)の異見わたしや骨身にこたへます
柳ばしあぬ子「(七才)
腰をそらして大あせかいてもう一ト息だと人力車 玉屋五月
月に供へた尾花でさへもいつか穂に出て色気づく よし原鈴木駒
二「(七ウ)
時よじせつとあきらめさんせゆかた舟さへ大根つむ 龍ヶ崎大淀
若や夫かと門の戸開き見れば新聞りんの音 中ノ鈴木たか「(八
才)
死んであの世はあてにはならぬ命ありやこそ花もさく 金瓶薄雲
たつた一人のおまへが便り外のおきやくは口先で 梶田屋若紫「
(八ウ)
おもふ念力やうやくかなひ「(三ばさつ) 初にそひねのにいまくら

かはすことばもなんとゆて??してよひの??と??ひめ?さ
へとりかねの??やうやうと明ゆくそらをつぎにして」よ
るこぶまもないあけのとり「(九才)
うらみつらみもかほ見りやわかれ「(色のふじ) まち人のゆかしき
いろのかほよばな見るにこゝろもふかみぐさぬれておもひはゆきの
夜も」とけてうれしきとこのうち「(九ウ)
おとこ心にあきかぜたちて「(やす秀) あだにくらしいなんじやい
なおきよ所のくらまぎれ?んにゆいのとみくちむべ山風のあら
しほどそつと身にしむうれしさも」いまはのすへのかれ尾花「(十
才)
二人りならんでかみとり写真「(二人奴) そもや二人りがなかなか
は心でこがれまち明しあふて嬉しき戻りかご互に胸をうち明てきも
あいぼれのすいたどしかはるまいぞと言しでのかみが見さんへちか
いにかけ」めうとそろへておさめがく「(十ウ)
御届 明治十三年六月二十六日
編輯兼出版人 日本橋区通一丁目十九番地
大倉孫兵衛
定価四銭「(裏見返し)
世の中は万吉原三谷堀開化の御代の清元に流れ尽せぬ新趣向飾る言
葉に花も実も錦色まし諸君のどゞ一集めて茲に梅の春成程是はと三
ノ柏のほど偏に延寿奉り?又
撰者 会田皆真百拜「(見返し)
いろはせず京とおぼへしむすめ今じや色気づきアイウエオ 宝集
家金之助
虫を殺して言れて居るもおまへ大事と思ふゆへ しんばし福介「
(一才)
美しづくならよしてもおくれ五しき硝子はわれやすい 春柳し女
おまへいやならわたしも否よといふて別れる気ではない 三遊亭
万橋「(二ウ)
屏風小楯に抜刀隊が床へ切込みややみ仕合 菊の介「(二才)
そだちよければ野菊でさへも鉢の植木の花仲間
はりがねが口をきくよな調法な代なら写真にくぜつが聞せたい
すきや丁はな
一羽で連ないアノ雁「(かりがね) は文のたよりをしてくれぬ よ
し村幸吾老「(二ウ)

庭の盆さる眺めの花よ娘権妻ねやの先 かつら才賀
 女房もちとは初手から承知ほれるに加減が出来やうが 柳ばしや
 つこ^二才^一
 人力車曳と権妻さんはのせてそろそろねだり出す ? 小和佐太
 夫 気強いばかりがおとこの情か少しはなさけをかけしやんせ 月の
 家菊寿^二才^一 福寿軒
 鎧兜をさらりと虜し洋服姿の軍人 柳ばしま
 たつた一ト夜が思ひの種よ知らずは他人でくらすだる
 つ^二才^一 (四才)
 陸にや蒸気車海には汽舟空にや風舟てりがらふ 柳ばしうめは
 意趣も意恨もない人さんにつらくあたるもおまへゆゑ き沢?
 吉^二才^一 (四才)
 出雲の社へ電信かけて妹背結びの神だのみ ふじ松若辰
 君の移り香まだ去りやらでまたも逢たいほれた情 神田^二吉^一五
 外にくはすとううちにはらんぶ文明開化にやみはない ? 和佐
 男 逢て問もなくはや明のかね憎やからすが目を覚す よし原なか^二
 (五才)
 倒れかゝつた親父のしんしやう娘がころんで又おこす 語夢等
 わたりや浅草少将じやないが雪の夜みちを逢にゆく しんばしお
 しゆん^二才^一 (六才)
 主の来ぬ夜は写真を出して逢ふた心で抱て寝る 大文字内雲井
 月は田毎にすみ田の雪見花のながめはよしの山 歌の家妻太郎^二
 (六才)
 昔しや海老にて鯛をば釣が今じやゑびすで猫をつる 七升斎花山
 文 わたしや浮草流れの身ゆへその日その日のかぜしだい 金瓶門今
 紫^二才^一 (七才)
 おもひに堪かね文かきくけこ何奈(どうか)首尾してあいうゑお
 ふじ松加賀国
 そふて苦勞は世上のならひそはぬ前からくらすする ひもの丁小
 すみ^二才^一 (七才)
 人目かねたる二人りが中にゑれき仕掛でかんじ合 つるが志ん朝
 心がらとて他国の住居くらうする身も親の罪 柳ばし小みつ^二八

色^二才^一のうき世と言ふのが無理か五しき色どる万国図 月の家桂寿
 二人り揃ふて門付節も唱ふ文句が身にあたる 柳ばししゆん^二八
 ウ^二才^一
 うめぼしじやとてばかにしやんすナ(ごん八)それもなくねのう
 くひすも^二とめてながしたこともある
 たよりない身をふびんとおもひ(ゑこうば)かわいとたつた一ト
 言のおこゑがきゝたいきゝたいと^二ひぎにすがつてなみだぐむ^一(九
 才)
 じやけんするほどなほます思ひ^二たゝいてはらがるならばこゝろ
 まかせにさやんせとおとのしぎにすぎりつき^二いつそいやならこ
 るしやんせ^一(九才)
 いかでもあらうがみこんだからは(喜せん)わたしやおまへのま
 んどころくはほうくはほうも^二もりとほめられたさの身のねがひほ
 れすぎるほどぐちなきに^二なるもおなごのほれたじやう^一(十才)
 あれさじれつたいはなれちや否だ(歌沢)たがいにはだをいただき
 しめそれなりそこへ^二二枚びやうぶのてうつがひ^一(十才)
 御届 明治十三年六月二十六日
 編輯兼出版人 日本橋区通一丁目十九番地
 大倉孫兵衛
 定価四銭(裏見返し)
 大倉孫兵衛は1921年に没している。

二二二 『新作浮世都々一』 一六六
 明治十三年九月十三日御届。 駒井友三郎編。 請求番号：特44163。

新作浮世都々一 一(表紙)
 積る思ひのかんにんぶくろきれてぬわれぬ人の口
 めしと私の二人りが中を何のいらざる新聞紙^二一才^一
 芸は其身の一世のたから人にとられる事はない
 恋のもつれの依頼を受けや僕はさしづめ公使役^二一才^一
 人の出世は知れないものよぼるも末には西洋紙
 恋にこがれてアノ笹がにが結びかけたるゑんの糸^二二才^一
 こんこん説諭を承知はしたが用いられぬは恋の意地

口でけなしてこゝろでほめて目では思ひを通はせる(二ウ)
ぬしはなをさら姑は大事ほれたお前を産だ人

開化したとは唯表向胸は開けぬ恋のぐち(三才)

雪の肌ともいわれし身でもいまじやしないこの時計(三ウ)

一日どころかたゞ半時も合ねばならないこの時計(三ウ)

地しん雷りやこわくはないが夕べの一言が気にかゝる

ぬしの口舌とあの義太夫はほんになくやら笑やら(四才)

ぬしの不実は元より承知改しんするのをまつている

かみやかたは初手くさしたかこう迄かわゆるものか(四ウ)

かたい約束堅田のかりにふみのたよりがして見たい(五才)

にくらしいぞへ新聞記者とあけのからすに人の口

わたしの意気地をさとられまいとたてる屏風の蝶つがひ(五ウ)

りんぎするのものはらをばたつも臨機応変時にある

秋の長夜を千代まで重ねそして二人り寝てみたい(六才)

酒と女にや目のないわたしそれでさいふに札がない

一人り野にふすわしや女郎花君の桔梗を待っている(六ウ)

主のこゝろの狂はぬよふに神に願ひをかけ時計

好てすかれてすかれてすかれてすかれて身をつくふ好た同士(七才)

花はちるとも匂ひ残せたとへこのすへどふなると

あれさお待よ硝子でみへる只さへ人目の多い口(七ウ)

すへに車を引ふとまよ引にひかれぬ恋の意地

念がとゞいて泥水はなれ又も鯨で苦勞する(八才)

茅が軒にもお前と二人り詫た住居も友かせぎ

心とこゝろが合さへすれば性が合ふが合まいが(八ウ)

口程物いふ目のあるおまへきこへぬ素ふりはうらめしい

アレサア待んせ今一ト言といへど煙りに陸蒸気(九才)

人のしやくりできては見たがまたも結ばる風の糸

鳥影さしてもぬしかと思ひ苦勞する程おもしろさ(九ウ)

すてよと思ふたおまへの写しんどふもみれんですてられぬ

つもるつらみも根ぎしのさとにうれしきさゝの雪(十才)

にくい記者だがあの新聞ははれて二人りが祈請文

かほりゆかしきつぼみの花をだれが手元に活るやら(十ウ)

(広告)

明治十三年九月十三日御届 定価金二銭

編輯兼出版人 駒井友三郎

浅草区浅草瓦町廿八番地(裏見返し)

新作浮世都々(表紙)

金の時計が目当じやものをえりに付のはあたりまへ

ゆめにまぎれてわすれているに声をたてるなかへる雁(一才)

僕はこのんでうわ気をせんが世間の婦人がすておかん

梅とさくららの色香をすてゝずつとすました糸やなぎ(一ウ)

是で死んだら腑分を願ひ恋の病をなをした

文の返事に印紙を張て原告する時証にする(二才)

思ひ思ふて届いた思ひ猶も思ひをますおもひ

まゝに成なら迷ふ瓦斯を引たや恋の闇(二ウ)

いる目と思つた其目がやふでお門違ひの間のわるさ

かべに耳よりまだおそろしい寝ものがたりを新聞紙(三才)

程も気性も男もよいがさつがなないのでほれられぬ

広い世界を相乗車せまくたのしむ母衣の内(三ウ)

顔や姿は写しんにとれどとれぬ二人りが胸のうち

招ぐ尾花にこゝろもみだれ風にもまるゝ男へし(四才)

吸附烟草についだまされて己が世帯を烟にする

口へ出ねど不首尾と首尾は鳥渡みかわす目でしれる(四ウ)

取もつこゝろか行燈の火をばけして出てゆくなつの虫

癢を起すもならはにやならぬいやなざしきをぬけるため(五才)

主とならんで写しんをとればおかめに外道の面ができ

ぬしこゝろがかわらぬ内に早く籍をばおくりたい(五ウ)

箸はもゝ引徳利は袴客はあぐらの獅子ツばな

かべに耳あり障子に目あり今は柱がものをいふ(六才)

海山こへてもたよりは出来る切ちやいやだよでんしん機

アレサおよしよそりや鑑札だ見られりやわたしの年がしれ(六ウ)

ぬしこゝろは春ふる雪よつもつたよふでも解やすい

ぬしあるおまへにほれたはかくごしれりや自首して罪を待(七才)

私が目鏡で定めたぬしをとかやくいふのは筋すがひ

にくいよ私しをよくだましたとにらんでみる目にふくむ笑(七ウ)

間夫へ手紙をかく筆ついで客へむしんのお相伴

出雲の神より恵比すお書た紙が取もつ縁結び(八才)

記者に罰金鯨に地しん投書に没書がなけりやよい

わづか二せんで写しんを買てなしみなぞとは気ざなやつ(八ウ)

立ちやいけなマア横に寝て腹の咄しをきゝなんし

意地と我慢で通した中を死んでも縁をば切もの(九才)
思ふやうにはそわれぬ二人り死んでも未来が気にかゝる
あぶない事だよでんしん渡り先がころべばともころび(九ウ)
ぬしを待夜は千歳の思ひ逢ば間もないあけのかね
文字のよめない猫社会でも野郎の鼻毛はみんなよむ(十才)
ぬしを待身はこふもり傘よ雨のふるにも天気にも
表向では切たと見せてきらぬ手品のおとし首(十ウ)

(広告)

明治十三年九月十三日御届 定価金二銭

編輯兼出版人 駒井友三郎

浅草区浅草瓦町廿八番地(裏見返し)

新作浮世都々一 三(表紙)

なびくやうでも根強い枝にすこし張持猫やなぎ

折角座しきを貰て来たに待せた苦情(いやみ)はよしてくれ(一

才)

地金の操と家業の浮気しらぬ他人のうしる指

偶に逢のがたがひの花よ梅もなれゝば香がうすい(一ウ)

高根たてずと入わけきいて解ておくれよふじの雪

花に短ざくかけたる謎はとけぬこゝろをゆひつける(二才)

ひらきましたとこがるゝぬしへ一寸場がきにかきつばた

いやでもあらふが帯ひもといてのせておくれよこの投書(二ウ)

月は仇にて田毎にうつるぬしの誠はいづくへか

新造年増に焚つけられてやかんあたたまも熱くなる(三才)

私しやおまへにおつこち絞りに妻に鳴海といわれない

驚やからすがわからぬうちにはたの小鳥がやかましい(三ウ)

たのみにないやうでたのみのあるはどうでもしねへのすて言ば

深山がくれのこのおそざくらた折お方はぬしばかり(四才)

雨に詠も又一しほと咲て風情の深見草

涼む隅田へこぎだす船でうかれまいぞへ水調子(四ウ)

晴て逢せりや深くはならぬ元は世間を兼るから

花は折たし手はいだされずこゝろ街のいばら垣(五才)

つれないおまへはわしやくまねど飽たわたしの身がうらみ

口でいはれぬ人目も有ばあこで知らせて眼で返事(五ウ)

白粉をぶんと匂はせ目顔でしらせそれと語らず心意気

君のこゝろのやはらぐやうに結びおきたやいとやなぎ(六才)

顔をちらりと三笠の山にいでゝまばゆき月の眉
思ひおもふたわたしの実も明していわれぬ此一座(六ウ)
恋の重荷を車につんで引にひかれぬ意気地立
笑止千万くそでもくらへぬしに添ふよにつみはない(七才)
いつそきかふのいや聞まいかたもとより出たこの写しん
ほの字とれの字の両方にあれば恋といふ字はいりはせぬ(七ウ)
にごつた水ならすまねばならぬわたしや口舌は気に掛ぬ
切たとみせかけ内所でつなく糸の音じめの二世三世(八才)
杉田浮名とあきらめながら袖に梅見の香が残る
うわべは笑ふてこゝろでしれていやなぎしきのつゞけもの(八ウ)
まるいお金と四角な札があれば三十一日にしちがでる
人目はなれたあの風舟で二人りしつぽりはなしたい(九才)
(以下欠か)

新作浮世都々一 四(表紙)

きりでもむよな真身ないけんこたへましたよ胸に針

開化したとは唯おもて向胸はひらけぬ恋のぐち(一才)

馬車や汽船は苦勞じやないがうつかりのれない人の口

逢といふ夜にさはりが有て月にむら雲うらめしや(一ウ)

かうもしたらと議論はしてもどふも成ない此規則

つらい勤の辛防とげてらくな添ひ寝がして見たい(二才)

思ひに堪かね文力キクケコ何様か首尾してアイウエオ

義理をかいても斯なるからにはあくまで女房にせにやならぬ(二ウ)

はなれ座しきで結びし赤縄今じやはなれぬ中ざしき

白と黒とはわたしの胸に置ておまへにゆづる勝(三才)

以後の浮気は罰金と極てこれまでしたのは御取消

身分ちがへど惚まいものかすしやのお里へにいまくら(三ウ)

うそと誠は仕打で知れるかくすおまへの気が知れぬ

這ば立たてば歩めとおしへた口で今更ころべとは無理な親(四才)

とも死ふと覚悟はしたが命ありやこそ末もある

心と心が合さへすれば性が合ふが合まいが(四ウ)

おやぢのランプは開化にくらしよくに手をやく米会社

心経病ぢやとわらはゞ笑へ死んでも思ひのとゞく文(五才)

切てくやししい思ひも?に先へとゞかぬでんしん機

あいたいばかりにこわさもわすれくらき夜道もたゞひとり(五ウ)

たをれかゝつた親父のしんしよ娘がころんでまたおきる

おまへの心と下等の時計度々くるふて気がもめる(六才)
私しが心はアノ風舟よ恋の雲間へのぼりつめ
おまへ廿九私しは二十四九勞をするかくこ(六ウ)
蚊帳の籠城まくらの皆君の進撃まつている
ぬしの心のくさらぬ先に漬ておきたやアルコール(七才)
きれたお人の写しんを見つめふさぐころがはづかしい
一羽でつれないあの雁金で文の便りを仕てくれぬ(七ウ)
滝の白糸かけてぞたのむころ玉子のすいた同士
口まで出たれど顔あからめておもふ事きく岩清水(八才)
人は白ひげ今よいの首尾を月さへ折よくうすぐもり
人の出世はしれない物よぼるも末には西洋紙(八ウ)
粹な屏風に身をのみこがしゆきつ戻りつとぶほたる
舟はずしきあのみだ川近き秋葉に風がふく(九才)
あらといふさへあたりを兼てじつと見詰る愛らしさ
ふけばきしるしふかねばゆるいほんにぬれ手へこのゆび輪(九ウ)
昇つめたる二人りが中は寒暑計でも測れまい
千話の口説をほん気にされて見かへられたがつまらない(十才)
口で悪言(けな)してころでのろけときどきのんで見る写しん
色とばくちをおさげがなくば分署分署は閑だらふ(十ウ)
(広告)

明治十三年九月十三日御届 定価金二銭
編輯兼出版人 駒井友三郎
浅草区浅草瓦町廿八番地(裏見返し)

新作浮世都々一 五(表紙)
天晴立派な鯨をおさへでかした猫だといわれたい
ぬしは金性私しは木性木金くらうは身のかくこ(一才)
堅いやうでも時節が来れば落て本意ない鹿の角
海山越ても便りは出来る切れちやいやだよ電しん機(一ウ)
アレサおよしよそりや鑑札だ見られちや隠した年がむだ
主に貰ふたかたみの写しん寝る間も放してよいものか(二才)
水さすぐらいでうすくはならぬ煎じ詰たる中だもの
コレラ病さへ防ば止る恋路にや予防はないものか(二ウ)
思ひざしなる私の猪口を主はずましてよそへやる
風船女ともしればもしれ尻のかい開化風(三才)
間夫と寝たとてうらむは無理だいやな客にもなくからず

名残りおしさにまた見に来たよ雨の夕べの花の顔(三ウ)
下手な投書と氷をうれば水になるかと苦勞する
言ちやいやだよ世間の人に私の湯もこの風(四才)
わたしや屁茶でも小町にやました人にまさつた穴がある
人目忍べど浮世の外へもれる障子のゆびのあな(四ウ)
はらも立まいたせもせまい四海兄弟自由の権
主が火性でわたしも火性あつくなるのも無理ぢやない(五才)
主とわたしのその引力は月と地球もおよぶまい
猫や狐がうき世になけりやこんにや苦勞をするものか(五ウ)
かぼちや野郎とかげではいへどはなしちやならない金の蔓
ぬしはころるのもうかわりじまそれかわたしの目くらじま(六才)
きざなやらうと小意気な人をころるの屏風で立わけ
三十日に月見る世と替つてもぬしのびんぼうは元のま(六ウ)
送籍なければありや唯の人二等親とはいはりやせぬ
ぬしと添ふ見と育てくられた親なら孝行もせにやならぬ(七才)
アレサおよしとはらつた手さきいつかまくらの下になる
手鍋さげよがおまへとくらしや何の不ふくがあるものか(七ウ)
親には反南の孝あるくせに恋にや不実な明がらす
届いた端書に名はないけれど気がねして出る家の首尾(八才)
金の時計が目当ぢやものを襟につくのはしれた事
印紙貼たるわたしの身体二重抵当にやなりはせぬ(八ウ)
二人り寝る夜は玉子のやうだわたししろみで君をだく
ふとく書るゝ細見よりは細くも戸主にかゝりたい(九才)
おたがひに嘘とてくたは皆売捌これから仕入る実と実
狸寝入りとさつて客の野夫をそらさぬ古ぎつね(九ウ)
ふつと目がさめこの子を見ればおやよく似たかほちやつら
寝た間も忘れぬお前だものをさつもの有うちやきればせぬ(十才)
気性を見こんでほれたる私し九尺二間が玉の床
またも苦勞の種をばまいて生じた世間のわらい草(十ウ)
(広告)

明治十三年九月十三日御届 定価金二銭
編輯兼出版人 駒井友三郎
浅草区浅草瓦町廿八番地(裏見返し)

新作浮世都々一 六(表紙)

晴て逢れぬお前とわたし逢ばいつでもぬれるから
 程もわるいが男もわるいそのくせ色気とよくがある(一才)
 おもふお方に途中で別れ恋の迷子になるわたし
 枕あいてに写しんをながめぬしのそひ寝をしたころ(一ウ)
 ふられがちでも猶いとわずにぬれをとふした雨蛙
 待ど来ぬ夜は只うつうつとしめりがちなるまくら紙(二才)
 すきときらひが一度にくれば算木たてたりたをしたり
 ねがひ叶ふてやしうれしやと思ふ間もなく五免職(二ウ)
 生に開化をした人よりも律儀に旧弊な人が増
 ういたころもそりやでよふ筈一人り小船のさしむかひ(三才)
 口ぢや言れず仕打ちや出来ず唾とめくらの色ばなし
 初手はおまへに説とくされていまちやわたしが意見する(三ウ)
 二人り並んで取たる写しんどうもわたしが付けている
 中がよすぎて喧嘩ができて末は查公の御厄介(四才)
 わしが女房をそしるぢやないが尻不性もの
 私しが亭主をそしるぢやないが馬鹿で不実で女ずき(四ウ)
 苦いお前と顔しかめてもどふも止ないビール酒
 短夜を恨むわたしがころもしらすにくや宵から大いびき(五才)
 めしが秋風吹せるならばどうせわたしは破芭蕉
 思ふ男にやさしいはれ返事するさへ夢うつ(五ウ)
 こがれて死だらわしや猿に成食であげたいぬしの夢
 私や時計でおまへは鍵よ日毎逢ねばうごきやせぬ(六才)
 濃も薄もみなその客の実とふじつに染る色
 いふは怪気と堪忍袋縫て居るのも妻の義務(六ウ)
 眠りさますはそりや御茶のとくきげん直すは酒の徳
 死なばもろとも縁がばともにはなれまいぞへすいた同志(七才)
 とふからとくしんしているけれど女の口からいにくひ
 無理なようでも呑冷酒と親の異見は身にひみる(七ウ)
 苦勞しまいとこゝろでこゝろ定めながらこの苦勞
 天の橋立恋わたるとも切戸あるのが気にかゝる(八才)
 おもふお方へ橋でもかけて渡つて見たいが身のながひ
 身俣ならぬはつとめのならいあすといふたは無りかいな(八ウ)
 浜の真砂子はよし尽るとも添にや尽まい我おもひ
 焼野々きすは子ゆへに迷ふわたしやぬしゆへこのまよひ(九才)
 いつまで白歯で居るかとおもやむかふ鏡がはずかしい
 小野がわるさに身代限りたれか三ツ井でやればよい(九ウ)

千話や口説は背中とせなか雲と雨とは腹とはら
 僕をしり目につけたる狐化すつもりがちくせう目(十才)
 思案半途に不斗出たお屁さきに実の無しらせたる
 気がね苦勞もしばしの間今に逢れる時が来る(十ウ)
 (広告)
 明治十三年九月十三日御届 定価金二銭
 編輯兼出版人 駒井友三郎
 浅草区浅草瓦町廿八番地(裏見返し)
 本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
 裁定のもと、公開されている。

一十二 『開化新撰都々逸』
 明治十三年十月十八日御届 児玉弥七著 請求番号：特 58-364。

児玉弥七著
 開化新撰都々逸 全(表紙)
 開化新撰都々逸
 虎重筆(見返し)
 海山越ても便りが出来る切れちやいやだと伝信機
 倒れかゝつた親父の家(うち)をむすめころんで引おこす
 言ふは怪気と堪忍ぶくる逢ふてゐるのも妻の義務(一才)
 なんのばちかや調子がくるひ結ぶ糸さへきれたがる
 三味せんのはちを小だてにあくびをかくしむりにこぼしたそらなみ

天晴立派ななまづをおさへでかした猫だといわれない(一ウ)
 恋の夜学にランプをてらし痴話とくぜつの勉強する
 羅生門より三十日が剛ひ鬼が金札とりになる
 神代この方かわらぬものは水の流れと恋の道(二才)
 ぬしと繋がる鎖りがあらば赤い着ものもいとやせぬ
 憎い記者だがアノ新ぶんは二人が為メには結ぶがみ
 開けたおまへに開けぬわたしに成の恋のじよう(二ウ)
 初手はお前に説得されて今じや私しがいけんする
 わたしや松がえぬしや鳶がづら四つにからみし床のうち
 浮気自由の権ある主を手くだの糸にて捕縛する(三才)

ぬしの心がくるはぬやうに神に願ひのかけ時計
文明開化の西洋でさへも色でわけたる国の絵図
忌味(いやみ)はなれた小いきな年増一寸御覽よ此写しん(三ウ)
ぬれる縁があいあいがさもほんにうれしいにわかあめ
さつしておくれよ花なら蒼しらせぬわたしの世間見す
主に貰ふたかたみの写真寝る間はなしてよいものか(四オ)
座しき相場をくるはす猫は一寸二寸上ゲ三寸さげ
行燈かきたて寝顔を見ればほんに鼻氣ののびた客
文の返事に印紙を張て原告する時証にする(四ウ)
けむとしりつゝこゝろの浅間口の葉にのる巻煙草
いれておくれよじらしめてあづと土手の時雨のじやの目傘
写真になるならこゝろの内を主に見せたいこの苦勞(五オ)
ゆめでもよひからもちたい物は金のなる木とよい女房
親には反甫の孝あるくせに恋にや不実な明がらす
これは私のかい紋などゝうそをゆひはのかげのろけ(五ウ)
雨のふる夜も通ひはすれどたゞの一度もぬれはせぬ
西洋すがたにズボンとほれて袖ないおまへで苦勞する
月は晴てもわたしの胸はやみのつづてゝ当らない(六オ)
すてりやさん財振りややけよどうせこうなりやからざいふ
よきもあしきも世上のあらを日々に出す新ぶん紙
雲にたのんでしばしの間月のひかりをかくしたい(六ウ)
口もかるいがおしりもかるい夫でも娠(はら)めば身はおもい
内の亭主とこたつのあしはなくてならないあつてじやま
冷ちやわるいと座蒲団出すはあついわたしのこゝろいき(七オ)
かうもしたらと議論をしてもどふもならない此規則
妻子あるのを承知でほれて末は手切と出るつもり
久しぶりだと一座の手まへでたつた今逢たその人に(七ウ)
うぬぼれ鏡で顔みる度にほれぬ女の気がしれぬ
主のこゝろと夏うる氷解るととけぬで苦勞する
聞た異けんも尻からぬけて屁とも思はで苦勞する(八オ)
岡ぼれしてさへ浮名がたつに恋じや出るはづ新ぶん紙
ペラの恵びすがそろばんおいて外債利足をあんじ顔
なまじ半分ひらけたよりはかはを冠つた畑の芋(八ウ)
明のかねのねきゝたくないがゴンとなるはたのもしい
椅子のつとめ腰かけ仕事ほつれやすさよ三シン縫
首尾か不首尾か不首尾か首尾か返さぬ女に待女房(九オ)

こんなに嬉しくあわれる夜半があるでかなしい夜はもある
のきにひらめく日の丸はたに空に霞のでんしんき
規則で啼のがアノ明がらすたまにや日曜(どんたく)するがよい
(九ウ)
我(わし)が亭主をそしるぢやないがばか不実で女好き
聞も咄も人目をかねて背中あわせのすゞみだい
我が女房をそしるぢやないがわきが出つちり不性もの(十オ)
おまへの心と下等の時計くるふたびごと気がもめる
ほれた同士と寒暖計はあつくなる程昇りつめ
おぼる月夜にまつ身のうれし雁は帰るに主わくる(十ウ)
好た同士でも時節が来れば落もうれしいはなの雨
かたいやうでも時節が来れば落もうれしいはなの雨
問ぬ先から其自解(いゝわけ)はかくす事情のある証拠(十一オ)
どふぞ首尾して人目を忍び一寸なりともアイウエオ
逢ふちやいわれぬわたしが胸を文でありたきカキケケコ
おまへにもらつたこのかんざしをあらひ島田へサシスセソ(十一
ウ)
どうで届かぬわたしが心風の尾花の片まねぎ
開化しないと指さゝれても主が死ぬならもろとも
若や夫かと門の戸あけて見れば逃だす探訪しや(十二オ)
黄色な声して英語をつかひ青い書生の開化ぶり
主や口中私しはわきがほんに二人りはくさいなか
酔た男の羽おりをかりて代理つとめる猪子(ちよこ)さばき(十
二ウ)
ピンとおろした心の錠を義理といふ字がねざり切
思ふお人が兵士にあたりわづか三年が百千とせ
ぬしもするから私しもするよ浮気くらべじやまけはせぬ(十三オ)
人は馬鹿だの何のといふが通ひ出したらやめられぬ
梅もさくらも牡丹もいよいよ主の便りを菊の花
ホツト溜息枕にもたれ互ひに見合す顔とかほ(十三ウ)
あげたり下たり思わせ振なほんにお前はじれつたい
意趣も意恨もない客人へつらくあたるもおまへゆへ
紙幣が結んだ二人りが中は破れやすひは知れた事(十四オ)
おこへばかりですすがたが見へぬならば硝子の戸がほしひ
せまい世帯にくつつ付合て二人り中よ紙のひな
人目放れしアノ風舟で晴てはなしをして見たい(十四ウ)

おまへがさうしたごま菓子いへば私しやお臍で茶をわかず
ねづみ穴より女猫の穴が客のために不用じん
恋の闇路にまよふた中を早く月夜でくらしたい(一才)
どふせ浮名の立うへからは封せぬ端書の文づかい
むかしや色恋今金したい程やきりやうはすたりもの
今の此身を写真にとらせぬしに見せたいやつれがほ(一ウ)
私しの命に印紙をはつて主へ抵当に入れて置く
二人り並んだ紙とり写真末のすへまで消ぬやう
思ふおかたになぞではないが解て見せたいむねの内(二才)
ぬしの下歯は私しと極てやめておくれよ食ちらし
いきな散髪小いきな坊主一ツべつつい二タごころ
ならば検査のお医者に見せて胸の中迄知らせたい(二ウ)
口じや言れず仕打じや出来ずおしと目くらの色ばなし
好と嫌が一度に來ればほうき立たりたおしたり
右に主の手左にペラをつかんで遊歩がしてみたい(三才)
心とこころがあひさへすれば性があふふが合まいが
筆にいわたる心のたけを毛ほど思はぬ主の胸
待にかひなき今宵の雨で内に居ながら袖ぬらす(三ウ)
わしのりんきはうけ売なれど主のうわ気はおろしうり
すねた梢を手管とやらでおつにからまる藤の花
アレサおよしとはらつた手さきいつかまくらの下になる(四才)
貴殿このち浮気をすれば拙者出雲へ訴訟する
日和定めぬこの秋風になびく尾花の気がしれぬ
ねがひ叶ふてやレ嬉しやと思ふ間もなく御免職(四ウ)
ゆびを切ふとしたかみそりでけふはうれしくそる眉毛
廓のさくらも見あきてはやくみたいおまへの寮の菊
背中合せの口舌もいつか解く帯まではらあはせ(五才)
大工たのんでかんなでそつと立たうきなをけづりたい
写真計りじや実地をしれぬならば心もうつしたい
あれさお待よ硝子で見へる只さへ人目の多いくち(五ウ)
うその中から真事の事をいわせて見たさにこの苦勞
嘶しごへさえかすかになりて更るれんじにきりぎりす
きぬぎぬの胸にひゞいた時計のかずを一つかくすも恋のよく(六
才)
早くおまへを鯨にさしてふたりぬらぬらくらしたい
人目忍んでちよとアイウエオ花の木かけに夕チツテト

思ひほそりて巨燵の火さへやせてくる程待つらさ(六ウ)
雨が取もつあひ合傘よ系もりの雫でぬるゝ恋
アレサおよしよそりや鑑札だ見られちやくした年がむだ
筆ぢやわらはせ文句ぢやこころしほんにべんちやはつみつくり(七
才)
末に車を曳うとまよ引にひかれぬ恋の意地
よいの苦舌に無理ゆひかけて今朝の別れが気にかゝる
主を待夜は戸たゞく風ももしやとあたりへする気兼(七ウ)
ひざにもたれて顔うちながめこんなおまへになぜほれた
入てもいれてもまだいれたらぬ顔をしてゐる芝居茶屋
苦いおまへと顔しかめてもどうもよせないビール酒(八才)
人もほめるし私しもよいと思つて見とれる主の顔
兎角浮世は苦がたのしみと思ひ直してまた惚る
是やこの行も帰るもわかれてのちは兎に角気になる靴のおと(八
ウ)
ぬいだはおりを行燈にかけて人目をつゝんだ忍びあし
猫はげいしやに狐は娼妓(じようろ)客は狸のかし座敷
電信で便りよする様な開化の時節写しんに口舌がいはせたい(九
才)
ぎりもふぎりもあわれもむりも札(ペラ)の紙からわいて出る
鼠おさへる権理を置いて鯨とるのが猫の義務
ひるは夫の車を曳て夜はおさせる照手姫(九ウ)
浮気でたゞいた背中へ今は着せる羽織もうしろから
米は上るし等給は下る晦日の予防が仕てほしい
神経病だと笑はゞわらへ夢やうつゝで主のかほ(十才)
かよわい腕もかんしやくじからすねた枕をねぢなほす
ぬれて嬉しい此夕立にかたみがわりの最合がさ
かたく育てた箱入ものを誰に解れる夏ごうり(十ウ)
ふたりならんでうつした写真切れてもみれんですてられぬ
思ひがけなく見合顔を烟にして行汽車のまど
舟とさほとを持たないならばういたせかいはわたられぬ(十一才)
私とおまへは硯と墨よすれば濃字が染て出る
君を待がえ心の竹をやがてかほらす梅
義理もなさけも甘いも酢いも知つて浮気は廓(さと)のくせ(十
一ウ)
もしや主かと月さす窓を明りやかぼちやのかけ法師

ぬいしや鑑札返上とげてお傍でたち縫して見たい
浮名立られ引にはひけずどうせ斯成りやちからづく
ぼろツ買じやといはれて居ても漣(すい)てかためた西洋紙
中のよいから起つた事を誰が裁判するものか(十二ウ)
主は秋風振すてられて私しや鈴虫なくわいな
達者なげい者もおよばぬ筈よ踊り上手の座頭金
アレサおまちよやられちや困るとめて置たや雲のあし(十三ウ)
虫を殺していわれて居るもみんなおまへをかばふゆへ
巨燧やぐらで恋路のすもアレサ人目の閉がじやま
異見されるももふ聞あきた飛で灯に入夏のむし(十三ウ)
主の来るのをよくよまたば待れぬれんじにほとぎす
賤が伏家にさす月よりも忍ぶ恋路はもれやすい
指の先にて開いて於て入て鳴出すゴムの靴(十四ウ)
今朝の夢見によるこびがらすまたもせうじに鳥の蔭
私しが思ひは西洋床よいふにゆわれぬ髪いぢり
今更ペケとは袖ない私しする袂はつツぼう(十四ウ)
風船にフット乗られこちや登りつめ先は浮気な空だのみ
酒にのまれたおまへの無理をさます塩茶の口うつし
思ふまいぞへも思はぬとおもへば思はず思ひだす(一ウ)
主の心に伝話機かけて浮気のいけんがして見たい
起請せいしを洋紙へかいてだます手くだのやぶれ口
うなぎの性がへぬらくらおまへ私や焼々身をこがす(一ウ)
うはの空行身は風舟よ落とるところがわかない
内証内証でつひした事をいつしか読つり新聞紙
鳥渡舌が遂すれ合てクワツト燃たつ早附木(二ウ)
染たしら歯が証券印紙うわきで反古にはさせはせぬ
開化のくづやが面倒なものよ兵子おびふんどしかぎわける
我身でわが身が自由にならぬしれて喰付夜着の袖(二ウ)
鏡の権兵へを宵からやとひ明のからすを追したい
真(まこと)写した私しのすがた浮気なあなたにやるわいな
便り待のに又川ずかへア、もぢれつたい五月あめ(三ウ)
浮気心は少しもないが恋しいお方がある計り
真におまへはラムネの徳利どうすりやおしりがすはるやら
ほれた私しの迷ひか主がじつをやる程うそらしい(三ウ)
浮た同士といわるゝはづよ涼み舟から出来た中

たよりない身にたよりができてもとめて苦勞するわいな
ぬしは秋風私しや氣を紅葉いろにもへたつむねのうち(四ウ)
そふての苦勞はかくごだけれどそわぬさきからこの苦勞
胸のほむらと石炭油はちよいとしてさへもえやすい
なれぬ世たいにたがひにやつれ今のは辛苦の突くらべ(四ウ)
ほれたお方は皆筒袖ですがるたものないつらさ
お氣にさわるがかうゆうたらとあんじこうらす筆のさき
一すじ縄でもいかな奴が三筋の糸ではしめられる(五ウ)
苦勞する墨硯の海のふかい奴が浅いは客と問夫
見捨しやんすな行末までもなどゝ写真へとりすがり
世帯かためてヤレうれしやと思やおまへのまた浮気(五ウ)
主のうわ氣をきく度ごとにしやくがふとつて身はやせる
出雲のやしろへでんしんかけて妹背むすびし神だのみ
母のまへでは洋語をつかひ忍ぶやそくする書生(六ウ)
実意(じつ)のあるのがかへつて苦勞人にもそんなであろつかと
のぼりつめたをしやくりにのせて切てくやしい風のいと
忍ぶ恋に胸氣なランプあふて嘶しもたちかくれ(六ウ)
娼妓(わちぎ)をきつねといふ舌の根で主をたぬきのそらいびき
なげた枕につみとがながないがなげにや手まくらさせられぬ
たがひにふりそひ心のたけを咄して嬉しい演舌所(七ウ)
松といふ字は好るゝ筈よ君と木とのさしむかひ
新ぞうにやきらわれ年増にやふられ僕ほど果報なものはない
口で悪言(けな)して心でほれて人目忍んで見る写真(七ウ)
東はしらめど女郎はこないそこでアホウトなくからす
帯はとけどもまたとけかねる主の心と峯の雪
ゆめもみじかい夏の夜明てみれんのこすは蚤のあと(八ウ)
秋の天気とおまへの心変つてかはつて又かはる
人に話せば噂がこわし二人じや文珠の知恵も出ず
晴てはれない税金出してつらい辛抱も今しばし(八ウ)
うそも誠も皆うちあけてもしや手管とうたぐられ
うたがわしやんすがわしや心まで見せてゐるぞへ葛まんぢう
小鳥の名に似た女郎のたんす明て見さんせ四十雀(九ウ)
束縛されよと斯ふなりや俣よどふせ人目のせきやぶり
おまへによふ似たよい子をうんで家族二人と門の札
赤いしかけに迷ふたゆへにあかい衣類(べ)着てつく田じま(九ウ)

はれて女夫(めうと)となる其内にむねは互に曇りがち
 雷の光りでにげ込蚊屋の中であつたへその下
 うそも誠も仕方では隠すおまへの気がしれぬ(十才)
 鳥渡口舌で背中とせなかさぐる互ひの腹とはら
 植木や盆さへながめの花よこれは権妻閨房(ねや)の花
 悪く言りよがおまへとならば出て嬉しい新ぶん紙(十ウ)
 金の時計が目当じやものをえりにつくのはしれたこと
 意地にも添はねば世間の手前たちし浮名の新ぶん紙
 たがひに人目は忍んでみたがひとの耳には戸がたゝぬ(十一才)
 開化する程恋には便利遠けりや蒸気や電信機
 日増に道路はひらけるけれどなぜかひらけぬ恋のみち
 君が不服でそはねば僕は願ひ出でゝもそふ所存(十一ウ)
 はたからおまへの噂を聞ば逢たはじめをおもひ出す
 繻子の帯ほど解あふ主に遠ざかるので気にかゝる
 主に淡路の夜は無理酒にかよふ廊下の千鳥あし(十二才)
 恋の辻うら独うらなひ
 (恋の辻うら)独うらなひ
 このうらかたの仕様はまづ銭を六文握り南無けんげんかうりゝゝ
 /ゝと三べん唱へその銭を投出すなり文字ある方を白とし浪形の
 方を黒と見なし都々の文句の上にある
 待人うせもの願ひ事の吉凶を定むべし
 まち人 うせもの ねがひ事(十二ウ)
 乾为天 坤為地
 花よ青葉とたのしむうちいつしか身にしむ秋のかぜ
 奥歯でぎりぎりまへばで世事を言ふもおまへがあるゆへに
 雁が帰ればつばめが通ふおまへいやでもまた出来る
 つらい峠をやうやう越て是から二人が新世帯(十三才)
 霜よけに俵かけたるアノ菊の花蝶がこがれて逢に来る
 降れたあげくにまたてらされる狐の嫁入じやあるまいし
 風も吹ぬにアレ見やさんせのゝ字ころがすかなくず

恋の綾瀬を辛苦にするな今になかくすみだがは(十三ウ)
 枕のぬれたは涙じやないよ風邪の残りのみづツぱな
 花の笑顔でみさほの松の色もかほらぬ主のそば
 年が明たらこの風呂しきをおまへ背負せて外へゆく
 あきらめられうかこりしよなわたしいのちかけてもそひとげる(十四才)
 ？のはつ日のゆたかにさしてのむは目出たいとそのさけ
 庭の雪間のアノ梅さへも寒苦しのひで花がさく
 行燈のうしろでくらひ文をばよめど今に明るくなる夫婦(十四ウ)
 泣てだませばお客のこけが色のしおくり仁舞札
 うしろから着せる羽織のその襟さへもかへすがいやではないかいな
 月にむら雲わたしにおまへ邪魔と知りつゝきれられぬ(十五才)
 せけばやむかとお部屋のだじがせけばみれんできれられぬ
 土地は元より世間はなほも広くさせたいこちの人
 わたしの恋路とアノ朝顔は露のなさけで咲て居る
 無理なねがひもやうやうかなひ逢てうれしき花のかほ(十五ウ)

うちの亭主と巨燵のはしなくてならぬが有てじやま

山天大畜

思ひきれとてさらしを五尺おもひきらりよかごうざらし

山雷頤

兎角せきるな浮世は車めぐる月日をまたしやんせ

沢風大過

末の別れを思へばほんに深くなるのもよしわるし」(十六才)

坎為水

酒はさめ腹はへるのにたばこがないよいのちに別条ないばかり

離為火

つとめはなれて身になるものはふしたあとでのひと寝いり

沢山咸

逢たその夜はちかひも堅くたてし屏風に鶴とかめ

雷風恒

名残おしげに見おくる???露かなみだか朝ざくら」(十六ウ)

天山遯

米は?(しんにう)かけたはまよひ麦にしんにう大違ひ

雷天大壮

その酒をもつと重ねて吞せておくれ酔せてたのみの事がある

火地晋

意気な人より極しんせつな野暮なおまへが頼母しい

地火明夷

酒のせいだと詫言すれど惚て居りやこそあのしまつ」(十七才)

風火家人

腹を立てて座しきを仕舞床へ入れてもほれた意地

火沢 (日+癸)

真桑うりあつくおむきよ根生がしれる跡で皮喰やおなじこと

水山蹇

美しくいとてこゝろはしれぬよけてお置よ鬼あざみ

雷水解

花ほどに愛敬なけれどあれ見やしやんせすがたやさしき葉出やなき」(十七ウ)

山沢損

風が戸叩きやうつゝで明て月にはづかしわがすがた

風雷益

うどんな私におまへの辛みなかくそばにはおかれまい

誉られる親にひかれて此年までも私しや浮気の味しらず

沢天夫

すいもからいも知つてゐるわたしあまい口端にのるものか」(十八才)

天風姑

知らぬ顔してお酌にや出たが胸にや言たいことだらけ

沢地萃

時節まつのは知つては居るが気がそれやうかと気がもめる

地風升

思ふやうにはならない太鼓裏にやぶれがあるわいな

沢水困

無理な願ひも聖天さまへ色よい返事を待乳やま」(十八ウ)

水風井

あらためて親のゆるしのこの祝言はむかし咄しも床のうち

沢火革

堅く見へても暑中の氷甘くされては解やすい

火風鼎

じれつたい程なぶられながらはなれともなや主のそば

震為雷

しがみ火鉢とおまへのあたまだんだん光りが出るわいな」(十九才)

良為山

仕舞やくそくきめてはきたが逢にや行たし銭はなし

風山漸

いろは寝がへり女房はでるし泣つら蜂とは此事が

雷沢婦妹

帳場がうしと寝て居る禿用のあるたびまたがれる

雷火豊

柳にみせても心のうちはめつたになびかぬ金次第」(十九ウ)

火山旅

思ひざしたア久しいものよ足袋の底じやアあるまいし

巽為風

エ、モじれつたい亦抜たのかしつかりはかせな坊のぞり

兌為沢

剛がりなさんなしたら度胸外に日の照る里もある

風水渙

時節までとはそりやあんまりなおそけりやこつちも年がよる」(二

十才)

風沢中孚

花は散ても二人がなかへ出来て嬉しいさくらんぼ

雷山小過

染た白はがまたはがさせて元のしらはにたれがした

水火既濟

浦山しいぞ茶の湯のふくさぬしのお腰にはさまれる

火水未濟

琴でおまへのこゝろを引が合せてお呉よちやうしぶへ(二十ウ)

つらひ勤めもおまへをたより(げん太)はつの御げんにほれたき

やくどこへもおそふゆくはづを一ざのまへもなんのそのあすをなぶ

られよとまにて心でやぼなとこいそぎしごきもわきへなげしまだま

くらのしたへやるてさへつとめをはなればからしいぢよらうめうが

にかなひしとたのしむわしをふりすてゝよそで浮気すりやいのり

ころす

春が来たとてアノウくす(ママ)が(忠のぶ)見たせば?方の

こずへもほころびてうめがへうたふ歌ひめのさとのおなごがはるは

はねつくてまりうた(こゑもうるはしうめかほる)(十五才)

死であの世とそりや気短かな(かみぢ)しんで花みがさくかいな

たのしむもこいくるしむもこい(いのち)のちがかりやこそすへもある

気やすめはよしておくれよまうけにやせぬが(ご?)ハテこゝ

ろへぬいまうちしてつぼうはいんにはなれようにはなれけんこん二

ツにわかれつ?音ありてさきにおとなしサイ八玉なきからでつぼう

よも(うそ)と知りつゝだまされる(十五ウ)

主は当番今宵の寒さ(雨露)ヲ犯テ市街ヲ巡ル是六円ノ給ヲ得ン(三)

思ひやられるつらいやく

梅干じやとてばかにしやんすな??は花よ(それもなくねの)うぐ

ひすなかせたこともある(十六才)

腹立まぎれにたぶさはとれど(おて)さいぜんすきのはやるには

このやぐらのたいこうつときはほうぼうどきちひらきちじやうじ

へもゆかるゝこのことうてばうたるゝやぐらのたいこ(うつつ)うた

れぬほれたなか

かねや荷もつは計量にものろが(はつた)わがものとおもへばか

ろしかさのゆき(恋の重荷は目)が知れぬ

はへばたて立ば歩めとおしへたおやが(三千せかい)に子をもつたお

やの心はみな一ツ(いまさら)ころべとはどうよくな(十六ウ)

便りがあるかと首ヨ長くして(せんだい)一ねんまでともまだ見

へぬ二年までともまだ見へぬ(もしや)こゝろがかわつたか

金を恐れて来られぬやうじや(恋情ノ切ナル所常辛苦ヲウトン

ズ)惚たなさがまだ薄い(一才)

なけりや不自由あつては二夕目(いかけ屋)斯見た所ア江戸じや

アねへ上しうあたりのあきうどらしいがはまでつツしりもうけたの

かてへぶきれいなつけへやうあれじやおんなもほれざアなるめへな

べかまのやせうでじやアとてもできねへアノ系やう是も一しやうア

レも一生こいつアしうしをけへざアなるめへ(兎角めゆへにきがか

わる

約束たがへず能ふまア主は(はつ?)こゝらあたりはやまがゆへ

もみぢはあるしゆきはふるさぞさむかつたでござんしよふ(雪の夜

道をきさんした)(一ウ)

人の誹謗も世上の義務もすて君へ情たてる

恋の性質分析すれば愛素好素(すいそ)でなしたなか

巻て結んだ捕縛の紐が切て割腹する財布(十八才)

かたいかたいと由断のうちに(ふたおもて)ひいなあそびのさゝ

ごとにはづかしながらさかづきをさしたわたしが心いきべに付た

といふたればそこからのんで下さんしたそのうれしさにさかづきを

二世のかためとだきしめてつひてまくらのそゝげがみなをてあぎよ

とかんざしにおまへの紋のさしこみはしやくといふものはじめてし

つたほかのこのごのはだいらおもひこがるゝわたしじやものなん

の心がかはらふとあなたへひけばこなたへもつれもつるゝいとや

なぎかせにもまるゝふせいなり(いつかわられるランプほや)(十

八ウ)

人目しので恋路のやみを(せきのと)つへをちからにたどたど

と(こへて晴ての女夫づれ

権妻が袖にすがりて別れを惜む(うらぎと)そなたもともととい

ひたいが)つれて行れぬ遠いくに

別れて呉れとはあんまりむごひ(そりやきこへませぬでんべえさん

おことはむりとはおもわねどそもあひそめしそのひより)わたしや

別れる気はないよ(十九才)

今朝はかへらにや不首尾としれど(三ツまた)まだとけやらぬう

つりがのそのうちかけのうしろむきかはひらしさにますおもひ)ど

うも見すてちやかへられぬ

ういた恋路とアノせみの声(????)あつといふのもちつとの

まこわいゆめじやとおもふてしんぼうせい「いまに秋風ふいて来る」
(十九ウ)
逢たさ尋ねるお方は留守よ「(タギリ) あはずにいんではこのむね
がすまむ」こゝろのまゝならぬ
とうし車で江の島まうで「(おちうど) とまりノのはたごやでほ
んのたびねのかりまくらうれしいなかないな」せけん晴て
の二人のり「(二十オ)
主を大事とこゝろにすまぬ「(あさま) いやなきやくにもひよくこ
ざ」まくらかはすすむすへのため
握り拳を上たる下へ「(しろ木や) たゝいてはらがいるならば心ま
かせにさしやんせとおとこのひざにすがりつき」ぼんとなげたるな
げ島田「(二十ウ)
便りない身とわたしをいぢめ「(おそめ) あれまたあんなむりいふ
てそんなそのよな」むりなこといやなをかわひ
おぼる月夜がさらりと晴て「月光明々トシテ地上ヲ照ス」しのぶ恋
路の邪魔をする「(十五オ)
山の奥なる谷川よりも「はこねなア八里はうまでもこすがこすにナ
アこされぬナア大井川」恋の淵瀬はまだ深い
田舎ものでもほれゝばおなじ「(せんどう) 兎ぞまつまへのおかた
でもこゝろに二ツはないわいな」実となさけの二ツ文字「(十五ウ)
かわいお人に見せたいまゝに「(うらしま) たまのかざしにかつら
のまゆみつきもてりそふ花のすがたのまばゆさにゆきをめぐらす
たもとかな」化わひするの恋のじょう
どうでそへずば手に手をとつて「(おかるかん平) やばないなかの
くらしにははたもおり? ちんしごとつねのおなごといわれても」と
もにくらうがして見たい「(十六オ)
鯉やのほりとせつくのいわひ「きんときがきんときがくまをふまへ
てまさかりもつてふじやすそのゝまつばやしよしつねけんけいわた
なべのつなからの大しやうあやまらせしんがうこんがうたけうちの
しんいくさ? きやうよしあしちまき」菖蒲かたなやかしわもち
げい者てこまへ花出しやたい「おまつりはんづけたけだいでづものつ
もりざいくじやのめがさはやがり八ツやとをりにかはるまつりけ
いこのきやりごゑ」まつりけいこのきやりごゑ「(十六ウ)
つなぐかもじに大象もとまる「(さらし?) とめて見よならなたね
に小てふうめにうぐひすまつにゆきさてはせなぢよがそでたもとし
よんがへな」とめてもとまらぬ恋のみち

墨に恋の恋路を籠て「(はうた) かきおくるふみもしどなきかなが
はでだいてねよとのおきかへていはにせかれてちるなみのゆきかみ
それかみぞれがゆきか」かほりもらさぬ状ぶくる「(一オ)
辛抱するのむわづかのうちよ「(てならいこ) つまのためとてん
じんさまへがんかけてうめをたちますめいはくサア、我一代たちま
すめいはくむめを梅をたちますめいはくサア我一代まづほんにそふ
じやいな」縁を結ぶの神だのみ
かべに書れ「ママ」あいあいがさも「(しほくみ) めれによる身は
さゝしてござんせ人めせきがさいつあをがさとほんにゆびおりその
日がさまつにながへのしんきらしそれへそれへ気をもみぢがさしは
りのとのごにみさほたてかさもあいあいがさのすへかけて「いまを
りがさじやといわれない「(一ウ)
寝がほつくづく枕にもたれ「見ればみるほどうつくしいこんなとの
ごとそひぶしの身はひめごぜのめうがぞと」しばしみとれほれたじ
やう
まるい玉子も切よで四角「(三だんめ) はんぐはんどのあすからと
じやうはやめにさつせへ」ものもいひよでかどがたつ
髪のかざりもだてにはしない「(どうじやうじ) だれに見しよとて
べにかねつきよぞ」みんなおまへにしん中だて「(十八オ)
がらがらびかりとなるかみなりに「(かしゆかた) タだちのあめも
一トふりむまのせを」わけてすゞしきなつ座しき
一夜明れば気も新玉の「(はうた) うめにも春の色そへてわかみづ
くむかふるまゐどおともせわしきとりをいやあさひにしげき人か
はもしやと思ふこいのよく」遠音神楽や門かざり「(十八ウ)
鳥渡おまちと呼止るさへ声を隔てのガラスまで
神の御末と日の本ゆへに猫も狐も紙にほれ
恋の闇路に瓦斯燈てらし晴て咄をして見たい「(十九オ)
門のはしらへナ名札をはつて「(たねまき) なこどを入れてしうげん
の四かいなみかぜおだやかに「(かつら川) おまへにやうにたやゝう
んで」家ぞく二人としるしたい
思ひとゝひて今宵の首尾に「(タギリ) あげくれこひしいつまのか
ほ見るにつれしくはしりより我身をよこにうちかけにひきまたいよ
せたとねて「うれしまぎれにいだきつく」(十九ウ)
せけば意気地でたがひにあつく「(せきのと) つきよもやみもこの
さとへしのびづきんでかうしさきゆきつもどりつ立つくす」人目し
のんであいにゆく

つきよ花よと風流人と「(よしの山)のぢもやまちもしろたへにあ
とふりかへすはつみゆきうきをすがみのいちめがさ」雪をさかなに
ふくべざけ「(二十オ)
人が水さしやなほ切られぬ「すいなうきよにうまれきてしあんのほ
かはよくノのき?はまことのまことより」わたしやどうでもそふ
かくこ
人目つゝみしこのもつれがみ「(かな川)おまへの心のナ夫もつれ
がみなでつけておかふよりいつそさつぱりといはしやんせぬかとい
ふこといなア」どふいふていふにもいわれない「(二十ウ)
私しやどうでもおまへとならば「質置烏金倍利者顛引留」しんくい
とはず共かせぎ
弥生なかばゝよい花見月「(みつくに)さがやおむるのはなざかり
うはきな丁も」うかれくるいの夜るのはな
明治十三年十月十八日御届
浅草馬道町三丁目壱番地角
大橋堂 児玉弥七板「(裏見返し)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

二十四 『開化都々逸』

明治十四年一月廿八日御届。請求番号：特40845。

開化都々逸 全「(表紙)
開化都々逸「(見返し)
ねがひは通らずこがれてやまずどうすりや国会ひらけやう
つらい人目の函谷関はとりのそら音ぢや越へられぬ「(一オ)
いろをもつなら二男はよしな兵隊さわぎでくらうする
ぬしはこゝろのもつかはり縞それにわたしの目くらじま「(一ウ)
あげたぐわんまつ脚下にされてまたもしあんに腕をくむ
ちぎりかけても青鬼灯はいろけのないのでなりにくい「(二オ)
税ですむならかんばんかけて恋路の指南がして見たい
秋の田を刈これから楽とふうふでまいばん露にぬれ「(二ウ)
金銀なくなり飛車たがないと香車もあたまを角ばかり
難波ともあれ停主の五損堂島しやうぞ一トしあん「(三オ)

ぬしとわたしは夜ごとの会議傍聴ゆるすはねこばかり
ぬしの心は空米相場その日その日のできふでき「(三ウ)
どろ水社会とたくさんさうにいへど鯨もおなじ中
傘のしづくで地めんも笑くぼ好にあふたる立ばなし「(四オ)
惚気も情気も十分注でうけさす好のへまはす猪口
闇のすがたで鳥は居れどそのまた口から夜を明す「(四ウ)
つらひながらもつとめて居るよ好なおまへを氣のはりに
あふたその日のこゝろになつてあはぬ其日もくらしたい「(五オ)
いのちまでもと契つた人に帯や衣物(きもの)をこころされた
ぬしを鯨やどぜうとそしるおまへも矢張蟬やいぬ「(五ウ)
つゝむいろさへ香にあらはるゝ春の闇夜の梅の花
おつるなみだをつらつら眺めこれが緒々になればよい「(六オ)
ふいな王手がよこからかゝり金銀なくては防げない
ほれた男をこゝろでかぞへ上等下等をわけて見る「(六ウ)
ぐちをいふのはわたしの癖(くせ)で浮氣するのはぬしのくせ
あはで待夜は水鶏をうらみあへばからすが憎くなる「(七オ)
のぼるはしごもあたりをかねて忍ぶこゝろのおく二階
蕃南(かぼちや) 野郎とかげではいへど放しちやならない金の蔓
(七ウ)
客の寝間へ出てわづかのしゆびに干話やけんくわのいそがしさ
日々に顔見て逢てはぬれどあはぬは上戸と下戸の論「(八オ)
ぬしは上等でわたしは下等人が中等でじやまをする
金銀どころかかみくさへもなくてすゞしき蔵のうち「(八ウ)
すゑを思へば帰さにやならずかへしや水性(うはき)が氣にかゝる
ふけて待夜の身にしむものはそばやの風鈴川千鳥「(九オ)
濃茶のま(ママ)て夜どほしうかせつもるはなしが仕と?たい
につこり笑つたえくぼの中へわたしやこりとはまりこむ「(九ウ)
燈火のくらくなるのは出雲の神かたゞしやくらうのしはじめか
ながい辛抱がやうやうとゞきけふはうれしい菊あはせ「(十オ)
地球儀に似た西瓜を切て二人まへとはよい世界
める障子に倂かげのこし飽まで迷はず月の梅「(十ウ)
恥かしい中は誰しも花だといふが実になりや苦勞の種となる
まゝよまゝよと遊んで居ると粥も食なくなる時節「(一オ)
逢はぬ思案にふさがる胸へ針もくすりも利くものか
徐々(そろそろ) 深みへ這入つて来たど無心の瀬様(せぶみ)に入
た文「(一ウ)

十露盤づくから任せたからだ今ぢやくらうの三のだん
むかし堅気なアノ後家さまに 珍一本食せたい」(二才)
好と嫌ひへ出る二夕座敷実と手くだの早替り
ぬしを待夜は火鉢にもたれいびる炭さへともやつれ」(二ウ)
飴をくはされ鼻毛も髭伸してべたつく助なまづ
智恵の袋を丈夫にせぬいつか遊情が這入こむ」(三才)
白い肌えを誰彼なしに見せて解るよ夏氷
ぬしと私は町村会議愚痴と苦説のはてがない」(三ウ)
恋のやみ路を往(いか)うとすれば親の洋燈(らんぶ)が目光る
好の手紙と国会論は開らいて文句が聞せたい」(四才)
夫といはねどさゝれた猪口に浮ぶ情を汲み交す
知らぬ振りして外(よそ)目で見ればやつぱり他(よそ)目に能く
知れる」(四ウ)
ほんにさうとは思ふて見ても顔みりや未練で懐かしい
恋のみなどの花燈籠を目当に乗こむ浮気船」(五才)
どうせ読れてしまつた鼻毛いまさら抜のはむだなこと
間夫であつたら今うつ鐘を怨むにうれしい否な客」(五ウ)
日曜土曜が毎日つゞきや猫や狐は蔵ずまゐ
硝燈(らんぶ)あたまのシャツツブがとれて浦島太郎の顔ちがひ」(六
才)
玉の輿より私しやみそ漉をさげて苦勞も主のそば
口の車へお客を乗せて恋の重荷を間夫がひく」(六ウ)
うれし涙の雫がつもりふかくなつたる恋のふち
おまへは井の水私しはつるべ深い情はくんで知る」(七才)
不図目を醒して小声になつて風をひくなどゆりおこす
うぬぼれ鏡にむかつて頤(あご)を撫てにつこり実に美だ」(七ウ)
宵の玉子の助けに替て顔見りや無残や洋燈部屋
芸妓(げいしや)する身に休暇はないが間夫にあふ夜を日曜日」(八
才)
運動はよけれどけふ日はよしな米の高いに腹が減る
私しや屁茶でも小町にやました人にすぐれた穴がある」(八ウ)
お金取られて尻むけられてはら太鼓たゝいて夜をあかす
咲た桜に心の駒の狂ふるわの夕げしき」(九才)
悉皆浮気を廃せといへど僕にや女子(をなご)がゆるさない
眠そな顔して瀟々(しよぼしよぼ)雨にまでもふられる朝がへり」
(九ウ)

人目忍べど浮世の外へもれる障子のゆびの穴
酒の座敷の藤八拳は奇妙にうかせる猫じやらし」(十才)
こゝろの底からさも実らしく嘘ぢやないよとそをつき
ほれた黄菊を主しや白菊でいつか十日の菊となる」(十ウ)
猫は歸りて狐はおそい狸きや気をもみはらつゞみ
のんでさわいだ揚句のはてはいつも頭痛のあたま割」(十一才)
おやの目をぬき地獄を買たばちがあたつて鼻がもげ
にくらしいよとよこ目でにらみそして可愛いつねりやう」(十一ウ)
猫や狐は底ぬけ徳利つぎこみやつぎこむ程たりぬ
口説だからとていやならおよしできたためしのないわたし」(十二
才)
いつそ体も手紙に封じ人目の関所を通したい
異見聞き聞き畳のちりをひねつて積では吹き壊し」(十二ウ)
自慢高まんへエンは否身(いやみ)ウフンはこゝろでそらわらひ
小町と弁慶はどつちが馬鹿といつて聞奴ア猶馬鹿だ」(十三才)
多い人目のなかかねてかよはず便りの伝信機
けふから気候な世帯とおもやまゝにならない水かげん」(十三ウ)
もとは泥水そだちと人はいはれないやう禪がけ
世を宇治山だとおもつてゐればお茶をひくのも気にやならぬ」(十
四才)
情死するのは夫りや馬鹿らしい死ば腰から下もがない
えんの糸すぢきるなら断(きり)な堪忍袋もぬひあきた」(十四ウ)
溜た浮気をこれからちらしいららお客へあたまわり
鼻はなくなる横根は残るのこるよこねで二ほん杖」(十五才)
金の為換(かはせ)は銀行なれど色の為換は何所(どこ)でする
客が戒の紙幣(さつ)ひらきれば私もまげずにふくの紙」(十五ウ)
(広告)
御届 明治十四年一月廿八日
「地本絵草紙」問屋
東京日本橋区馬喰町一丁目十五番地
画工兼出版人 多賀甚五郎
定価十銭(裏見返し)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。

二一五 『風流千話文都々一大津絵 上・下』

明治十四年二月十日御届。岡田伴治編。請求番号：特4.233。
下段に文範を示し、上段に都々逸等を記す。ここでは上段のみ翻刻する。

風流千話文都々一大津絵 上(表紙)

顔は見ゆれど互ひにむねを明ていはれぬガラスまで(一オ)
苦らう気がのねを積みかさねたる二等煉瓦のらく住居(一ウ)
葉がき便りじや人めがおほい中を知らせぬふうじ文(二オ)
枕相手に写真をながめぬしとそひ寝をしたころ(二ウ)
そはれにや死ぬとは開けぬことよ命ありやこそすえもある(三オ)
新聞へ出されたときには恨んだものゝ斯なりやふたりのむすぶ神(三ウ)

(三ウ)

かうなりや別れがまた惜くなるよけたはなしの雪の朝(四オ)

待夜の長さを四時間つめて逢よのみぢかいたしまいに(四ウ)

以後のあは気は罰金ときめて是まで仕たのはおとり消(五オ)

塵積で山となるほど借財したも三味の調子にのつたばち(五ウ)

くちの車え野暮をばのせてそして三すぢの糸でひく(六オ)

こゝろうち解下紐までもとけてかたらふすいた同志(六ウ)

風のまにまにアノ浮草はきしを定めず花がさく(七オ)

同じ人でもお客と車夫は車へ乗す人曳すひと(七ウ)

おぼる月夜がさらりとはれて忍ぶ恋路の邪魔をする(八オ)

赤いしかけで迷はずものはこひの手管の教導師(八ウ)

アレサおよしとはらつた手さきいつか枕のしたになる(九オ)

ひたとよりそひ脱身をにぎり殺しておくれと鼻でいき(九ウ)

(広告)

明治十四年二月十日出版御届

編輯兼出版

浅草北松山街十五番地

岡田伴治版

定価貳銭五厘(裏見返し)

風流千話文都々一大津絵 下(表紙)

うそじやないよとことわるだけに猶もうたぐる胸のうち(一オ)

大津絵魚づくし

日本ばしの買出しは天秤棒のたこができくらげかせぎます(一ウ)

呼でうるめのこひかれい足もぼうだらはらすきみ酒の味もしらすば

しいかにもせいごがつきはてゝ干物になつてかごひじきけふもまた

米の価もまうけねばさぞやかゝめがぶくのやうになつてふくれや

う(二オ)

大つゑ青物づくし

いもがあるせよがにてほうれんさうのよこれんこ飽てまでも(二

ウ)たでとほす私がこたつ竹の子をもやしいもむかふではさわらひ

で白髪へこぶなすのえんげんで此やうにとうなすで夕顔もみつばに

ておまへのねぎえよれなかる一年いもでもよめなになつたらみよう

がたる(三オ)

大津絵花尽し

そとにたち花格子にぼたん内の様子を菊のはなちわぶみをかきつば

た(二ウ)まぢまぢさつにたよりする心をばつくづくし山吹の色

ましてあやめもわかぬ恋の暗(やみ)みはひめゆりのひと筋に思ひ

草男のこゝろはばらの花ゆふ顔だにはまねくお花とねぶのはな(

四オ)

大津ゑむしづくし

いとゞさへみのむしの君を松虫ひとり虫ふけるまで鈴むしにちやた

て虫にてよを明し顔さへもみつばちほたるにてみをこがし私の心を

すいちやう男のこころは秋の蝉鳴くらしありの思ひも(四ウ)て

んと虫すいなおかたのさいかち虫でさんしよむし(五オ)

大つゑ町名づくし

吉原の大一座さけの上野にかほ赤坂芸者しうが三味線堀新ぞかむろ

が築地にておちやうしはめい神田相生橋とさ須賀町花川と鐘がふち

ひけの四ツ谷が鳴子まちどこに根津あさ草ならぬ深がはに浜町麴町

て末にや田原町檜物町(五ウ)

(絵)(六オ)

大つゑ川づくし

ふたりいつしよにすみだがはいつあいそめ川の玉がはにうきなども

立田川互ひの思ひは深川やきだてこそ江ど川のすゑにてみがきあ

げ私はおまへに浜がはとかはらぬ中川今がはのすへになり若も心が

かはつたらひ高がはの大じやと成て追かける(六ウ)

(絵)(七オ)

大つ絵舟づくし

柳橋から舟にのり吉原まちへよぶねにてあとをひき船にかよひ舟主

大つ絵舟づくし

柳橋から舟にのり吉原まちへよぶねにてあとをひき船にかよひ舟主

大つ絵舟づくし

柳橋から舟にのり吉原まちへよぶねにてあとをひき船にかよひ舟主

大つ絵舟づくし

柳橋から舟にのり吉原まちへよぶねにてあとをひき船にかよひ舟主

をたよりの渡船宝だねの水さしでしん実を明石丸うちては様子を
るこほしいか成天？が？入しとい見すりや親松の小ごとを茶船にや
つかい丸のおつかさんがおもち取まする」(七ウ)

(絵) (八オ)

大つ系材木づくし
大くさんがまぶになりおまへの便り松板に木しなをばもみのかくい
けんされて」(八ウ)もぬかにくぎしろものをかしのきでさけはの
みぬけ杉のいた顔をつくづくみつめぎりそれではおまへのむねのあ
げがわるからうあしばをだしておやかたにこゝとを聞のもいつもの
ふちやでへノヘタヨ」(九オ)

いまの苦らうもしばしのあいだ昔がたりのたねとなる」(九ウ)

(広告)

明治十四年二月十日出版御届
編輯兼出版
浅草北松山街十五番地
岡田伴治版
定価式錢五厘」(裏見返し)

二十六 『千金丹吹寄都々一』

明治十四年二月廿一日御届。長谷川忠兵衛編。請求番号・特44158。

千金丹吹寄都々一」(表紙)

長谷川梓」(見返し)

大つ系

ぐわんそは大きなあづちまのぶやまかでのせんきんたんその
またくすりのこのうはだひひをとゝのへてむねはらいたみに
ひやくなやみづつにめまいたちくらみたんせきしやくつかへまた
はりやあんせうにのむしとこ系そろへふたりみたりとつれだちてか
うもりがさに手にはかばんさげてちまたをうりあるく」(一オ)

おなじく
かんだはなだいのやなぎわらてんぐやかでんのせんきんたんこのま

たおくはしのこしらへはだいはたいはくかんざらしやはらかにては
につかずだひ一ひぬをとゝのへてたんせきはらくすり子どものなく
のにあてがへばぢきだまるさアサおかひとしやべりたてそるひのい
でたちづきんかぶつてうりあるく」(一ウ)

おなじく

ぐはんそまんきつのはれおどりさみせんたいこでにぎやかにた
いこがなつたらばにぎやかだほんにさうならすまないとあかいて
ぬぐひほふかむりあふぎをさつとひらきてあしをうごかしてへれへ
れへエのはらはアとくびをふりおどりますてうしとりはや
したてきやくはやまなすまんきつぼうずのおはこもの」(二オ)

おなじく

あんけはたつぶりなあづきもちのむらのかせいのむらさめおこしふ
なばしよかんは上しんでかにやなだいのまつかぜせんべふうげ
つのまんぢうにゑいたらうのあまなつとうまつやのしんせいおくは
しするこはたるまにきはらだなふきやちやうだんご大橋にしのおくほ
おはぎはしんばしすだのめいぶつさくらもち」(二ウ)

おなじく

かいくはのよのなかはかしたものはのきにはひのまるのはたをた
てにちようがそんはいびいかいきやうしきやちやうちんまつりゆう
びんはがきたよりはんげんぶくのごんさいふうはやいてりがらふく
はつじのひきふだしんぶんしみなさんがさんばつあたままでひげはや
しせいようりやうりにうしにくようしゆにこほりみづ」(三オ)

おなじく

たうじはやりのくわしうりはかしらにはんだいそめ小そでしよかい
だいらよにほうねんおこしてんぐやちりうのあめくはしはづきん
でかさをさしみないちやうのはこをさげまちまちようりあるくへら
へらおこしはあかてぬぐひほうかむりあふぎをひらいて子をまねぐ
だいごくいだてたてかねやたいこでちゃんがらんのどん」(三ウ)

おなじく

あさくさおくやまのにぎはむかしもいまもかはりなくやうきう
ばみづちややしんみせものごやはのきならびなんきんのはやは
ざにかめるのげいづくしあぶらゑの大めがねやすもとおやこのめ
いさくのいきにんぎやうなかにもめにたつさんごじゆのにんぎやう
はびをつくしまめさうのかごぬけはやてじな」(四オ)

おなじく

あかいてぬぐひへれへれおどりまんきつぼうずのおはこもの

とうじはやりのせんきんたんはおほさかひろしまいづがはら(四ウ)
子どもあつめておどりのてまねへれおこしのあかあぶぎ
てんぐやーりうせんきんとうはだいはたいはくはらぐすり(五ウ)
どいづ
わしがよわたりやばかげていれど「たいこがなつたらにぎやかだア
ヨほんどにそふならすまないよヲへれへエのどつこいしよのへエ、
と」いはなきやおきやくのきにいらぬ(五ウ)
どいづ
あかいあぶぎにてぬぐひかむり(角兵へ)かぐらはやしてまちま
ちめぐるおなじよわたりうめさくらこつたひはやしてくわしをうる
(六オ)
どいづ
うしろはちまきはんもゝひきで(さがやおむる)はなはえんやう
がえんじのはなはひくけれど「いづれおとらぬうでくらべ(六ウ)
といづ
主のうはきをわしやくにやんで(ことば)ぐはんそはたいしうい
づがはらすみながかでのせんきんたんそのまたくすりのかうのう
はだい一ひゑをとゝのへたんせきりういんしよくつかへ」づゝうめ
まいやしやくのたね(七オ)
さむさいとはず身はかちはだし「ぐわんそはかんだやなぎわらてん
ぐやいちりう千金とうそのまたおくはしのこしらへはだいはたいは
くかんざらし」ぎやうゑいちかんかんまいり(七ウ)
かつぼれ
せきイのヲ、かうぎアにイ、へれへれが見イへるあかいてエぬウぐ
ウイ ヤレヨノこれわいサまんきつじや エ、まんきイつウまん
きイつウナア、ヨイトコラサうしろはアチいまアきヤレコノす
てゝこサえんやうじやエ、(八オ)
おなじく
まちイにイ、そろひてエ、ちらほらア、云へるあれはせエんき
インたアンヤレコノアレハノサくすりうりじやアエ、くすりうりう
りジャアエ、ヨイトコラサあれはおほさアかヤレコノひろしま
さいづがはらじやアエ、(八ウ)
どいづ
てにはかうもりかばんをさげてくはんそははやりの干きんたん

とうじはやりのせんきんたんはくぎぬきわちがひさうほんけ(九オ)
どいづ
てんぐやーりうあめくはしうりはつきんそろひのはでぬしやう
あかいてぬぐひへれへれおどりあかいあぶぎできやくをよぶ(九ウ)
おなじく
あまいかほしてたいこをたゝきうまくうりますとうがらし
あさくさおくやまにがほのにんぎやうかめはちおやこのうでくら
べ(十オ)
おなじく
いまのはやりはごんさいふら？ばしやにじんりきしんぶんし
編輯兼出版人 神田区鍛冶丁六番地
御届明治十四年二月廿一日 長谷川忠兵衛
定価二銭(十ウ)
本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
裁定のもと、公開されている。
二十七 『新文句開化都々一 第七号』
明治十四年五月十一日御届。長谷川作治郎編。請求番号：特43253。
新文句開化都々一 第一号
板元 神田区通新石町十二番地清水屋(表紙)
旦那は上等私は下等人が中等で邪魔をする
まわるちきうにいかりをかけてしばしとめたき明のそら
願ひかなふてやれうれしやおもふまもなく御免職(一オ)
君の写真を扇子にはりて風のたよりを待ばかり
芸者かん札へん上とげて御側ではなげをかぞへたい
円ひをかねと四角な札があれば晦日にしちがでる(一ウ)
ぬしの心のくるはぬよふに神に願ひをかけ時計
歩と飛車ゑんから角なりそめてきのふ香車にます苦勞
口の車へやぼめをのせてそめて三筋の糸で引く(二オ)
ぬしにもらふたかたみの写真ねるまもはなしてなるものか

二十八『開化』辻笹都々一 乾・坤
明治十四年八月一日刊。室直三郎編。請求番号：特44179。

〔開化〕辻笹都々一 乾（表紙）
つづうら都々一（見返し）

世の開くるにしたがひて都鄙の芸妓も旧き都々逸はやばなりとて当世流行の新都々一を三絃にあわして唱ふれば流石の紳縉様方も手拍子を打ち声やぶり鉢を叩きて浮かれずといふことなし今団々珍々の中より一妓撰の仇文句を集めて此小冊を思ひつき加るに絵を以てし辻占家の御愛敬に供ふも下手の射る駒矢の如くにはならず善悪吉凶皆悉当る猶微細なる事を見ると思さば後編を求めて照合したまへかし

編者しるす（序才）

うらないの見やうはこの卦のところをいだし置目をふさぎ本を三度まわし下におきかんざしにても小やうじにても有あわせしものを卦の上へおとしそのおとしたるものゝ先のあたりたるところの（卦）をわが得たる卦とさだめその卦のところをくりいだし見るべし又さんぎ六本を手のうちにて三度まわし下より書本づゝ目をふさぎだんだん上へならべその卦をわがいたる卦とさだめよ然れども前編は三十二卦をのせたるものゆへかならず後編求め照合せずば出来（できぬ）とするべし

また錢にて占ふも前とおなじ は字 は波なりやはり錢を六文手の内にて三度ふり目をふさぎ書文づゝ下より上をならべ？こわまへのしかたことならず（序ウ）
（次の一丁分省略）（目次才・ウ）

乾为天
進む開化の明るい御代をくろふするの御前故（一才）

坤為地

水さす位で薄くはならぬ煎じ詰たる中だもの（一ウ）

水雷屯

親が不服で添せぬならば原告二人で出訴する（二才）

山水蒙

寝間も書案（つくえ）をはなれず勉強今じゃ美人の膝枕（二ウ）

水天需
胸に焚火で涙をせんじ癩に吞して居るつらさ（三才）

天水訟

鬚を延して女猫をぢやらし洒落りや鼻毛がまた延る（三ウ）

地水師

如何程此身が忍耐しても将来見込のない足下（四才）

水地比

吸付煙草につい浮されて人の意見が煙（け）ぶく成（四ウ）

風天小畜

ほれたと思ふは診察（おみたて）ちがひわたしやさじをば投ている（五才）

天沢履

早く某方（そなた）をワイフと極て家族二人と届けたい（五ウ）

地天泰

顔は見ゆれど互の胸は明て言はれぬ硝子窓（六才）

天地否

印紙はつたる私の体だ二重抵当にや成はせぬ（六ウ）

天火同人

たまに逢ふ夜は話がつもりかへる道ない今朝の雪（七才）

火天大有

たつた一協議（ひとこと）とゞいたならば斯（こつ）した訴訟（くぜつ）は有やせまい（七ウ）

地山謙

主の権利を束縛せずさまこと尽すは妻の義務（八才）

雷地予

主と添身を育て呉た親なら孝行せにや成ぬ（八ウ）

沢雷随

ほれたほの字の一点とればはれた御前のつまじやもの（九才）

山風蠱

笑顔で勉める二人の御客何方（どちら）え落るか此眉毛（九ウ）

地沢臨

貞女たてたし浮気はしたしこゝろ二つに穴一ツ（十才）

風地觀

後年（のち）をおもふて節儉さんせ結局（けつか）浮気は不経済（十ウ）

火雷噬

（口+蓋）

主の帰りの遅さに私しや堪忍袋のつぎ仕事」(十一才)
山火賁
恋のふち瀬に身を投嶋田浮くも沈むも主次第」(十一ウ)
山地剥
叶はぬ恋だと知ては居れど何様(どふ)せ斯(こう)成りや命がけ」
(十二才)
地雷復
算盤のよふに妾(わたし)は弾(はぢか)れながらぬしにおもへを
かけている」(十二ウ)
天雷無妄
迷ふも浮世に悟るもうきよ程よく迷ふてよく悟れ」(十三才)
山天大畜
手枕に夢も結ばぬ短かい契り立る甲斐なき我浮名」(十三ウ)
山雷頤
今日と思へばまた飛鳥川淵瀬定めのない御前」(十四才)
沢風大過
お前が然した胡麻?(ごまくわし)云へば私しやお臍で茶を沸す」
(十四ウ)
坎為水
腹が痛くて丸薬かんでいやなお客に苦わらひ」(十五才)
離為火
子まで有中引別られてやつれ果たよ干芋茎(ほしずいき)」(十五
ウ)
沢山咸
及ば無とは夫や気が弱い勉強次第で物は成る」(十六才)
雷風恒
あれさ御止(およ)しと払た手先いつか枕のしたになる」(十六ウ)
〔開化〕辻笹都々一 坤」(表紙)
つづららどいっ」(見返し)
(一丁分省略)」(目次オ・ウ)
天山遯
持被(もちかけ)られても乗れぬ物は他の女房と口ぐるま」(十七
才)
雷天大壮
問夫へ盃扨悟られまいと指(さし)て赤らむ気の咎め」(十七ウ)

火地雷晋
貧乏しなけりや貞女がしれぬこれから二人が実くらべ」(十八才)
地火明夷
親の小言も茶にするお前女房の意見は水の泡」(十八ウ)
風火家人
親の裁判不服を言はず然して立たい主に情」(十九才)
火沢 (目+癸)
道でない事は知つてはいれど今更切られぬ好たどし」(十九ウ)
水山蹇
不自由こらへて勉強すれば未は自由に成るからだ」(二十才)
雷水解
文書く手さへも廻らぬ私し何してお前に抱付りよ」(二十ウ)
山沢損
主の此頃顔向せぬは胸に焚火でけむへのか」(二十一才)
風雷益
今の此身を写真にとらせぬしに見せたいやつれ顔」(二十一ウ)
沢天夬
口も軽いがお尻もかるい夫でも娠(はら)めば身の重り」(二十一
才)
天風 (女+后)
彼人ひとりと定めた外に浮気やその座の繰まはし」(二十二ウ)
沢地萃
金のなる木はかたぎにかせぎ辛抱つよきに根(こん)のよ木」(二
十三才)
地風升
芸者ふぜいの賤しい此身もつたないぞへ膝枕」(二十三ウ)
沢水困
こゝろ蒸気の燃たつ時は胸に千尋の波が打」(二十四才)
水風井
入替(いれかへ)曳かへ客乗(のせ)るのも浮た渡しの舟だから」
(二十四ウ)
沢火革
墨に思ひの恋路を籠て薫りもらさぬ状袋」(二十五才)
火風鼎
諦めませうぞ最御互にいろ増や紅葉も散計り」(二十五ウ)
震為雷

猫を抱寐の栄花（いへぐは）の夢は地震で破れて目がさえる（二十六才）
 良為山
 仰せ一々もつともなれど虫が不服で惚られぬ（二十六ウ）
 風山漸
 凹（あふ）て凸（とつ）くり話したうへでどうか 凹（いつしよ）
 に暮し度（二十七才）
 雷沢帰妹
 ついだ播鉢はなれた夫婦またとすること出来はせぬ（二十七ウ）
 雷火豊
 格子のうちから声かけられて読んだ論語も何処へやら（二十八才）
 火山旅
 更に詮議の次第もあらば極た誓紙は御取消し（二十八ウ）
 巽為風
 目元に紅葉の愛敬もたせ鹿と返事が出来かねる（二十九才）
 兌為沢
 ひとと寄そひ抜身を握り殺してお呉と鼻で息（二十九ウ）
 風水渙
 苦界退（のが）れし身は釣鐘よ君に撞（つか）れて権（ごん）となる（三十才）
 水沢節
 堅いお前とおもひの外に見掛計りの夏氷り（三十ウ）
 風沢中孚
 誘ふ春風水は解て嬉しや気俣に開く梅（三十一才）
 雷山小過
 一寸顔見せ亦雲がくれ主は私に秋の月（三十一ウ）
 水既済
 秋の天気と御前のこゝろかはりかはりて又変る（三十二才）
 火水未済
 鳥渡の苦舌が遂摺あふてクワツト燃たつ早附木（三十二ウ）
 （一丁分省略）（三十三才・ウ）
 明治十四年巳七月十八日出版御届 定価金六銭五厘
 同八月一日刻成
 新潟県平民
 室直三郎
 編輯兼出版人 中頸城郡高田稲田鍛冶町四十四番地（裏見返し）

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官
 裁定のもと、公開されている。

二十九「吹寄 一・二・三」

明治十四年九月御届。小野口藤三郎編。請求番号：特4-203。都々
 逸以外は省略する。

葉うた都々いつ大つゑぶし

篇集出版人

京橋区八町堀仲丁三番地

小野口藤三郎

端哥之吹寄

定価式錢五厘（表紙）

向ふはち巻片はだぬいで（キヤリ）わかまつさまよコリヤドラシ
 タエえだもさかへてサはもしげるヨイサヤレコラナえだもさかへて
 サはもしげるはもしげる「そでくだをばまきばしら」（四才）
 さかづき手にかほうちながめ（しのぶうり）たしなんで見てもわ
 すられぬ「目前（めさき）にちらつく主のかほ」（四ウ）
 わたしのとなりに着やがござる「うめのはるかへうた」かすり
 のきものゑもんだけ「縞じやたびたびくらうする」（八ウ）
 うちのかもめに番号しるし（三ば）なごをたつてしうげんの（お
 はん）一日なりともめうとなつておまゑによぶにたやううんで
 家族二人と門のふだ（九才）
 幾世久しく名も高砂のともにしらがの尉とうば
 鶴と龜とのよわいをこめて千代もかはらぬともしらが（九ウ）
 羅生門よりみそかがこわい鬼が金札とりに来る
 人力車夫とて馬鹿にせぬものよ神の御末の兄おと（十才）
 御届明治十四年九月 日
 篇集出版人
 小野口藤三郎
 京橋区八町堀仲丁二番地
 定価式錢五厘（裏見返し）
 端宇多都々逸大津会吹寄

編集出版

八丁ぼり仲丁

小野ぐち藤三らう(表紙)

(ドッ一字あまり)桜さくさくらのもとに酒がなけりやア花見にならぬ僕もこのとし月色がなけりやアこの世にうまれたかひがない(四才)

(同)ちよつと見りやくろいもの明て見りやまつかなものしてみりやけつかふなものを皆さんおすきな御公家さるくの哥がるた(四才)しんの夜なかにふとめをさまし(はうた)おとするものはかねばかり来ぬ夜かふじてしやくのたね(五才)

おくのなかにて見そめたおまへ(おそめ)いろのいのじのおつしやうさん(ほんにうれしいきやうしさん(五才)西洋りやうり)でこなして置いてしみたあぶらの肉布とん

盃もつてもついでさしかねておもはぬおかたに思ひざし(十才)

かほみた計りで気がすむならば検査のお医者はんじんきよする

親にも見せない大事なところを自由にするのは検査いしや(十才)

御届明治十四年九月 日

篇集出版人

小野口藤三郎

京橋区八町堀仲丁二番地

定価貳銭五厘(裏見返し)

はうたきやり大つゑ都々一文句入二上り本てうしふき寄(表紙)わすか三はゞのふとんの上で(うめがは)たがひに手さきふところへあたゝめられつあたゝめつ)ぢさまとばさまがひわけんくわ(四才)

ねがほに見とれてまくらにもたれ(ひとのこゝろもしらうめや)ほれてもよいかと一人りごと(四才)

くちも八町お尻も早いすこしのろいが針仕事

ばちを手に糸針もたせ縫てやりたい記者のくち(五才)

美しく咲てみせてもはらある花はうかつに手を出しやけがをする

花にうかれたうわさも夢ときへてあとなき明のかね(五才)

招くぼたるは向ふへとんでいやがる蚊が来て身をせめる

文明と啼はよけれどさすのはよしなおまへも開蚊の虫じゃぞへ(七才)

夢でなりとも逢たいものよゆめじや浮名も立やせまい

先がさきならあはずにめてもそばにいる気でしんぼうする(七才)

はりもつ手わざはましよくに合ぬなれた三筋の糸がよい

口も軽いがおしりもかるいそれでまはらめば身がおもい(八才)

竹にはなれてアノむらすゞめ雪の寝ぐらはまたほかに

雪となかよく寝ている竹を来ては雀がゆりおこす(八才)

竹の花筒手活にしても太く短いづんどぎり

人は白梅手活の床に一人りながめる水入らず(十才)

洋金(あるみ)の指輪はなくなり安いわたしの地金は齒の光り

根が鉄じゃもみのがとごが時々うはきなさびが出る(十才)

御届明治十四年九月 日

篇集出版人

小野口藤三郎

京橋区八町堀仲丁二番地

定価貳銭五厘(裏見返し)

本書は国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長官裁定のもと、公開されている。

三十『新撰百々逸 初篇・二篇』

明治十四年十二月八日・明治十五年一月廿一日御届。石井虎吉編。

請求番号：特60-7。

新撰百々逸 初篇(表紙)

新撰百々逸(見返し)

とうに根びぎになしてもみたい名さへゆかしき姫小松(一才)

どんな苦勞があつたりともおまへひとりにさせやせぬ(一才)

今がいまとてせくのじやないが善はいそげと人がいふ(二才)

死のふと思ふたこのかみそりでまゆげおとすとはしらなんだ(二才)

鹿と相談まだせぬうちわしはひとりで氣を紅葉(三才)

みがく二人りがこゝろのうちはさびはしませぬ袖かゞみ(三才)

名にはたてどもいもせの山の中はつれなきよし野川(四才)

枝についたるまゆ玉さへも春はぶらつく柳しま(四才)

とつた嫁菜のしたしい中も時がたつてはまづくなる(五才)

どうか首尾して逢ふとすれどすんだ水かやおりがない(五才)

ひとりねる夜は二人がさびしほんにしんきなことじやない(六オ)
 やぼなわたしもすむ土地がらにつれてめをふく柳ばし(六ウ)
 むしが心が深川なれば万年町もかはりやせぬ(七オ)
 泥にそだつと安くはいへどしみはせぬぞへ池の蓮(七ウ)
 人めしの手で手にとるふみはひらきかねたる室のうめ(八オ)
 よかれあしかれこの身を入れてわしが折紙つけた人(八ウ)
 芝居がへりの口舌もすみてあれだんまりな舟のうち(九オ)
 智恵もあさりな馬鹿貝なれど見かへられてはむきになる(九ウ)
 不二や筑波の高さはみれど見えぬたかさは恋の山(十オ)
 軒に下げたるあの風鈴も銭がなくてはなりはせぬ(十ウ)
 深山がくれの此おそざくら手折るおかたはめしばかり(十一オ)
 川といふ字にねるのはいづが先へたつのが丸いもの(十一ウ)
 はやくお店の通きんやめてぬしと一所に寝てみたい(十二オ)
 月はまんまとさしてはゐるがたよるおかたは居はせぬ(十二ウ)
 調子はづれのおかたにほれてばちがあたるが切れはせぬ(十三オ)
 うすいべらでも沢山もてばおもくみへるは人の品(十三ウ)
 こけなわたしとおい羽根こばね持上られては又はづむ(十四オ)
 なるふ事なら辻つま合せきせて出したい人の中(十四ウ)
 まゝになるなら石炭酸でほれるおかたを防ぎたい(十五オ)
 けふは上野に日暮し飛鳥花にうかれてむかふ嶋(十五ウ)
 別(はなれ)座敷でひく三味せんも君を待夜は忍びこま(十六オ)
 おまゑもお上へつとめの身分はらだち顔すりや気にかゝる(十六ウ)
 はでやうはきでした事ならばぢみな苦勞はさせはせぬ(十七オ)
 様子きがねはさぞにくかるふそれにやだんだんわけがある(十七ウ)
 まよひはじめのもふほれじまいゆくさきさき迄きればせぬ(十八オ)
 主のこゝろがきまらぬゆへにわたしひとりで気がもめる(十八ウ)
 逢ふた初手からこれこのやうに顔に紅葉のはづかしさ(十九オ)
 あふはたまさかあはぬは常よぬしのたよりをきくの花(十九ウ)
 立てば柳に居ればあやめ年は二八の花ざかり(二十オ)
 忍ぶ心はこのむらさきの色で楽しむ杜若(二十ウ)
 明治十四年十二月八日御届
 全 十二月 出版
 定価七銭

編輯兼出版人
 日本橋区高砂町十二番地
 石井虎吉
 売捌人
 舟田彦兵衛(裏見返し)
 新撰都々(二編)(表紙)
 新撰都々(見返し)
 互にねがふて少しもはやくまゝになりたや(れい)参り(一オ)
 初手は左ほどに思ひもせぬが兔にかくあんじる事ばかり(一ウ)
 義理も人情もけふ此ごろはすて逢たい事ばかり(二オ)
 懐中時計のくさりじやれて胸の器械をくるはせる(二ウ)
 包みかくした二人が中をいつか書だす新聞紙(三オ)
 下紐を解てねた様なうれしい夢を又もむすばるいわた帯(三ウ)
 とも綱切られて身はうき舟よそばにうちとる人もある(四オ)
 まゝにならねば願酒の事もいつかわすれて茶わんざけ(四ウ)
 うき名たつのも新聞ゆへかぬしと私のまくら紙(五オ)
 ぢれつたいほどなせ此よふにほれたわたしの気がしれぬ(五ウ)
 末に添ふのはそりや縁づくよ当座あわずにぬられうか(六オ)
 捨る神ありやたすけるかみがなまぢあるゆへ気がもめる(六ウ)
 東京なまりといわんすければ只さへ人目の多い口(七オ)
 あれさお待よ硝子であれば只さへ人目の多い口(七ウ)
 論はないぞへほれたがわるいどんな無理でもいはしやんせ(八オ)
 そいとげる人もはじめはふとした事よほれたがゑんではあるまい
 か(八ウ)
 明のからすと新聞記者とにくらしいぞへ人のくち(九オ)
 しやくられしやくられきれても見たがまたも結ばる風のいと(九ウ)
 口じやいわれぬこゝろでほめて目ではおもひをかよはせる(十オ)
 むしは猶さら二人りの親はぬしを産たる人じやもの(十ウ)
 東京はなれてくらすも時節すいたおまへともかせぎ(十一オ)
 人力曳てもこんどの事はひくにひかれぬ恋の意ち(十一ウ)
 むしのこゝろの狂はぬよふに神にねがひを掛時計(十二オ)
 冬の長夜を千代までかさねそして二人りで寝て見たい(十二ウ)
 こぼれ松葉とつわきなこてふつがひはなれぬ中を見や(十三オ)
 しのびがへしをそなたにもたせ夢でありしが明がらす(十三ウ)

まかせぬこの身をかんにんさんせ実も不実となるならひ(十四才)
 人もかうかと身にひきくらべ野暮なりんきのちわけんくは(十四
 ウ)
 つもる咄しは世間もしんと目がねばしにもよるの雪(十五才)
 遠くはなれてたよりもないが操立ますあく迄も(十五ウ)
 苦勞するのもおまへの事と鳥かげさしても立てみる(十六才)
 すとしまおふかおまへの写真いふてみれんですてられぬ(十六
 ウ)
 つらいかなしい人めをしのび今ははれたる夫婦中(十七才)
 猫やきつねにはな毛をぬかす今じや馬鹿らし御免職(十七ウ)
 化した尻尾のうしろをみせてはなるゝ狐に大欠び(十八才)
 君もこの俣枯(ママ)にならば土におもひの根を残す(十八ウ)
 人は逢はねばさめるといふがわたしやあわねば猶つる(十九才)
 せめてかた時おまへの事をわすれて勤がして見たい(十九ウ)
 晴て君たと祝言さへも丸くすみ絵の松の月(二十才)
 じれて喰付小指の先もかげんするのが恋の情(二十ウ)
 まゝになるなら恋路のくろふさらりとやめたい西のうみ(二十一
 才)
 ぬしの写真を扇にはつて風のたよりをまつ計(二十一ウ)
 早くおまゑを親にもあはせ末をたのむといはせたい(二十二才)
 月はまんまん閨までさすがどこにゐるやらかただより(二十二ウ)
 早くやめたい通ふもよぶも待もわかれもないよふに(二十三才)
 ちよいとつまんで広げて入てしろい水だすぬか袋(二十三ウ)
 いさみなおかたも開化につれて咄すはなしも君や僕(二十四才)
 遠ざからせて辛防させてはれてだき寝がして見たい(二十四ウ)
 まゝになるなら何このよふにくろふしもせずさせもせぬ(二十五
 才)
 人の花なら手だしもできぬならぬてだしがして見たい(二十五ウ)
 四かく四面のおかたである無事であるめる口車(二十六才)
 うすいべらでも新聞上であつく礼いふめぐみ物(二十六ウ)
 海山こへてもたよりはできるきれちやいやだよでん信機(二十七
 才)
 書にかゝれぬほれたの三字けすにけされぬぎりの二字(二十七ウ)
 あらましはなしはしてわかれたがとかくあんじるさきのむね(二
 十八才)
 逢ずくらすもたがひのためよ人めおほけりやぜひがない(二十八

ウ)
 土地ではきゝのおかたをたのみわけのつくよにしてみせる(二十
 九才)
 やけになるのもしんぼうするも皆おまゑのむねひとつ(二十九ウ)
 雪の肌になびきし竹のとげてうれしい我がしよたい(三十才)
 そなたばかりにくろふはさせぬどんな暮しもとも稼ぎ(三十ウ)
 君や僕じやと開化をしても恋路に開化は出来はせぬ(三十一才)
 そなたばかりにくろふはさせぬそはばたがひにくろふする(三十
 一ウ)
 明治十五年一月廿一日御届
 全 二月 出版
 編輯兼出版人
 日本橋区高砂町十二番地
 石井虎吉
 売捌
 舟田彦兵衛(裏見返し)
 本書は、国会図書館「近代デジタルライブラリー」で、文化庁長
 官裁定のもと、公開されている。